

オーバーロード～死の王と幻影の王～

ミズナラ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ユグドラシルをモモンガと共に引退せずナザリックに残っていたオリキャラが出てくる話です。

原作のストーリー進行に沿って進みますが原作とは違ったストーリーになります。

オリジナルの魔法やスキルが稀に出てきます。

原作のキャラは出てきませんがオリキャラメインで話が進みます。

目次

プロローグ

1

1話

6

2話

13

3話

21

4話

36

5話

47

6話

68

7話

79

8話

89

9話

98

10話

112

11話

122

12話

144

13話

148

14話

160

15話

163

16話

168

17話

173

18話

182

19話

185

20話

193

21話

202

22話

210

23話

215

2
7
話

2
6
話

2
5
話

2
4
話

237 232 224 220

プロローグ

「またどこかでお会いしましょう…か」

その言葉を今まで何回聞いてきたのだろうか、ギルドに所属していたメンバーだけでなく何度か共闘したギルドのメンバー達からも聞いた言葉だ。

だが誰一人として戻ってきた者など居なかった。

モモンガはリアルに親しい友人が居る訳でもなく、ギルドマスターであり思い入れの強い『アインズ・ウール・ゴウン』を潰させないために維持してきたのだ。

「はあ…仕方ない…仕方ないんだよな…」

モモンガも頭では理解しているのだ、みんなリアルがある。

「そういうえば今日あの人はまだ来てないのかな？皆勤賞の人にしてはめずら『ピ——』っと噂をすれば」

モモンガが思いに浸っているとアラームのような音が鳴った。

アインズ・ウール・ゴウンのメンバーの殆どが引退と脱退をした中モモンガと共にギルドに残り今までやってきた仲間が独り居るのだ。

「こんばんは、レオンさん」

「こんばんはーお疲れ様ですー」

その名を『レオン・D・ファンシヨン』種族はドツペルゲンガーである。

「今日は如何されたんですか？ナザリックには居ないみたいですけど」

「あー実は市場の方に来てるんですよ、今日でサービス終了って事で色々なプレイヤーが 自分達の所持してる武器やらナニやらを売りに出してるんで買い物に来てるんです」

何か1つニュアンスが違ったような気もするがモモンガはあえてスルーすることに。

「なるほど、サービス終了だから自分達の作った武器や防具を見せたい売りたいって事ですね…でもレオンさん、サービス終了したら意味

無いのに『買い物』に行ってるんですか?」

「そうですね、いやーみんな色々売ってるもんですね、課金アイテムを格安で売ってる知り合いが居たんで交渉して大人買いしてしまいましたよ。え?意味?…はっはっは!」

そう、意味が無くなるのは自分も同じなのだがそんな事は気にせず買い物を楽しんでいるようだ、むしろ安く珍しいアイテムとかを格安で手に入れてラッキー程度に考えている。

「はあ、課金アイテムも有るんですか、興味は惹かれますがもう時間的にそっちに行くのは面倒ですね、此方には戻られるんですよね?」

「ええサービス終了はナザリックでモモンガ君と一緒に迎えるつもりですよ、そこでお願いなんですが玉座の間で待っていてもらって構いませんか?」

「わかりましたでは玉座の間で待ってますね。けどなんで玉座なんですか?」

「え?そりゃあ最後のときはナザリック最深部でどっしり構えて終わりたいじゃないですか」

「どっしり構えて、とか言ってる人がナザリックにまだ居ないですよ?」

「まじすか?かつこよく終わりたい、有終の美を飾りたいとか言ってるのに最後の最後に駆け込んで行くような馬鹿がいるんですか?情けないっいたらありやしないですね!」

「それフラグじゃないですよね?」

「…大丈夫だよ…うん、ダイジョウブだよ?」

「不安しかありませんよ!?!…:…まあ玉座の間で待っていますからちやんと来ててくださいね?」

「大丈夫大丈夫、後数軒見たらそっちに行くから、それじゃまた後でー」

そこでメッセージは途切れた

「不安しかありませんよレオンさん…でも俺もそろそろ移動しとかないと、どっしりって言ってたんだから俺も先に行って待ってよう」

そう言うともモンガは玉座の間に移動を始めた。

玉座の間に着いたモモンガを待っていたのは純白のドレスをまとった美しい女性アルベドであった。モモンガはここに来るまでにセバスやプレアデスを引き連れていた。

「ふむ…セバスたちはここまでかな？待機」

玉座へ続く階段の手前にセバス達を待たせモモンガは階段を上がり玉座に座る。

「レオンさんはまだ来ない…本当にフラグおつたててるじゃないですか…」

モモンガは頭を抱えながら横に立つアルベドを見る。

「レオンさんを待つ間設定でもみるか」

設定を見た瞬間回覧した事を後悔しなくなった。アルベドの設定をしたのは設定魔のタブラ・スマラグディナだったのだ。流石は設定魔、期待を裏切らないほど細かい設定がぎっしり書かれていたのだ、モモンガは読むのを諦めつつ説明文を下へとスクロールしていく。そして最後に書かれていたのは『ビッチである』

「あーギャップ萌えだけタブラさんは…でもいくらなんでもこれはかわいそうだろ」

そう言うとモモンガはスタッフ・オブ・アインズ・ウール・ゴウンの機能を使いビッチという文字を消していく。

「何か追加したほうがいいかな？」

モモンガはしばらく考えてから。新たにキーボードを叩いていく。

『モモンガを愛している』

「んふっ、俺は何をしているんだ」

モモンガはやはり『ギルドメンバーを愛している』にかえるかとキーボードを操作しようとするが、決定キーに指が触れてしまい設定が完了してしまった。

「あ…ま、まあいいか。最終日だし」

どうせこの恥ずかしい設定もあと少しで終わるからと。

「さてと、本当にレオンさんは何時くるんだ？最後の最後に1人で終

了とか勘弁してくださいよ?」

「いやー流石最終日だなー、『流れ星の指輪』^{『シューティングスター』}2つも買っちゃったよ」

レオンは上機嫌で市場を歩いていた、それも仕方のないことだろう。課金しても中々手に入らないアイテムを数十個買いあさった挙句一軒の店でとんでもないアイテムを購入したのだから。

「しっかしワールドアイテムまで売ってるとはな…思わず3度見してしまったわ、なにはともあれ早くナザリックに戻ってモモンガ君に自慢しなきゃ!」

ワールドアイテムを手に入れることが出来てそれをモモンガに見せることを考えながら時間を確認する。

23:54:12

「……は?」

レオンは表示が理解できずに固まり時間をまじまじと確認しなおす。

23:54:19

「はああああ!?!」

まさにフラグを自ら立てただけの事はある、バツチリやばい時間になつていた。

「やっべえよ!やばすぎるよ!えーとこういう時は『^{テレポート}転移』!」

レオンは急いで魔法リストの中から『^{テレポート}転移』を選んで玉座の間に飛ばうとするも。

「はあ!?!なんでナザリックの入り口までなんだよ!?!」

23:55:48

ナザリックは防衛の都合上転移の魔法は阻害されている、そんな事はレオンも分かってはいるのだが時間を気にし過ぎて慌てているレオンは忘れていたようだった。

「やべえよモモンガ君に言われた通りになっちゃったよ!」

レオンは取り合えず『^{テレポート}転移』が出来ないのならと全力で第1階層を駆け第2階層を抜けていく。

「お！シャルティア！お疲れ！つとモモンガ君に『伝言』！」

23：57：56

「レオンさんなにやってるんですか!?時間ぜんぜん無いじゃないですか!?!」

「買い物し過ぎたのは謝るから！今全力で第3階層走ってるから許して！」

23：58：40

「走ってる!?!なんで指輪の効果で移動してこないんですか!?!」

「指輪の効果?…ああ！忘れてた！すぐ行く！」

ナザリックは転移の魔法は阻害されているが『リング・オブ・アイズ・ウール・ゴウン』を使えばナザリックの中は転移可能だ。

23：59：30

「レオンさん！」

「ちよ待てよ！場所を選択して！」

23：59：55

「モモンガ君今行くぜ！」

レオンはメニュー画面を見ていたため残りの時間がどれだけ有るか気づいていなかった。指輪の能力が発動する。

00：00：00

「ん？レオンさん？あれ？」

「あれ？モモンガ君？ん？は？」

「レオンさん?…どうなってるんだ?」

「おいおい…なんだよこれ」

「いかなさいましたか？モモンガ様？」

「え?…アルベドが…NPCが喋ってる!?!」

「なんで俺は玉座の間に移動したのに…草原に居るんだよ！」

「「どうなってるんだ!!」」

1話

「ここ何処だよ、俺は王座の間に転移したはずなのに何でこんな草原に転移してるんだよ。なに? 『ここは何処? 私は誰?』でもやれつか?」

周りを見渡してみるものの、周りに見えるのは木と草だけだった。

「とりあえずモモンガ君にメッセージを送って連絡を取るしかないよな、『伝言』」

頭に糸のようなものが何かを探る感覚が伝わってきて妙な感覚を覚えるも何も見つからない感触を感じた。

「あれ? モモンガ君に繋がらない...いや、ちよつと待て、今俺はどうやってメッセージを使った?」

本来ならショートカットキーに登録してある魔法や、魔法リストから選んで使用するのがユグドラシルでの流れなのだが。

コンソール画出不が、チャット機能も使えない、GMコールも機能しない、強制終了できない。

「何が起きた? ゲームから出られない? ゲームに閉じ込められた? 運営のサプライズ? じつはユグドラシル2が始まった? いや、ユグドラシル2が始まったとしてもコンソールが出ないのはおかしい、なにやりログアウトすら出来ないとかもう犯罪過ぎるだろ...」

レオンは俯きながら今の現状を理解しようとして持つてる知識を駆使する、すると風で前髪が流れ目に入った。

「いてっ...痛い? 風で髪が目に入る? いや、そんなの有りえないだろ...」

ユグドラシルでは痛覚、味覚などプレイヤーが感じることは法律で禁止されている。ゲーム内で自分の操作するキャラクターが死亡したから現実世界の自分も命を落とすなんてクソゲー誰もやりたいたとは誰も思わないし危険すぎる。

「じゃあここは現実世界?」

レオンは試しに自分の頬つぺたをつねってみる。

「はは! 痛いや! じゃあ俺はゲームしてたら異世界にでも飛ばされ

たつてか!?!どんなアニメやゲームだよ!」

レオンは怒りに身を任せ地面を蹴り上げた、その瞬間大地から大量の土と草が蹴り出され凄まじいほどの土煙が舞った。
「え?」

その光景に怒っていたレオンも呆然としてしまったのだ、いくら怒りに任せて地面を蹴り上げたからとしてもこれほどの量の土や草が舞うなど想定していなかったのだ、レオンは現実世界の自分がどれ位の脚力を有しているか理解している。

そう今起こった出来事は本来の自分が持っている脚力では決して起こりえないのだ。

「なに、今の?よし、なんか落ち着いてきたぞ、うん、そうだなクールにいこうクールに」

想いもよらなかつた出来事に驚きながらも自分自身の状況を考えることをはじめた。自分自身の装備と所持品を確認することにする。

「うん、間違いなく全身の装備は『レオン・D・ファンシヨン』の装備だな武器とかは何処にあるんだ?」

腰を触りながら頭で考えていると、手が何も無い空間に消えた。

「うお!?!ん?あー武器が並んでるのが分かるって事は、これが自分の持つてるアイテムボックスって事でいいのかな?お、武器以外にも装飾品からアイテムまで全部有るじゃないか!」

空間はどうやってアイテムボックスに繋がっているのか分からないが、とりあえず自分が所持しているものは取り出せることに安堵する。

「とりあえず所持品に関して心配することはなさそうだな、恐らく今の俺は『レオンになった』て事だろうからレベルは100だろうな、つぎは場所に関しての把握か」

自身の把握に関してはもういいといった様子で改めて周りの景色を確認していく。

「すげー、なんて綺麗なんだ…これが本当の夜空って言うんだなブルー・プラネットさん」

空を見上げると満天の星空が広がっていた、それは自分の暮してい

た世界では決して見る事が出来ないすばらしい景観だった。

「あーなんかぐだぐだ考えるのがあほらしく感じるな…よし！なる様になるだろ！」

元々『考えてだめならまずは行動』で動いている為まずは行動することに。

「まずは一人だと心細いからモンスターでも召喚してみるのがいいかな？ってことはモモンガ君に変化して彼がよく使ってたデスナイトでも…いや折角だからさつき市場で買ったアイテムでも使ってみるか、そうすればアイテムの使用確認も同時に行えるな」

レオンはそう言うとき大きな一本の牙状の笛と、一本の棍棒のような物を取り出した。

「スクロールじゃないから魔法職じゃなくても使えるってのがいいよな、何より第10位階の召喚モンスターを使役できるとか、流星は課金アイテム」

効果はプレイヤーのレベルが90を超えていたら使用可能というアイテムで召喚できるモンスターも第10位階クラス級という優れたものだ。しかし結局はガチャアイテム、どれだけ欲して課金しても出ない人はでない。

「こつちからやってみるかな？第十位階怪物召喚へサモン・モンスター・10th」

レオンは笛を空に向かって吹いたのだが…

「あれ？音がでない…あ、砕けた」

レオンとしては勢いよく吹いたつもりだったのだがなぜか音がでず、笛が砕けたため失敗だったと思いきや空を見た、すると先ほどまで美しいと感じていた星空が見えず雲に覆い隠されていた。

「天気が悪くなってきたのかな？さつきまであんなに晴れていたのに」

雨宿りできる場所に移動したほうがいいのかと考えて空を見ていると雲が二つに割れそこからモンスターは現れた。

モンスターは空から降り立つとレオン向ってに頭を垂れた、するとレオンは目の前にモンスターと自分との間に何かつながりが出て

たように感じた。

「確か4足で翼が別に有るとドラゴンで、2足で翼があるのがワイバーンで良いのかな？まあ『ワイバーンの牙笛』って名前のアイテムだったんだから分かってはいたんだけどね」

レオンは元の世界で得た知識を思い出しながら目の前に居るモンスターを観察する。体は頑丈そうな真っ白な鱗に覆われ、目は黄金に輝き、そして足は2足で手または前足にあたる部分はその体に負けなほほど大きな翼があった。

「んふっ、いやーかつこいいいな！やっぱり自分より大きくてかつこいい竜種って憧れるよね！」

ワイバーンの大きさはレオンより2倍近くあり翼を広げれば3倍以上だろう、そんなワイバーンを前に子供のようにはしやぎ観察していく。

「ユグドラシルでも欲しいなーって思ってたけどこっちの世界で見たほうがもつとかっこよく感じるな！やっぱり生きてるからかな？触ってもいいかな？」

そう尋ねると自分はレオンの物だと言うかのように体を低くし全身を触れるようにした。

「おおーありがとー！いやーやっぱり硬い鱗に覆われてるんだな！翼も硬いけどやっぱり膜の部分は柔らかいんだな！」

全身を撫でながらじっくりと観察し、すこし落ち着いたところでもう片方を使うことにした。

「さてもう1つのアイテムを使うから少し待っててね、
『サモン・モンスター・10th第十階怪物召喚』」

そう言ってレオンは棍棒を折る。

すると折った棍棒の周りに黒い渦のが漂い始めた、その渦を見て吃驚したレオンは思わず棍棒をなげた。

すると渦が一瞬大きくなり飛散する。中から現れたのは馬よりも大きな体で、体を覆う赤黒い毛皮、頭が2つあり片側の頭には真紅の瞳が、もう片側の頭には深紫の瞳が輝く、尻尾は蛇の獣であった。

「…か、かわいいー！毛がモフモフしてる！っっておもったらまあまあ

硬いな」

レオンは今回も召喚されたモンスターに自分とのつながりを感じ恐れることなく抱きついた。

「やっぱりかっこいいペットも良いけどかわいいペットも欲しいよね、何より俺いまボツチだし」

なでながら改めて獣の正体を考える。

「名前はオルトロスであってたよな」

オルトロスとはギリシャ神話に登場する犬の獣である。知名度としては三つの頭をもつ兄のケルベロスの方が知られているだろう。

「でもどんな嫌味だろうな、オルトロスが棍棒を折って召喚されるとか」

苦笑いをしながら考える、オルトロスはギリシャ神話で英雄ヘラクレスに殺されてしまうのだ、それも棍棒による撲殺である。

「まあいいか、よろしくな！名前つけたほうがいいのかな？」

2匹に尋ねると3つの頭が頷く。

「うーん、俺ネーミングセンス無いんだよな…」

我等がギルドマスターがよくギルドのみんなにセンスがないと言われていたがレオン自身もあまり名前を付けるのは得意でない、かっこよくつけよう、可愛くつけよう、などと考えるうちに安直な名前しか付けることが出来なくなるのだ、だが。

「んーワイバーンにオルトロス、ホワイト…ブラック…だめだ、ストレートすぎるだろなにかこう…考えろ俺！今後呼ぶときに変な名前だと2匹？も可哀想だろ！」

必死に考える、今後つれて歩くときにダサイ名前出など呼べない、これは今後の自分の評価にも繋がるのだ、などと考えていると。

「よし…無難に俺の記憶から選ぼう、ワイバーンが『アルカディア』でオルトロスが『カーディナル』でいいかな？」

深く考えても良い名前が思いつく気がしなかったので自身の知識から名前を付けることにしたのだ、アルカディアと呼ばれたワイバーンはレオンのお腹に鼻を擦り付け、カーディナルと呼ばれたオルトロスはそれぞれの舌でレオンの顔を舐めてい

た。

「くすつぐつたいよ、でも気に入ってくれたのならよかった」

2頭のペットを手に入れてご満悦のレオンは今後の行動を決める。「まずは会話が可能な生物との接触だな、んで次にこの世界での俺の強さの確認、その次に寝泊りできるところの確保、あーグリーンシークレットハウスとかが有ったな、当面はあれで寝泊りするか。んで1番重要事項がモモンガ君との合流かな？」

今後の方針は決まった、自身はリング・オブ・サステナンスで食事や睡眠が不要になっているがアルカディアとカーディナルは食事などを必要とするだろう、そうなる食糧の確保やこの世界のお金が必要になってくる。もしこの世界にいるモ

ンスターとの戦闘になった場合まずはアルカディアとカーディナルを当てて一先ずのレベルチェックそのあと自分の実力を再確認。そして1番重要なことはユグドラシルのプレイヤーとの接触だが出来ればモモンガ君やギルドのメンバーと合流できることを願って行動することだが。

「ごつちの世界に来てる可能性があるのはモモンガ君だけだろうな、モモンガ君は他に誰かがナザリックに来てるとは言ってなかったし、正直モモンガ君以外のギルドメンバーに会ったとしてもどんな顔をしていいのか分からないしな」

別にゲームの中での付き合いなのだからリアルを優先した彼らを咎める事など出来ない、彼らには彼らの時間というものがあるのだから、それでも。

「1人また1人とナザリックを、ユグドラシルを去っていくギルドメンバーを見送っていたモモンガ君を見てるとなんともいえない気持ちになったよ」

レオンも辞めようかと思つた時期は有つたのだが、辞めていく友を引き止められないでいるモモンガを置いて辞めれなかったのだ。

「最初はモモンガ君の為に、ギルドに誘ってもらつた恩義で辞めなかつただけど、モモンガ君に仕事の愚痴とか聞いてもらつてる内に

辞める気がなくなつたんだよな」

最初は慰めになればと思つての事だったが、モモンガと2人で愚痴を言つたり、冗談を言い合つたりしながらアイテムを集めたりしているうちに自然と毎日ログインする様になつていたのだ。

「モモンガ君大丈夫かな？困つてないと良いけどつて、よくよく考えるとモモンガ君アンデットの姿でこつちに来てるんじゃない？俺より苦勞しそうだな」

もしこの世界の主要種族が人間であつた場合、アンデットのモモンガはさまざまな問題を抱えそうだな。人間の中にアンデットが混ざると言うのは難しいだろう、アンデットと人間種が共存して暮していると言うのであれば別だが。

レオンはドツペルゲンガーであるがアバターの見た目は人間種の男である、他にも変化できる能力でアインズ・ウール・ゴウンに所属していなかった友人達の人間種(女)などもコピーしているので見た目の問題は無いだろう。もちろんアインズ・ウール・ゴウンのメンバースタッフもコピーしているので戦闘になつても困ることは無いだろう。

「変化の能力は日が出てからでもいいだろ、流星に精神的に疲れてきたしな」

いくら睡眠や食事が不要といつても精神は疲労するのだ。レオンはカーディナルを座らせ、そのお腹にもたれ掛かる。

「あーやっぱり毛のあるペットはいいな、癒されるわ」

アルカディアもレオンの邪魔にならないような位置で翼を休めている。

「…昔何かの本で読んだ気がするけど、人間は独りぼっちになつたり不安を感じ出すと独り言が増えてくるつてのは本当だな。口がとまらないぜ…モモンガ君も1人なんだろうなー寂しさに泣いてなければ良いけど、かつつかか」

この場に居ない友人を思い1人笑うのであつた。

2話

「レオンさん?」

『今、行くぜ』その言葉をメッセージで言っていた友人はいつまで待っても現れない。

「もしかして転移の場所を間違えて違うエリアに移動したのかな?焦ってみたいだしカーソルの押し間違えかな?」

ショートカットキーに登録していたとしても、幾つも登録してあった場合キーの押し間違えということはある。

「レオンさん焦るとボタンの押し間違えとかやるからな、王座の間の前に転移したのか?もしくは自分の部屋に転移をしたのかな?」

なら探しに行くべきか?しかし王座の間で最後の時を迎えようといっていたのはレオンだ、入れ違いになっても困るのでここで待つことに。

「でもレオンさん急がないと時間無くなっちゃいますよ、本当に困った人だな」

困ったと言っているモモンガの声はどこか嬉しそうだ、共にユグドラシルに残り、ギルドを維持してきた友人は時間にルーズだが約束を破ったことは無かったのだ。

「さて残りの時間はつと…あれ?時間が表示されてない、コンソールが出ない…:…どういことだ!!」

モモンガの憤怒を込めた声が王座の間に響き、消えていく。

サービス最終日。全てが終わる瞬間に友人を待っていたらコンソールがでない?メッセージも強制的に切られたのでは無いのか。

最後の最後に運営はやってくれた、今の状況に対してなんと説明をするのだろうか。誰か説明してくれと思う。

だが誰も説明などしてはくれないのだろう。ここには自分しか居ないのだから。

しかし。

「どうかなさいましたか?モモンガ様?」

自分以外の声が、それも女性の声が聞こえてくるのではないか。

声のするほうに顔を向けるとそこにはモモンガの方へ顔を上げたアルベドだった。

「いかなさいましたか？モモンガ様？」

アルベドが反応の無いモモンガにもう一度尋ねる。

なぜNPCが喋って居るのか、理解できない状況に頭はショートしそうだった。

「なにか問題がございましたか？」

アルベドはやはり返事が無いモモンガに近づくと、モモンガはアルベドから漂う甘い匂いに反応し意識を持ち直しアルベドの方へ顔を向ける、すると豊かな胸を見た瞬間。

「あ、あれ？」

今起こったことに対し焦っていた感情が一瞬で落ち着いたのだ。

「…GMコールが利かないようだ」

アルベドの方へ向き話しかけてしまう、本来であればNPCから返事が帰ってくるなど無いのだ、しかしアルベドを見るとそこにいるのはNPCではなく、生きた人間のような自然な表情の動きが見える。

「申し訳ありません、無知な私ではモモンガ様の問いである『GMコール』と言う物に関してお答えできません、ご期待にお応えできない私に、この失態を払拭する機会を頂けるのであれば、これに勝る喜びはございません」

会話をしている、こんなことは今までありえなかったことだ。だが会話が出来るということは何か異常が発生したのかもしれない。

視線を動かしセバスとメイド達を見る。

「アルベド、セバスよ何か異常は発生していないか？どんな些細なことでも構わん」

「いえ、モモンガ様。問題が発生したという報告は受けておりません」
「私どもも、特に変わった事はなかったと思われます」

「ふむ……」

モモンガからすれば、NPCであるアルベド達と会話をしている事が前代未聞の大問題なのだが。

モモンガは一瞬レオンがアルベドに変化しているのではと疑ったが、セバスと同時に質問をし二人が喋ったことからその可能性は低いと感じた。

「こういう時は現状確認が優先か、セバス」

命令しても問題ないだろうか、不安になりながらも決断する。

「大墳墓を出て、周辺地理を確認せよ、行動範囲は周囲1キロ、行動時間は1時間。もし知的生物が居た場合は友好的に接してここに連れて来い」

「承知いたしました、モモンガ様」

「ふむ、プレアデスから1人連れて行け、もし戦闘になった場合はプレアデスを先に撤退させ情報を持ち帰らせろ。だが極力戦闘は控えるように、お前達の帰還が最優先だと知れ」

セバスたちはモモンガの自分達の帰還が最優先という言葉に静かに喜び。確実な情報の入手を決意する。

「残ったプレアデスは何処かの階層に転移していると思われるレオンさんを探し私に連絡しろ」

「畏まりました、モモンガ様」

セバスとメイドたちはモモンガに頭を下げると、一斉に立ち上がり行動を開始した。

モモンガは残ったアルベドへと視線を向ける。

「ではモモンガ様、私はいかがなさいませうか？」

「ああ、そうだな」

アルベドやセバスたちは自分の命令に従ってくれたが他の者達、各階層守護者達はどうかのだろう、自分に従ってくれるのだろうか、確認しておかなくてはならない。

「第四、第八を除く各階層の守護者達に連絡を取れ、六階層のアンフィテアトルムまで来るように伝えろ、時間は1時間後だ、アウラとマーレには私が伝えるから連絡の必要は無い」

「畏まりました、モモンガ様」

足早に王座の間を出て行くアルベドを見送るとモモンガは深いため息をついた。

「なんてこった、俺はタブラさんの作ったNPCを汚してしまったのか…」

『モモンガを愛している』

こんな事になるのであれば『ビッチ』の部分だけ消すだけにしておくべきだった、タブラ・スマラグディナにどんな顔をして会えばいいのだ。

「ひとまずアルベドの事は後回しだ、レオンさんと合流してやらなくてはならない事を一つ一つ片付けていくしかない」

「んーそろそろ試すか」

カーディナルにもたれながら今居る世界がゲームの中なのか確実に判断する方法を思いついた。

「確かユグドラシルって18禁行為って即効アウトになったよな」

だが今の状態で18禁行為の確認をするとなると。

「男の18禁行為っていったら下半身を触るか下半身露出だけど…露出とかただの変態じゃないか」

変態というかもはや犯罪行為だ18禁以前の問題だろう、だが実験をするのならせめて自分にとつてもメリットが無くては面白くない、何よりももしもアカウントが停止される可能性があるのならチャンスは1度きり。

「なら当初の目的と併用して楽しげフンゲフン…実験するでしょう」

レオンは立ち上がりカーディナルから離れ、自分のドツペルゲンガーとしての能力の確認を始める。レオンはドツペルゲンガーの最上位種『幻影王』ファントムロードを取得してる。この『幻影王』ファントムロードを極めたことよって手に入れた職業『クリュプトン』その職業を極め、手に入れたパッシブスキルだ。ドツペルゲンガーの能力である変化を『見た目の変化無く』使用できるという優れものだ。

これはユグドラシルというゲームにおいてかなり優位に立てる。なぜなら情報というものが何より重要であったPVPにおいて『戦士

職がまるで魔法職のように上位魔法を使用してくる』などありえない事を可能にするのだ。もちろん完全な状態で使用可能というわけではない、変化して使用する能力は80%に落ち、装備は本人（レオン）の現装備のままでの使用になるので装備などによつての能力強化は出来ないのだ。スキルを使用する前後に装備を変更しておけば多少の能力ダウンは補えるのだが。

「クリュプトンは使わないでいいな、見た目の変化がメインの実験だし」

『ファントムロード』
『幻影王』の能力で見た目を含めての変化なら90%の性能で使用可能だ。

「とりあえず戦士職の『レイナ』になってみるか」

レイナとはレオンのアインズ・ウール・ゴウンとは関係の無いリアルでの友人が使っていたアバターだ、この実験での変化は見た面が何処まで出来ているのかという点なので、見慣れている方がいいのだ。

「お互いの名前が『レ』始まりで言い合いたな…いかんいかん感傷に浸ってる場合じゃないな、んーとりあえずレイナを思い出しながら」
レイナを思い浮かべながら肉体的変化をイメージすると、レオンの体が波打ち始めた。

「うお!?!なんだ!?!おお!?!んん!?!ああ!?!おお」

レオンの体から凹凸がなくなったかと思うと、それも一瞬のことで新たな凹凸が生まれた。

「すっげー装備が変わった、目線も下がった、声も変わった、なにより体つきが変わってる」

髪は銀髪になり、身長もレオンの時に比べると縮んだが、自身の体を見ながら頭を抱える。

「いやさ、人の趣味にとやかくは言うつもりが無いんだけど…でかくな?」

でかい…お尻もそれなりに大きいしウエストはくびれているのだが、何より胸がでかい。このキャラクターを作った人物の願望があらわれていますと言わんばかりに。

「なんだよこの『俺の理想の女性を形にしました』的なプロポーシオン」

そうレイナでゲームをプレイしていたのは男性なのだ、別にネカマをしていた訳ではなく、本人曰く『男のケツ見ながらゲームするとか楽しく無いじゃん？だったら好みの女性を作ってゲームするほうが楽しいじゃん！』との事である、が。

「アバター作るのに半日費やしてから本人視点のゲームって気づいて発狂してたな、何回も落ち着けて言っても聞かなかった本人の自己責任だけだ」

自身の後姿など見ながらゲームが出来るわけも無く、シヨックを受けていたがその後、装備画面を見る時は自分の姿が見える！と喜んでいた友人を思い出す。

「なんかレイナじゃなくてアイツ本人になった気もしないでもないけど：そこは割り切ろう」

友人を思い出したためにアバターのレイナではなく、レイナを操作していたプレイヤーになった気になってしまったが頭を切り替える。

「18禁行為：…それすなわちエロい事！てことはやっぱり胸揉むのが一番手っ取り早く確実に楽しめるよな」

自身のレオンで胸を揉んだところで18禁の行為とカウントされるか微妙だしやはり揉むのは女性の胸だろと言う事でレイナになったのだ。

「触るぞ、揉むぞ…：…ん、おおーやわらかいな、つかやっぱりでかいな」
自身の手に収まらないほどの胸を揉みながらもう1つの疑念を思い出す。

「やっぱり下半身も無くなっているのかな…」

下半身も確認するか悩んでいると視線を感じ目を向けてみるとそこにはレイナを見ているアルカディアとカーディナルの姿が。

「…うん、もう実験はこの位にしておこうかな、いざと言う時の為にレオンに戻ってもおいた方がよさそうだな」

二体の視線に耐え兼ねたのかレオンの姿に戻る、レイナは戦士職なので戦い方には慣れてる筈なのだが、恥かしい感情が勝ったのだろ

う。

「しかし胸を触つても何の問題もないと言う事は、やつぱりここはユグドラシルの、ゲームの世界ではないと言う事でよさそうだな」

『ゲームの世界に閉じ込められた』『新しい別のゲーム』『ユグドラシル2』これらの可能性は無くなった、なら今いるこの場所は、この世界は自分が住んでいた世界でもなくゲームの世界でもない別の世界と言うことになるのだろうか。

ユグドラシルの世界でないことは理解できた、なら次はこの世界の生物との接触だ、できればモンスターと戦闘して自分の実力の確認をしたい、流石にレイドボスやワールドエネミー等のクラスがそこら辺の茂みにいるとは思いたくは無いが、レオンは第十位階怪物召喚へサモン・モンスター・10thでレベル80のアルカディア達を召喚できた、ならそのレベルのモンスターも生存している可能性は大いにあるのだ。いつ強力な敵との戦闘に成ってもおかしくは無い、故に自分の実力とこの世界の平均的なレベルは早急に理解しておくことが重要だ。

そして意思疎通が可能な人間種との接触、できれば人間との接触が理想的だ、今はドツペルゲンガーで異形種だが元はレオンも人間だ、やはり交流が可能なら最初は人間がいい。

「よし、とりあえず適当に移動しながら考えよう、つってもまとまって行動するのも効率が少し悪いな」

ここはワイバーンであるアルカディアに空から周辺の偵察に行かせ、カーディナルを自身の護衛に就けるのが安全で効率がいいだろう。

「アルカディアは空から周辺に人間やエルフなどの村や集落などがあるか探ってきてくれ、カーディナルは俺と共に森の中を散策しようか、モンスターが居るかもしれないからな」

レオンが言うのとアルカディアは空高く舞い上がりすばやい動きで飛び去っていった、カーディナルはレオンの前に来て体を低くした。「ん？もしかして背中に乗ってもいいのか？」

カーディナルは頭を低くし肯定の意を示した、それを見たレオンは

喜びカーディナルの背中へ飛び乗った。

「あーもーサイコー…ライダーってなんか憧れてたんだよな！後でアルカディアにも乗ろう、それっぽく見えるように武器も出しておこう…スクショ撮れないのがマジ辛いわー」

恍惚した表情を浮かべながら何も無い空間から神器級の槍を取り出す、槍頭は大きく、槍頭の下には巨大なクリスタルが埋め込まれ、柄には赤、青、紫の3つの宝石が埋め込まれている。

「やっべー槍持って魔獣に騎乗してるとかちよーやべー今の俺絶対ちよーかつこいいわ」

もはや語学レベルが幼児退行している気もするが本人は満足しているようでカーディナルも誇らしげに森の中へと歩き始める。

3話

モモンガはイスに座り直径1メートル程の鏡『遠隔視の鏡』ミラー・オブ・リーモートビューイングを使いナザリックの周辺を見ている。ユグドラシルでは使うことが無かったアイテムだが周辺を確認する程度なら十分役に立つ、しかし使い方がよく分からず長い時間試行錯誤していたのだが。

「ふむ、これで移動か、拡大はこうするのか」

鏡の前で両手を大きく動かし鏡に映る景色を動かしている、しかしさきほどから映るのは最初から代わり映えの無い草原や木々だけだ、知的生物などを探しているのだが何時までたっても見つからず飽きてきた。

モモンガは先ほどの六階層での出来事を思い出した、守護者たちが自分の事をどう思っているか確認したのだが守護者達の忠義は本物であった。だが他の仲間のことは如何思っているのだろうか？流石に辞めていった仲間のことは聞きにくいと共に最後まで残っていた友人のことは聞いても問題ないだろう。モモンガは横に立つセバスに尋ねてみることにした。

「セバスよ、お前に聞きたいことがあるのだが」

「は、私にお答えできることであればなんなりと」

「ではセバスよ、お前はレオンさんの事を如何思っているのだ？あの人は私となかなか時間が合わない事もあったがあの人には毎日ここにログイン！顔を出していたのだろうか？」

モモンガとレオンはプレイする時間帯が違うことが多かった、お互いが同じ休みの日は一緒に行動して喋ったり狩にも行っていたがそれでも時間が合った時の話だ、休みの日以外は少し顔を合わせる程度だった、2人の勤務時間が違うから仕方の無いことではあったが、レオンはログインを毎日欠かさずしていたのだ。

「私がレオン様に思うのは誰よりもお優しいお方だと言うことでございます」

「ほう、それはなぜだ？」

「はい、もちろん最期までこの地に残ってくださいましたモモンガ様も慈

悲深いお方でございますが、レオン様は日頃から私やプレアデスそして一般メイドたちにも御声を掛けて下さっております」

(なにそれ?!レオンさん毎日ログインしてると思ったらそんなことしてたの!?NPCに声掛けとか怖いんですけど!?)

「そ、そうか、そういえばシャルティアが先ほど声を掛けていただいたとか言っていたな」

六階層に各階層守護者を集めた時にレオンの居場所を知らないか確認したのだがその時にシャルティアが『第二階層を慌てた様子で走っておられたようでした。しかしそのような状況でも私に御声を掛けて下さったでありんす』と言っていたのだ。

(あの時は色々と把握することが多すぎて気にしてなかったけど、よく考えるとNPCに声掛けてたって：俺と一緒にいる時はそんな事してなかったから1人で居る時だけしてたんだな：レオンさんも疲れてたんだな)

モモンガは付き合いの長い友人が疲れからそのような奇行に走ったのだと思うことにした。

(でも今となつてはその奇行がNPC達にとってはプラスの行動になつていたわけだ、なんて声を掛けていたかは分からないけどNPC達にとっては自分達を気にしてくれていたって事になるのか)

「そ、それ以外に何かしていたかは知らないか?」

「鍛冶長のところに行き武器やアイテムなどを作られていたと聞いております」

「ああ、レオンさんは素材やデータクリスタルが集まったら新しい武器を作っては増やすのが趣味だったな」

レオンはモモンガと二人でナザリックを維持する費用を集める傍ら素材を集めては変わった武器やアイテムを作るのが趣味だったのだ。

作る武器は実用性を重視した物から一見何のために作って何処で使うのか分からない代物まで様々だ。物理攻撃力0の剣だが魔力向上、魔法攻撃力アップ、魔法防御力アップなど戦士職が持つような物ではなく魔法職が持つかのような剣や槍などを作ってはよく見せら

れていたのだ。

「モモンガ君これ装備して見てよ、前作った武器に『魔法三重化』トリプレットマジック 『魔法抵抗難度強化』ブラステッドマジック 『魔法効果範囲拡大化』グレートアーフルポテンシャル 『上位幸運』グレートアーハードニング 『上位硬化』をセットしたんだ、魔法職には中々いい感じの武器になったと思わない?」

「いったいどれだけのデータクリスタル使ったんですか?結構な付与効果じゃないですか?…ん?装備不可能?レオンさん装備するのにどんな条件付けたんですか?」

「そんな難しくないよ?武器が槍だから『战士職の職業レベル何れかがレベル10以上で装備可』ってだけだよ」クラス

「馬鹿ですか?!いったい何処の战士職にガチ魔法職装備持たせるんですか?!そこは槍じゃなくて杖とかででしょ?!」

「いやいや何事にもサプライズは必要でしょ?」

「誰に向けてのサプライズですか?よく見ると『伝説級』レジェンド級の槍じゃないですか、本当にどれだけのデータクリスタルと素材使ったんですか」
「いやー本当は『神器級』ゴッズ級で作るか悩んだんだけどね、流石に勿体無いかなーって思っ辞めたよ、素材に関しては適当に市場で物色したり課金ゲブンゲブンしたりしたぐらいだよー」

「本当になにやってるんですか?!」

(…レオンさん何処行ってしまったんだろう?ゲーム終了までログインしてるのは俺も分かってるし、やっぱりこの世界に来たときに違う場所に転移したのだろうか?)

セバスと会話しながらも遠隔視の鏡を操作しているとモモンガは目的の物を見つけられることが出来た、それはナザリックからおおよそ南西に10キロほどの距離にある周りを森に囲まれた村だった。

「やはりこの村にいるのは人間か、これは祭りか?」

遠隔視の鏡に映る映像を見ていると村人が走り回っているのが分かる。

「いえ、これは違います」

セバスの口調が固いものへと変わっていた。映像を拡大していくと全身鎧を着た戦士風の者たちが村人を殺していたのだ。

(人が殺されていると言うのに何も感じない、人としての感覚が麻痺しているのか？それとも価値観が人ではなくなっているのか？)

殺戮の映像を見ていると言うのに何も感じない事に不安を感じ映像を動かしていく、2人の少女が手を繋いで走って逃げているのが映った。その後ろから騎士達が追いかけているのが見えた。

「如何なさいますか？」

モモンガは一瞬考え。

「見捨てる、この村にもはや価値は無い」

モモンガがそう言うってセバスの方を見るとセバスは目が見開いていた、驚きを感じている事はモモンガにも感じ取ることが出来た。

(あれ？やっぱり助けに行くって言うと思ったのかな？)

「セバスはどうしたのだ？」

確かにセバスはナザリックでは珍しくカルマ値が極善なのだ、セバスとしては助けに向かいたいのだろう。だがそれほど驚く事なのだろうか、いや顔に出してまで驚く事なのだろうか、ナザリックは異業種が多く居るためこのモモンガの見捨てる発言を聞いても異議を唱えるものは居ないだろう。ましてやモモンガの意見はナザリックにおいて絶対なのだ。

「モ、モモンガ様この方をご覧ください…この方は」

セバスは遠隔視の鏡に映る映像を指差していたのだ、そこには二人の少女に背を向けた戦士の姿が見えた、少女を追って来た全身鎧たちと向い合っているように見える事から少なくとも少女達の味方なのだろう、だがそれが如何したのだろう。

「この戦士風の男がどうかしたのか？顔は見えないが少女達を助けに来たと言うことではないのか？」

「いつも装備されていた武装と違います、この方は至高の方々の御一人レオン・D・ファンシヨン様です」

「なに!?!」

モモンガは慌てて映し出されている戦士を見る、映像に映し出され

ているのは後姿で顔までは分からない、急いで画面を動かし戦士の正面に移動させる。

「な!?レオンさん何故こんな所に!？」

その顔は間違いなくアインズ・ウール・ゴウンの1人レオン・D・ファンションだったのだ、全身鎧達に向かつて何か喋っているようだが遠隔視の鏡では音声までは聞こえない。

「セバスよー私はこの場所に行く、ナザリックの警備レベルを最大限まで引き上げた後にアルベドに完全武装で来るように伝える。その後何名かの護衛を送れ！」

「畏まりました、ですが護衛となりますと私がモモンガ様と共に行くほうがよろしいのでは？」

「アルベドに伝達するものが居なくなるだろう?伝達をした後であればお前に任せる、それに、私とレオンさん二人が居るのだぞ?」

モモンガは笑っていた、いや骨しかないのだから笑っているかは分からないがセバスは主人が笑ったと感じ取った。

モモンガはスタッフ・オブ・アインズ・ウール・ゴウンを取り出し魔法を唱えた『転移門』

転移門の先に居たのは全身鎧の騎士が2人と少女が2人恐らく姉妹なのだろう年上の少女は背中を切られている、セバスとの会話の間に切られたのだろうか、妹と思われる少女は姉にしがみ付いている。そしてその少女達を守るようにその前に立つ

戦士の男が1人右手に槍を持っているのが見える、槍を持つ手に力が入っているのが分かる、恐らく少女が傷付けられた事に怒りを覚えているのだろう。だがあの横顔は間違い。

「レオンさん!」

モモンガの声に驚き男はモモンガの方へと顔を向けた。怒りに満ち溢れていた顔が驚きへと変わった。

「…え!?もしかしてモモンガ君?え!うそ!？」

「やっぱりレオンさんだったんですね！よかった、メッセージが繋がらないしナザリックの中にも居ないから心配したんですよ？」

「え、ナザリックもこっちに來てるの!?!てか、え？本当にモモンガ君!?!」

レオンはあまりの予想外の出来事に慌てているようだった、だがモモンガの方へと近づいていく。

「ええ俺ですよ、モモンガです」

「本当に本当にモモンガ君？ギルド長のモモンガ君？」

「ええそうですよ」

「本当に？あのネーミングセンスがアレなモモンガ君？」

「ぐっ、ええ、そのモモンガで間違いないですよ」

モモンガはギルド内でのネーミングセンスは評価が低いのだが本人確認で言われるとは思っていなかったのだ、本人的には消して悪くないと思っつけても周りの評価は散々だったりもする。

「そっか…そっか…やっ与会えた！」

レオンは満面に喜悦の色を浮かべモモンガに抱きついた。モモンガは友人の突然の行動に驚く、やはり一人で転移して不安だったのだろうか。

「やっ与会えた！もう二度と会えないかと思ってたのに！」

「レ、レオンさん如何したんですか!?!」

「どうしたもこうしたも」き、貴様ら俺達を無視してるんじゃない!?!あ?！」

騎士達が剣を向けていたのだが、モモンガ達は再会を邪魔された事に怒りを露にした、レオンとモモンガが騎士達を睨むと後ずさりした。

「少し黙っている」グラスブ・ハート『心臓掌握』

「黙れ糞ゴミ共が」ドラゴン・ライトニング『龍 雷』

モモンガがスタッフを持っていない手をかざすと軟らかい何かを掴んだ感覚があり、それを握りつぶす、レオンも槍を持たない手をかざすと手から龍の形をした雷が放たれ1人の騎士を貫いた。

「ええ…こんなに弱いのか?！」

モモンガはレオンが放った『ドラゴン・ライトニング龍 雷』で騎士が死んでいくのを見下ろしながら自分が考えていたことが杞憂で終わったことに安堵する。モモンガはもし騎士が強かった場合レオンと少女達を連れてゲート転移門で撤退するつもりだったのだ。

「ん？そらこの程度の連中ならこんなものでしょ？」

モモンガの呟きが聞こえたのだろうか、レオンはさも当たり前のように。

「鎧についてる紋章はバハルス帝国みただけどまだなんとも言えないね、まあ帝国だろうが王国だろうが一般兵の強さなんてこの程度でしょ？」

レオンは何をいまさらと言った顔で首を傾げているがモモンガは驚くことが3つに増えたのだ。1つはなぜレオンがナザリックの外に転移していたのかという事、2つ目は騎士風の者が予想以上に弱かったことについて、そして3つ目になぜ『レオンが騎士の強さと紋章の理解をしている』ということに。

「バハルス帝国？王国？レオンさんどういう事ですか？いや、あなたはいったい何処まで知っているんですか？」

「どこまでって、モモンガ君？君こそ何を言っているんだ？」

2人はお互いが何を言っているのか理解できないという様子だ。方や騎士の強さはおろか自分の置かれた状況すら理解できているわけも無く、ましてや自分のいる国の名前すらわかっていないモモンガ。方や騎士の強さを把握し鎧の紋章から国名まで言ったレオン。

2人は互いに疑問を浮かべた表情を向け合う、片方は骸骨の顔などで判断しかねるが。

「あ、あの、レオンさん！」

モモンガ達が互いに困っているとそんな状況を如何にかしてくれるのは少女の声だった。

「ん？ああーごめんよエンリ痛かっただろ？すぐに治してあげるからな」

レオンは声を掛けてきた少女に近づきながら槍を空間に仕舞い傷ついた少女の目線に合わせるようにしやがみこみ右手をかざした。

『大治癒』

レオンが魔法を唱えると少女の背中に負った傷が瞬く間に治っていった、少女の顔色も良くなったようだった。

「もう痛まないか？ネムも良くがんばったなえらいぞ」

そういうとレオンは2人の少女の頭を撫でた。

（レオンさんはこの2人と知り合いなのかな？ずいぶんと親しそうに話しているようだけど…）

ネムと呼ばれた少女は目を細めながら撫でられエンリと呼ばれた少女は恥ずかしそうにしながらも撫でられている。レオンは気が済んだのかモモンガへと向き合う。

「さてと…せっかくの感動の出会いに懐旧談に浸りたいところだけど、ちよつとやる事があつてね。積もる話はその後でもいいかな？」

モモンガとしてもこの世界に来てNPC以外のプレイヤーと会えたのは喜ばしいことだ、それが自分の探していたギルドメンバーであるのなら尚更だ。

「ええ、もちろん大丈夫ですよこの村を助けるんですね？でしたら手伝いますよ」

モモンガの提案にレオンは微笑し何処か懐かしいものを見るように遠くを見ていた。

「それじゃあ宜しく頼むよ…ところでその『転移門』は何時まで開いているのかな？」

モモンガがこの場に着てからいまだにゲートは消滅していない。その場に居た者の目線が『転移門』へ向けられる。するとその中から黒の甲冑で覆われた戦士が出てきた、それを待っていたかのように『転移門』は消えていった。

「お待たせして申し訳ありません」

戦士の声は女性のものであった。モモンガは声でアルベドだと分かったようだがレオンは首を傾げている様子だ。

アルベドはモモンガとレオンへ深く頭を下げ臣下の礼を取った。

「至高の四十一人御方々の御一人であるレオン・D・ファンシヨン様、このような場所ですが我が忠義を示す事をお許しく下さい」

「ん？うん…すまないが黒の戦士よ、久しく君と会っていないかったせいか顔が見えずに声だけでは君が何者か分からないんだ、申し訳ないがその綺麗な声で俺に名前を教えてくださいませんか？」

「謝罪などおやめください！至高の御身であるレオン・D・ファンシヨン様に名を名乗らずに忠義を示そうとした私が悪いのです、申し訳ありません！」

アルベドはレオンが気分を害したと思い頭をさらに深く下げた。

（あーレオンさん良く分からないけどとりあえず名前聞こうとしたらさらによく分からない状況になったって感じなんだろうな目が泳いでるよ、まあ目の前に現れた人物が自分を至高の御身だとか忠義だとか言われたら困るよな、俺も精神が抑圧されるからどうにか動揺を隠せたけど…ここは助け舟を出した方がいいよな）

「アルベドよ、レオンさんは謝罪ではなくお前の役職と名を聞いているのだ、ならば如何するべきか分かるな？」

「はーでは、ナザリック大墳墓守護者統括アルベド、至高の御身であるレオン・D・ファンシヨン様の前に平伏し奉る…我が忠義を御身に捧げます」

「……………アルベド、またこうして君に会えた事を嬉しく思うよ」

「勿体無いお言葉でございます…ところでこの下等な生物はいかがなさいませう？」

アルベドは横目で状況が飲み込めずに座り込んでいる姉妹を見る、アルベドからすれば至高の御身であるモモンガとレオンに平伏していない人間が許せないのだろう。隠そうともしていないのかアルベドから漂う殺気が漏れている。

姉妹は自分達に向けられた殺気に脅えてしまっている、先ほどまで自分達を襲っていた戦士風の者達よりも強力な殺気を感じ取ったのだろう。姉妹はより強くお互いを抱きしめ合った。

「アルベド止めないか。その子達は私が大切にしている姉妹だ危害を加えることは許さん」

「…畏まりました」

「アルベド、エンリ、ネム、少しそこで待っていなさい」

レオンはそう言うのとモモンガを連れて少し離れた場所に歩いていく。三人の姿は見えるが会話までは聞こえないであろう距離まで離れたうえで声を下げモモンガに尋ねた。

「ちよつとモモンガ君如何いう事？なにアレ？至高の何て？忠義ってなに？アルベドってあのNPCのアルベドだよ？何がどうなってるの？俺に分かり易く三行で説明してくれない？あ、久し振りだねまた会えて本当に嬉しいよ」

「いや…自分も全部理解できた訳ではな無いんですけど…取り合えず『NPCは恐らく味方・NPCの忠義は本気とかいてマジ・自分もまた会えて嬉しいです。ですかね』

「んー…まあそんな事も有るのかな？まあいいか…うん」

「ええ…いいんですか…」

「いやー今は考えたって無駄なかって、今はやらなきゃいけない事も有るし、だったら考えることは後回しでいいでしょ？アルベドは味方なんですよ？ならおーけーおーけー」

「…相変らずですね、何も変わられて無いようでした」

レオンは苦笑いをしながら三人のもとに戻っていった。

「さてとそれじゃあエンリ、ネム、村を助けに言ってくるよ」

2人を安心させるように頭を撫で村へと歩いていく。

「あ、あの！レオンさん！お父さんを、お母さんを助けてください！」

「おう、任せとけ！二人も隠れとけよ！」

村へと歩いていくレオンの横を大きな巨体が咆哮を響かせながら駆け抜けて行った、その咆哮は獲物を狙う獣のようだった。

「アレは死デスナイトの騎士か、モモンガ君が召喚したのか…よし、アルカディア！お前は村の周囲に居る騎士共を始末してから死デスナイトの騎士と合流しろ！」

レオンが空に向かって叫ぶと何処からかワイバーンのアルカディアが飛び去っていった、死デスナイトの騎士と違い咆哮こそ無いがその目は餌となる獲物を見つけた獣であった。

モモンガはデスナイトを召喚し指示を出すとエンリ達に魔法を掛

けていた。

モモンガとしては名前も知らない姉妹だが友人であるレオンが『大切にしている姉妹』と言ったのだ、ならば最低限でも魔法による守りなどを施しておいても良いだろう。

「魔法による守りを掛けてやった、そこから出ない限りは安全だ」

「あ、有難うございます！…あの、レオンさんのご友人の方でよろしいんでしょうか？」

「そうだ」

「でしたらお名前を教えてくださいませんか！」

先ほどまでレオンがモモンガと呼んでいたが、気が動転していたてはつきりと名前を聞き取れていなかったのか、改めて本人から名前を聞きたいのか分からないがエンリはモモンガに名前を尋ねた。

モモンガは考える、自分はナザリック大墳墓の主、今では2人しか残っていないが上位ギルドのギルドマスター、NPCが忠誠を誓う至高の支配者、ここが何処なのかも、如何いった世界なのかも分からない、では自分はいったい誰なのか、もしかしたらレオン以外の友も来ているのかも知れない…なら自分が名乗るのはモモンガではなく。

「我はレオン・D・ファンシヨンの盟友——アインズ・ウール・ゴウン」

簡単な任務だった『村を襲いある程度の村人を生かし村は焼き払う』王国領の村とはいえ王都や町から離れている辺鄙な村だ、冒険者も居たとしても少数だろう、そもそも自衛出来るような力を持っている村などはこの周辺には無い。

詳しい事こそ教えられないが、村をある程度襲い王国の軍が来る前に撤退する。王国の軍が来たら後詰の部隊に任せる、どの様な部隊かは聞いていないしどうやって軍を滅ぼすのかは俺の知った事では無いが。

そう俺の隊は誘導部隊なのだ、村には恨みは無いがこれも人類のた

め。……等と言つてはいるが正直こんな楽な任務で報酬をもらえて俺はツいている。国の為に軍を率いたと言う箔も付く、これほど楽なことは無い。

気に入らないことが有るとすれば先ほど逃がした中々に俺好みの身体をしていた娘を捕まえられなかつた事だ、娘の父親が邪魔さえしなければ今頃お楽しみだったというのに：ちつ使えない部下だこの俺が隊長に就いてやっているのだから俺の為に立ち回れクズ共が。まあいい、生き残りの中にさっきの娘がいなければその時は代わりの娘でも選ぶまでだ。

「ぎやああああ!!」

なんだ？村の連中は粗方集めたはずだ、いったい何の悲鳴だ!?

声のほうへ振り向くと目の前を悲鳴を上げたであろう男が宙を舞っていた。部下が村人を投げたのかと思つたが、そうじゃない。地面に叩き付けられた男は俺と同じ全身鎧を着ている、なぜ俺の部下が宙を舞つた？そもそもなぜ全身鎧を着た男が吹き飛ばされる!?

「ひやあああ!!」

また悲鳴が聞こえる！いやだ！見たくない！なにが起きている！

……後ろに何かいる！な、なにが！

「ひ、ひいい！」

そこに立つていたのは全ての者を殺す『死の騎士』だった。

「ひいい！」

いやだ！死にたくない！こんなところで死にたくない！

「お、お前達！早く俺を助けろ！なにをしてる！俺は隊長だぞ!?!早くこの化け物から俺を守れ！」

なぜ誰も俺を助けに来ない!?

「金か!?!金が欲しいのか!?!俺が無事に帰れたら金をやるぞ!?!」

とにかくこの化け物から離れないと、後ろに下がって逃げないと。そうだ！誰か部下の近くにまで逃げればそいつを囷に俺は助かるかもしれない！そうだ！副隊長のほうに逃げればどうにかなるかもしれない！

「副隊長!?!どこだ!?!早く俺を助けろ！」

副隊長のやろうどこにいる！そこか!?早く俺を助ける！あ？化け物が離れて行く!?よかった！俺は助かる！早くそっちに行け！その間に逃げてやる！いまのうち――

「ぎゃ!?」

痛い!?何が起きた!?なんで俺は地面に押さえつけられてる!?化け物は向こうに歩いて行ってるじゃないか！俺を押さえつけてるのはなんだ!?

「ひ!?ド、ドラゴン!?なんでこんなまで居るんだ!?やだ！死にたくない！誰かたす――」

「そういうえばモモンガ君さっき名前乗ってたけど、改名するの?」

レオンは全身鎧の胸を貫いた槍を抜きながら先ほど聞こえていた会話を思い出す。モモンガも全身鎧が持っていた剣を投げ捨て先ほどの会話を思い出す。

「やっぱり私がみんなのギルド名を名乗るのはおかしいですかね…」

「んー何を思ってた名乗ったのかは分からないけど別に良いんじゃない?俺は構わないと思うよ?モモンガ君がアインズ・ウール・ゴウンに対する思いは知ってるつもりだし」

ギルドメンバー全員がそろっていた頃から一部のメンバーにはモモンガのギルドに対する思い入れは凄いと話題に上がっていたのだ。それだけギルドを愛している証拠でもあったが心配する声もあつたのは確かだ。

『『好き』や『想う』って感情や価値観なんて人それぞれだし他人がどうこう言う事でもないしね、モモンガ君のギルドへの想いは他人より強かつたって事だし』

「アルベド、君はモモンガ君がギルドの名前を名乗ることをどう思う?」

「はい、私達しもべは至高の方々がお決めになった事であるのであればそれに従う次第でございます」

「本当に思うところは無いのか？他の40人の意見を聞かずに私が名乗る事に対して」

モモンガとしては多数決を重んじるギルドに対して自分1人の意見で勝手に動かしてしまつてよかつたのか不安なのだ。

「では…もし私の言葉を不快に思われた場合は即座に首を刎ねていただくと思います。…正直申し上げますと至高の御方々41人のまとめ役であつたモモンガ様が名乗られるのであれば私達にとって喜ばしいことはありません、もちろんモモンガ様と共に最後までナザリックに残つて下さつたレオン・D・ファンション様が名乗られるでしたら私達はそれに従います。ですがお隠れになつた至高の御方々が名乗られるのでしたら思うところはあるかもしれません。ですがやはり私の愛するお方！モモンガ様がその尊きお名前を名乗られるのでしたらこれほど喜ばしいことはありません！」

最後まで残つて下さつた…たしかにモモンガはレオンと共にサービス最終日まで残つていた、なら名乗る資格は自分だけでは無いのは。

「いいじゃないかモモンガ君、少なくとも今のナザリックに、ギルド『アインズ・ウール・ゴウン』にギルドマスターモモンガがアインズ・ウール・ゴウンを名乗る事を咎める奴は1人も居ないつてことだよ」
レオンは「それでいいんだよ」と微笑みながら右手を差し伸べてきた。

最後まで共にナザリックに居てくれた友が言うのであれば。

「なら、他のギルドメンバーが止めるまでは私はアインズ・ウール・ゴウンを名乗らせてもらいます」

そう言うとレオンの右手を握る、骸骨の顔なので表情は分からないがレオンと同じように微笑んだようにアルベドは感じた。

「よろしくなアインズ・ウール・ゴウン君…長いな」

「アインズで構いませんよ流石に毎回フルで呼ぶと長すぎるでしょ？アルベドもアインズと呼んでくれて構わん」

「よ、よろしいのでしょうか？私如きが尊き御名前を省略して」
「構わないとも」

「では、私の愛する方アインズ様と…くふー！」

「アルベド、俺の名前もフルで呼ばなくていいからな？ながったるいからレオンでいいから」

「畏まりました」

（ええーなんか扱い変わらない？さつきからちよくちよくモモンガ君のことを『愛する』とか言ってるし、知らない間に何かあったのかな？）
（愛するって…ああ…レオンさんに何て言えばいいんだ…）

2人の中に何とも言い難い空気が流れ始めたが。

「ん？笛の音が聞こえたな…撤退しようとしたのかな？」

「そうですね、話はこれ位にしてそろそろ行きますか？」

2人はよく分からなくなった空気が逃げようように村の方へ移動を始めるのだった。

4話

笛の音が聞こえたのでモモンガ達は村の中央へとやってきた。アインズとしてはデスナイトとの繋がりで今の状況は何となくだが掴めていた。

レベル35程度のモンスターにここまで苦戦するものなのだろうか？この村を襲った兵が極端に弱いことも想定できるが、レオンが先ほど一般兵はこの程度だと言っていた事から推測できるのはどの国も一般兵と呼ばれる連中はデスナイト一体ですらまともに相手が出来ないほど脆弱だということだ。

だが逆に考えれば一般兵ではなく將軍クラスなどは一般兵とは比べ物にならないほど強者である可能性だ、国がどれほどの強者を保有しているかは分からないが国と戦争をすることになった場合アインズはナザリックを守ることが出来るのだろうか、今の状況では詳しい戦力差が分からないが注意しておくのが得策だろう。

アインズはレオンの後姿を見ながら今やるべきことを考える。

(なぜかレオンさんは兵の力を理解している様子だった…こっちの世界に来てまだ三日だというのにレオンさんは早くもこの世界の状況を理解したというのか？やっぱりレオンさんに状況の共有をしてもらわないとな)

「聞いた、村人は一箇所に纏められてるみたいだな。兵士もここから見えるのは7人か、デスナイトとアルカディアに襲われてそれだけ残ってたらまだ運がよかったほうだな、聞きたいこともあるし全滅して無くてよかった。」

「レオンさん1つ聞きたいのですが、この世界はアンデットの自分が普通に接しても問題ないのでしょうか？」

「あー村の連中は俺の友人だって言えば何とか納得してくれそうだけど流石に骨は見えない様にした方が良くも知れないね。てかアインズ君なんで今更そんな事聞くの？さつきも全身鎧のこと詳しく知らなかったみたいだし…何処か遠くのここら辺じゃない国に転移してたの？」

レオンとしても先ほどからのアインズとの会話に違和感を覚えていたのだ、周辺国家の名前を理解していない、一般兵の強さを理解していない、この世界での異形種の見ただ目でのめんどくささを。

これではまるで――

「どういうことですか？ 私達はナザリック大墳墓ごとこの森の奥に転移してきたばかりですよ、レオンさんも3日前にナザリックの中に転移して来たばかりじゃないんですか？」

レオンはアインズという言葉に頭を抱えていた。まさに自分が予想した言葉が返ってきたようだった。

「まじかーやっぱりそういう事か…うわーまじかよ」

「いかなさいましたレオン様？」

レオンは1人状況が理解出来たようだが、アインズとアルベドは置いてけぼりだ。

「レオンさんどういう「モモンガ君！」は、はい！」

「モモンガ君じゃなかった、アインズ君取りあえずこの村の問題を片付けてからお互いの情報を交換しよう。そして俺の方が話すことが多いことが分かったから、それについても色々教えよう、だからまずは骨の部分を隠してくれるかな？」

アインズはまだ状況が理解できないがまずは村の問題を片付けるのは同感だ、村を助けてやら無いと落ち着いて話も出来ないだろう。それにレオンはこの村と交流があるような口ぶりでもあったのだから友人としてはなんとしても村を救ってやらなくてはという気持ちにもなる。

「そうですね、では顔はこれでも着けておきますか」

そういうとアインズは空間に手を入れある種呪われた仮面『嫉妬マスク』を取り出した。

「嫉妬マスクって…なんか他にチョイス無かった？俺あんまりそれに良い思い出無いんだけど」

「なに言ってるんですか？レオンさんはギルドの中でも数少ない非所有者じゃないですか。いやだなー所有してない方が良い思い出無いとか冗談止めてくださいよ」

「それだよ！ たつちさんの持つてない理由と俺の持つてない理由が違
うのは何回も言ってるでしょ!? クリスマスが終わってからログイン
してみたらいきなり悪者扱いだったの今でも覚えてるんだからね!」

『嫉妬マスク』それは非リア充の証：クリスマスにリアルで誰とも
過ごせなかった者が手に入れることが出来るある意味名誉あるアイ
テム：特に仮面自体に効果があるわけではないが。持つていない者
は一定時間ユグドラシルにログインしていなかったという証明にな
るのだ。

アイنزはもちろん所有しているが、レオンは所有していないの
だ。だがアイنز・ウール・ゴウンのギルドメンバーリア充代表の
たつちみーは当然家族と過ごすためログインしていなかったのだが。
「毎年クリスマスは仕事だって毎回言ってるでしょ!? リア充相手に
シェイカー振って商売してたよ!」

レオンのリアルでの職業はバーテンダーなのだ、クリスマスなどの
イベントは稼ぎ時であり当然仕事など休めないのだ。

だが仕事が終わってログインしてみたらマスクの持つていない者
としてマスク所有メンバーから色々言われたのだ。

「いやーそれを誰も証明できないので真実は分からないですよね」

アイنزは笑いながらマスクを着けガンレットも取り出し着けて
いく。

「ひっでー…だからそのマスク良い思い出無いんだよ」

レオンも苦笑いをしつつ村へと歩き始める、立ち止まり話している
間に生き残っていた兵士の数が3人まで減っていたのだ。

「あ、やばいなこのままじゃ全滅されちゃう。アイنز君早く行こう
『飛行』」

レオンは慌てつつ『飛行』で村の中央へ飛んでいく、アイنزとア
ルベドも浮遊し追いかける。

上空から見て分かったのは兵士だった物が奇妙な形をして転がっ
ていたり真つ二つになり地面に黒いシミを作り転がっているのと
所々地面が焦げている場所が有る事だ、切られたり転がっている遺体
はデスナイトが遊んだ跡だろう、焦げた跡はアルカディアが炎のブレ

スで燃やしたのだろう。

アイنزは惨劇の中空に来るとできるだけ威厳のある声で指示を出す。

「デスナイトよ」苦勞、そこまでだ」

「アルカディアももういいぞよくやった」

デスナイト達に指示が出て動きが止まったことよって兵たちは一瞬希望を持ったがアイنز達を見て喜びは絶望へ変わって言ったのだった。

「さて、諸君はじめまして、まだ戦いたいというのであれば構わないが：投降するのであればその態度はいかがなものかな？」

アイنزが問い掛けると兵士たちは一斉に剣を地面へと投げ捨てた。

「ふむ、素直でよろしい。レオンさん如何しますか？」

「そうだな、どこかに縛り付けておくのが一番だろうけど。デスナイトが見ていたら逃げる気をなくすだろうから。アイنز君悪いんだけど適当に尋問してもらえるかな？俺は向こうに集まってる村人の中にエンリたちの両親がいるか確認するつ

いでに村長と話してくるよ」

そう言い残してレオンは村人のほうへ歩いていった。たしかにこの村の者と顔見知りのレオンが話しをする方が無駄な手間が省けるのだ。ならこの連中から色々聞き出すのはアイنزの仕事だろう。詳しく聞いたところでまだアイنزには分からない事が多すぎるが。

「さて、お前たちは何処の所属なのかな？」

アイنزの問いに対して兵士たちはお互い顔を見合す、まず命乞いをするべきなのか、それとも素直に聞かれたことを話すべきなのだろうか。

「もちろん嘘をつくのであれば待つているのは死だがな」

「いい、いいいます。本当の事を言います！」

アイنزが軽く脅すだけで震えているのカチカチと全身鎧のこすれる音が聞こえてくる。

「じ、自分たちはスレイン王国の兵です」

(スレイン法国ってまた知らない国の名前じゃないか、レオンさんは紋章がなんとか帝国のだろうって言ってたけど、スレイン法国の偽装だったって事でいいのかな?)

「ふむ、その紋章は帝国の物だと思ったが?」

「国の命令で帝国の鎧で騒ぎを起こす様に言われていました。本当です!」

「なるほど、まあこの状況でお前たちが嘘をつくメリットが見当たらないな。いいだろうここで大人しく動かなければ助かるだろう。だも少しでも逃げるような素振りを見せたら」

アインズはそう言ってデスナイトを見る、兵士達はその意味が分かったのだろう。項垂れながら地面へと座り込んだ。

(やれやれ演技も疲れるな、でも兵達の正体も分かったしレオンさんに伝えておくとするか)

レオンの方へ向かうと1人の男性と話しをしていた、見たところ40台のにも見えるのである男が先ほどの姉妹の父親という可能性もあるがレオンの顔には哀傷が漂っているようにも感じられた。

「レオンさん如何しました?」

アインズがレオンに近づき声を掛けると村人の視線がアインズへと向けられる、その視線には様々な感情が入り乱れていた。その顔にも恐怖、驚愕などの感情が多く見て取れた。先ほどまで自分達を襲っていた兵達を惨殺したデスナイトに指示をしていたのだ、ならば今日の前に現れた謎の人物に恐れを抱くのは弱者として必然の行為なのだろう。

「ああ、アインズ君。村長、村のみんな、紹介するよ俺がずっと探していた友人のアインズ・ウール・ゴウンだ、彼に手伝って貰いながら兵を倒していたんだ」

村人はまだ安心しきった様子ではないがレオンの友人という言葉に聞いて薄っすらと安どの表情を浮かべていた。少なくとも素性の知れない強者から、自分達の知っている人物の友人へと認識が変わったのだろう、アインズへの恐怖はまだ有るだろうが村を救ってくれた恩人程度には思ってもらえるだろう。

「皆さん始めまして、レオンさんから紹介がありましたアインズ・ウル・ゴウンと言います」

「このたびは村を救っていただき有難うございます」

「いえいえ、私はレオンさんのお手伝いをしたままですよ」

「取り合えず村長、いったんエンリ達をむかえに言つてくるよ。まだ森に残してきているから、色々話したいこともあるから後で話そう」
「分かりました…」

アインズとレオンは2人並んで森のほうへと歩き始め座り込んでいる兵を見る。

「アルベドよデスナイトと共にこの兵達を見張っておけ」

「は！畏まりました」

森のほうへと歩いているがレオンの足は何処と無く重そうだった。何処と無く横顔は姉妹に会うのが気鬱になっっている様だった。

「…レオンさんあの姉妹を連れてくるのでしたら私が行ってきましようか？骸骨の顔を見られているので記憶操作が有効なら口止めをしておこうと思うので」

「いや、大丈夫俺も行くよ…そうだね、記憶操作は問題なく行えるから念のために最初からその仮面を被っていた事にしよう」

「……………」

「……………」

2人の間に重い空気が漂う。姉妹の近くまでレオンもアインズも言葉を発しなかった、レオンは何かを考えている様子でアインズも空気を読み何と声を掛けるべきか決めかねていたのだ。

「さつき集まっていた村人の中にはエンリ達の両親は見付からなくてね…何人かに聞いてみたら殺されるのを目撃したと言う人物が居て…エンリの両親、エモット家は俺が大分前から交流が…鼻屑にしていた家族でね…」

「そうですね…なら復活させるのはどうですか？手元にアイテムが無いのでしたら私の持っている『蘇生ワンド・オブ・リザレクションの短杖』を使ってもらって構いませんよ」

アインズとしてはこの世界でユグドラシルのアイテムが手に入る

か分からない現状での使用は躊躇われるが友人の為ならば惜しくはない。

「蘇生も考えたんだけどね…村人に見られているのが問題なんだ、誰にも見られていなければ蘇生して上げたいんだが」

2人だけ蘇生した場合当然不満が発生するのだ、数十人単位で人が死んだのであれば1人を復活させた場合他の亡くなった人も復活させなくてはならない。そうしなかったら復活させた者の家族は今後この村で暮しにくくなるだろう、他の者達からの不満や嫉妬などはなくなることは無いだろうから。

「まあエンリ達にはできるだけ支援をしていくつもりだよ、色々考えも有るから」

「なら出来る限りお手伝いしますよ」

(アンデットになって人の死と言うものが遠く感じているんだろうか、レオンさんの話を聞いていても余り悲しいと言う感情が無い。会った事も無い人物と言うこともあるんだろうけど兵達を殺しても何も思わなかったという事はやはり外見だけでなく心まで人間を辞めてしまったのだろうか)

その後エンリ達を村に連れて帰り村長に被害の状況を聞いていると葬儀があるとの事なので村長達と別れアインズとレオンは少し離れた場所で状況の共有を始めていた。

「レオンさんは本当に葬儀に出なくてよかったですか？」

「さすがに沢山の村人がなくなっただ、部外者の俺は離れておくよ。人が少なくなっただ位に行ってくるよ…それよりもアインズ君は俺に聞きたいことが沢山あるんじゃないのかな？」

その通りだ、アインズからするとレオンは異常なのだ、言動などは今までと変わりは無いがそうではない。3日にこの世界に転移して来たとしては有り得ないほどに情報を持っているのだ。それはまるで転移する前からこの世界の情報を持っていたかのようだった。

「ええ、教えてくれますかこの世界について、この状況について」

「いいよ、まずは何が知りたい？ 沢山あつても知りたい順番があるだろう？」

「ではまず第1にここはやはりユグドラシルではないのですね？」

「答えはイエスだここは俺達の知っているユグドラシルと言うMMORPGの世界ではない」

「では第2になぜレオンさんは私達と違う場所に転移したんでしょうか？」

「恐らくけど俺はユグドラシルのサービス終了の時に指輪で転移したことが関係していると思っっているんだ、だから転移した時にただ1人ナザリックから弾き出された原因だと考えた、これはさっきアインズ君がアルベドを連れて来て今までの会話から確証になった感じだけだね」

アインズはなるほどと思う、確かに指輪で転移した瞬間に転移が発生したとしたら軸や座標などがズレたと仮定してもおかしくは無い。

「では第3に…なぜレオンさんはそれほど情報を持っているのですか？ 元いた世界で既にこの世界の情報を知っていたんですか？」

「その質問に答える前に俺からも聞きたい事があるんだ…モモンガ君、君は冒険をしたいと思わないか？ あの頃のように未知を探求したいと思わないかい？」

あの頃、未知…確かにユグドラシルでは何もない状況でギルドのメンバー達と手探りに冒険していた、そしてそれはかけがえの無い思い出だ。だがこの世界で無知である事は大丈夫なのだろうか。不安だが同時に未知の冒険と言うのは確かに心躍る言葉では有る。

「確かに現状で何も知らないと言うのはとても不安ですが冒険と言うのはしてみたいと思います、またあの時の様な冒険が出来るのであればやってみたいです」

「君ならそういうと思ったよ、なら俺が君に教えるのは俺の知っている情報全てではなく最低限にしておこう。と言ってもこの世界について全て理解している訳ではないんだけどね。」

レオンは嬉しそうにしながらアインズと向き合った。返ってくる返答が分かっていたように。

「では質問の答え合わせだ。俺は元いた世界ではこの世界のことなんてこれっぽっちも知らなかった。ではなぜ俺がこの世界のことを知っていたのか？答えは至極簡単なことさ、アインズ君は『俺達は3日前に転移して来た』と言ったね？それは違う、君達は3日前にこの世界に来たかもしれないが。俺は『10年前』にこの世界に転移してきたんだよ」

「は？」

「簡単なことだっただろ？10年も先に転移していれば3日前に来た人より情報が多くて当たり前だと言うことさ」

「ちよ、ちよつと待って下さい！そんな事がありえるんですか!？」

アインズは信じられなかった、自分が何処か別の世界に転移したという事だけでもあり得ないのに、ただ1人だけさらに10年前に転移したなんてもう理解がつかない。

「現に今までのアインズ君との会話で分かったのはそういう事なんだよ、不思議なこともあるものだね」

レオンはそういうものだよと笑っていた、もはや本人は納得しているようだった。

「ええ…そんな感じで良いんですか」

「良いんだよ、また会えることが出来たんだから、それだけで俺はよかったんだよ」

その後アインズはレオンからこの村『カルネ村』の位置を教えてもらったり周辺の国の名前や都市などの情報を教えてもらった。

「そろそろナザリックに帰りますか。レオンさんも戻ってこられるんですよね？」

「あーその事なんだけどね、ナザリックに戻りたいには戻りたいんだけど…」

レオンが言いよんどんでいると村長が数人の村人を連れ申し訳なきそうに歩いてきた。なにか厄介ごとがまた出来たと言わんばかりの雰囲気だった。

「レオン様、この村に騎士風の者達が近づいているらしく…勝手なお願いで申し訳ないのですが」

「んーあーはいはい、良いよ対処しましょ。アインズ君は如何する？下がつとく？」

流石にこの村に直接関係の無いアインズにこれ以上迷惑を掛けるのは気が引けるのだろう。レオンが困った顔をしながら尋ねる。

「いえいえ、かまいませんよ。ここまで来たら最後までお手伝いしますよ。では村長殿の家に生き残った村人を集めて下さい。村長殿は私達と一緒に村の入り口でその集団を待つという形でどうでしょうか」

「んじゃそれで行きましょう、村の皆に連絡してもらえる？村長は今から俺達と行きますか」

アインズの提案を受け村人が走って掛けて行った、先ほど襲撃を受けたばかりだろうか顔は怯えていたが行動は早かった、悲劇は繰り返したくないのだろう。

アインズたちが村の入り口に着くとレオンはなにやら小さい声でつぶやき始めた。

「レオンさん何をしているんですか？」

「いや、クリュプトンのスキル使って能力をペロロンチーノに切り替えたんだよ、そんでスキル『スカイ・アイ空の目』でこっちに来てる集団を見とこうかなって」

『スカイ・アイ空の目』を使えばかなり先まで見えるのだ、騎士風の集団の所属が分かれば前もって対策が打てるということだろう。それが攻撃する対象にしてもそうでなかったにしろ。

「さてと、何処の所属かな？……げ!?マジか!？」

レオンはスキルを発動したとたん落ち着きが無くなった、予想していなかった集団だったのだろうか。それとも自分達よりも強者だと言うのだろうか。

「どうしたんですかレオンさん！まさかそれほどの強者だったんです

か!？」

アインズの言葉に村長は震え上がっていた、まさかこの村は今度こそ本当に滅ぼされてしまうのではないかと。こんな所でたっているべきではなく、急いでこの場から逃げるべきではと考え始めた。

「いや、違うんだ。何て言えばいいかな、取り合えず強さはまったく問題ないよ。俺たちが負ける要素は無いくらいなんだけど：個人的な理由で今あの集団に会うわけにはいかないんだよね」

「では本気で戦う必要は無いんですね？」

「そんな必要はないよ、彼の場合は俺達と戦闘になることは絶対に無いから安心して」

戦闘にならないという言葉聞いた村長の顔から不安が和らいでいった、だが戦闘にならないというのは如何いうことなのだろうか、そしてレオンが会えない理由とはいったい。

「んー…よし！村長、俺は今日この村に来ていない。そしてこの村を救ったのはたまたま居合わせた旅人のアインズ・ウール・ゴウンさん達。そしてアインズ君は俺と友人では無く顔見知りでも無い。この設定でいこう、拒否は認めません！以上！」

レオンは村長の家に隠れとくから。と言いつつ残して転移で消えていった。

アインズと村長はあつげに取られていたが、レオンが居なくなつた以上言われたと通りにするしかないのだろう。幸い戦闘になることは無いとの事だ。なら相手がどの様な人物なのかじっくり観察するとうしよう。

5話

「ゴウン殿お元気で！」

ガゼフも相手との戦力差は理解できているがただ殺されに行く訳ではない、勝てないと分かっている方も方に一つの可能性が無い訳ではないからだ。

全てを理解した上で死地へ向かう王国戦士長の背中は悲しみや恐怖を感じさせなかった。

戦士長達の背中が小さくなるとアインズは重くなった空気を払うかのように思いをこぼす。

「やれやれ、初対面の人間には虫に向ける程度の親しみしかないが：どうも話してみたりすると小動物に向ける程度の愛着が沸くな」

「ですからあの尊き御名前を用いてまでお約束されたのですか？」

「そうなのかもな、いや、死を覚悟して進む人の意思に」

「なかなか悪くないものだろ？不器用だけど力強くまっすぐ進む意思って」

アルベドの横から先ほどまで居なかった男の声が聞こえるが姿は無い、レオンが不可視の魔法を使って合流したのだろう。

「ええ：自分とは違うなと思いました：どうしますか？」

「取り合えず様子見といこうか、伏兵の確認ぐらいはしとく？」

アインズはアルベドに指示を出し戦士長達が向かった先に目を向ける。

「さて、この国最強の戦士とスレイン法国の戦力を調べさせてもらいますか」

「とどめだ、数体で確実にしとめろ」

止めを刺せと声が聞こえる、自分もこうなることは予想できていた。だがこんな自分に従ってくれた部下の為にもこんな所でくたばる事など出来ない。

この男を倒さなければ沢山の民が犠牲になるかもしれない。

「があああああ！なめるなああああ!!」

全身に力を入れる、痛みでろくに力が入らないがそれでもこんな所でむぎむぎ殺されてやるわけにはいかない。

「俺は王国戦士長！この国を愛し、守護するもの！この国を汚す貴様らに負けるわけにいくか!!」

あの村の民はゴウン殿が助けてくれようだろう、ならば自分は敵の数を一人でも多く減らし負担を減らしておこう。

王国も心配だが王国にはアダマンタイト級冒険者の彼女達も居る、そしてあの男も文句を言いながらも国の為に動いてくれるだろう。

なら俺はここで王国の民を一人でも救うために剣を振るうまで。

「ふ、はははははは!!下らんな！そんな夢物語なんになる？お前を殺した後村人も殺す、貴様は部下も民も救えないのだ！」

敵の指揮官と思わしき男が高らかに笑う、敵の部下たちも笑っている声が聞こえてくる。

「はっ、まったくくだな。力無き者が語る夢など空想、妄想でしかない。だからもつと強くなれといったらる？ガゼフ・ストロノーフ」

自分のすぐ後ろから聞こえてきたのは自分の言葉をあざ笑う声だが敵意は無い、そして自分はこの声を知っている。だが声の主がここに居ることなど…

「レオン、殿？なぜここに？」

振り向くと先ほどまで自分の後ろには部下たちが横たわっていたはずだが、その部下の姿は無く。自分の姿を嘲る一人の男が立っていた。

「よお、なかなかいい顔になったじゃないか戦士長さん、男前が増したんじゃないのか？」

その場に似つかない飄々とした態度で声を掛けてくる。

「何者だ？」

「通りすがりの村人ですよー、お気になさらず…さて、邪魔者はそそくさ退散させてもらいますか」

退散という声が聞こえたと思った時には周りの景色が変わっていた。

先ほどまでいた草原ではなく建物の中だった、建物の中には怯えた表情で自分を見る村人と先ほど居なくなっただけだと思っていた部下が転がっていた。

「ここはいったい？」

ふと口を出したのは純粋な疑問であった、誰かに答えを求めたわけではないのだが。その問いに答えてくれたのは先ほど撤退を宣言した男であった。

「ここは村長の家の中だ、仮面の旦那が魔法を掛けてくれてる」

「なぜ…あなたがここに？それに仮面の旦那と言うのはゴウン殿？」

「さっき言っただろ？『通りすがりの村人』だって、まあ安心して寝ておけばいいよ」

レオン殿は部下と俺を見ると鼻の先で一閃する。

それを見ると力が抜けたのか膝を着いてしまった。

「ですがやつらの相手は？」

「それこそ心配ないだろうよ、仮面の旦那が相手をしてくれてる」

なるほど、ならば心配ないのだろう、安心すると全身の力が抜け地面に転がってしまった。自分があればだけ苦戦した相手だったが。ゴウン殿が負けるイメージが全くわからないのだ。

「ところでレオン殿はゴウン殿を知っていたのですか？」

「この村を助けるのに偶然知り合っただけだよ」

「なるほど…ところで俺や部下に治癒魔法を掛けていただいても良いんですか？」

「掛けてやってもいいけど超割り増し料金になってもいいかな？」

「それは怖いな…大人しくポジションを使っておきましょう」

レオン殿が鼻で笑ったのを見て意識を手放した。

「どうやら決着がついたみたいだな。村長、俺はアインズの旦那と合流してくるよ」

「もう我々は出て行って大丈夫なのでしょうか？」

村長はレオンが家を出て行くことに不安を覚えるが、決着がついた

という事は自分たちは安全なのだろう。村人たちも安心して居るようだった。

「ああ、みんな自分の家に戻っていいよ、村長は俺と一緒にアインズの旦那に会いに行く？」

恩人にお礼を言うのは当然だろう、村長はアインズに会いに行くことを承諾し村人はそれぞれ自分の家へと帰る準備を始めた。

「レオン殿、私も共にいきましよう」

そう言ってレオンのほうへ近寄ってくるのは顔の傷が癒え切っていないガゼフであった。ポーションを使っても受けたダメージが大きかったのかこの短時間では回復しきってはいないようだった。

「なんだもう気がついたんですか、王国戦士長殿」

レオンからの嫌味にも取れる返事が返ってくるが、ガゼフは苦笑いし受け流す。

「村を救っていただき更に我々も助けて頂いた御仁にお礼を言うのは当然です」

ガゼフの後ろを見るとまだ気を失っている部下が沢山いるようであった。ガゼフより攻撃を受けていた訳ではないが、やはりガゼフと部下の実力がそれほど離れているということだろう。

「まあ、良いんじゃないか？それなら村の英雄をむかえに行きますか。っと先に行つててくれ」

レオンはガゼフ達を置いてエンリのほうへ近づいていった。

「…村長、あの姉妹は？」

「あの姉妹はレオン殿がこの村に来られてから一番交流があったエモット家の子供です。両親が今回の一件で亡くなってしまったのですが…」

「それは…すまない」

自分をもっと早くこの村に来ていたら、いや自分を誘き出すために村を襲っていたのだ、あるとしたら全ての責任はやはり自分なのだろう。

「エンリ、ネム大丈夫か？もう村を襲ってくる連中は居なくなつたみ

「たいだから安心していいぞ?」

「レオンさん…本当に大丈夫なんでしょうか?」

エンリとしてはレオンが安全といつているのだからきつと問題は無いのだろうが戦いに出たアインズが戻ってきていない状況では不安が残るのだろう。だがネムはレオンの言葉を聴いて安心したのだろう、レオンへ抱きついてしまった。

「レオンさん、もう大丈夫なんですか?もうお家にかえってもいいんですか?」

「ああ、村を囲っていた敵の気配がなくなったからアインズの旦那が追い払ってくれたんだろう、だからもう心配しなくてもいいんだぞ?」

レオンは2人を安心させるためにネムを抱き上げエンリの頭を撫でる。ネムは完全に安心したのかレオンへ抱きついていた。エンリも撫でられていた手を握り落ち着いた様子だ。

「2人とももう落ち着いたかな?俺は一度アインズの旦那に会って来るよ」

ネムを下ろしアインズの元へ行こうとするが。

「エンリ…服を離してくれないと行けないんだけど?」

「え?」

レオンは苦笑いをしながら下を見る。エンリもその視線の先を見るとそこにはレオンの服を握る自分の手があった。

「ごめんなさい!」

エンリは慌てる、特に意識していたわけではなかったが、無意識の中でレオンの服を握ってしまっていたのだろう。

「…エンリ大丈夫だよ、ネムもいるだろ?しかし…そうだな、2人で家に帰るときな。アインズの旦那に礼を言ったら二人の所に行くから、な?」

レオンはエンリをやさしく抱きしめ落ち着かせるとアインズの元へと歩いていった。

レオンがアインズの元へ着くとガゼフが王国に来た時にはぜひ我

が家にと招待している様子であった。

「やあ、ご無事なようで」

「これはレオンさん、ええ、レオンさんが仰っていた通り中々に強敵でしたよ」

もちろんアインズからすれば嘘なのだが目の前の2人の関係が完璧に把握できていないので下手なことが言えない状況だ、だがレオンがガゼフを救ったということは少なくとも敵対関係などということではないのだろう。

「それは失礼、なら戦士長を連れ戻したらそちらに加勢するべきだったな」

「いえいえ、レオンさんは村人の安全を第一に考えられ村長のお宅で待機という話でしたので」

ガゼフは2人を観察する、レオンは知り合いではないと言っていたが互いの実力を理解しあっている様子にも感じられるが。この村を救うときに共闘しお互い力を理解したという事か？…今は深く追求する時ではないのだろう。

「ところでゴウン殿はこれから如何されるのですか？」

「そうですね、我々はもう出立します。何処に行くかはまだ決まっておりますが」

「これほど暗くなってきたのは危険では…いや、失礼したゴウン殿のような強者には関係の無いことでしたな。では王都に来たときにはぜひ我が家に。そして罪の無い村人を救って頂き本当に感謝する」

アインズはレオンの方に一度顔を向けると一度ナザリックへ帰還するために帰っていくのであった。

「ところでレオン殿は如何されるのですか？我々は今夜村で休ませて貰い明日の朝王国へ出発しようと思っておりますが」

「俺はエンリ達の家に行って適当に魔法で帰るつもりだよ」
「なるほど、レオン殿なら帰還も魔法で一瞬というわけですか、いやはやうらやましい限りです」

ガゼフはやれやれと頭を振っていたがレオンの視線に気づき見ると先ほどの飄々とした態度ではないレオンが立っていた。

「…ガゼフ・ストロノーフ、君が国王に今回の事を報告するのは知らないが俺の名前は絶対に出すなよ、後々めんどくさい事になっても困るからな」

「それは貴族派や国王派などの理由ですか？それとも」

「そんな事じゃねえよ、今日は休みの日じゃないんだこの村に俺が来てるって大将が知って滅給されたらたまったもんじゃないからな」

「あの方はそのような事をするとは思えません」

「まあ何はともあれ俺が居た事は他言無用でよろしくー部下にもちやんといい聞かせといてくれよー」

用は無くなったと言わんばかりに会話を一方的に打ち切りレオンは村の方へと歩いていった。

レオンは村長やガゼフ達と別れエンリの元に向かう最中に一旦アインズと連絡を取っておくことにした。

「メッセージ。アインズの旦那、聞こえる？」

「聞こえてますよ、俺とアルベドはもうナザリックに転移してきました、レオンさんも転移してこられるんですね？」

「この村でのやる事が終わったら一旦ナザリックに行くことにするよ。そっちに転移するときってナザリックに行くって念じるだけでナザリックまで行ける感じ？」

「そうですね、それで来れると思いますけど…不安でしたらゲートで迎えに来ましようか？」

「アインズの旦那が面倒じゃなかったら迎えに来てもらおうかな？ナザリックの場所を把握してる訳じゃないから一回で転移できる自信無いや」

「分かりました、では用が済んだらまた連絡してください…ところでアインズの旦那って呼びかたは何なんですか？」

「いやー『アインズ君』って初対面同士の人間が呼んでたら怪しまれるかなって思ったから思わず『アインズの旦那』って言っちゃった」

てへ、とおっさんの声で可愛らしく言われてもアインズからすれば気持ち悪いだけなのだ。

「…また連絡してください、そのとき色々とお話しましょう」

「あ、スルーしたなって…切れてる」

レオンは人の少なくなった村を歩く、王都などの主要都市にはコンティニユアル・ライト『永続光』が付与されたマジックアイテムによって夜でも普通に歩けるほど明るい王国の村といってもカルネ村は辺境の村だ、当然そんなマジックアイテムは有る筈も無く月明かりか各家の明かりが窓から漏れる程度の明かりしかない。いつもの光景よりも明かりが少なく感じるのは起こった悲劇が原因なのだろう、そんな暗闇を歩き村の中心部から少し離れた場所に在るエモット家へとやってきた。「エンリーネムーまだ起きてるか？」

家から光が漏れてはいるが疲れきって寝てしまっているかもしれない、しかしレオンは姉妹が寝てると思ってはいなかった。

「はい！レオンさん！いらっしやい！」

元気な声と共に出迎えてくれたのはネムだった。

「やあネム、お邪魔させて貰ってもいいかな？」

「はい！どうぞ！お姉ちゃんレオンさんだよ！」

ネムはレオンを家へ招き入れエンリを呼びに言った、その服装は昼間のときの衣装とは違って寝巻きのようであった。

「レオンさんいらっしやいませ、何もご用意できませんがどうぞごゆっくりして下さい」

家の奥からエンリがネムに連れられて出てきたがネムと違って服装は昼間のままだ。

「もしかして着替えの最中だったか？なんなら着替え終わるまで出ておくが？」

「い、いえ私はまだやる事があったので着替えは大丈夫です」

そうかと言いレオンは椅子へと座る、年頃の娘に着替えなどと何度も言うことでもないだろう。

「ところで2人は何か食べたのか？」

「いえ、ネムも私もあまり食欲がないと言いますか…あまりご飯を食べる気にならなくて…」

突然村を襲われ母親と父親を殺されあのような凄惨なモノを見た

のだ、食欲もわからないのだろう。

「なるほど、あんな事があつたんだから食欲も無くなるのは当然か：でも少しでも食べておかないと夜目が覚めたりしてぐっすり眠ることが出来ないぞ？」

「それはそうなんですが：」

「ふむ：ああ、そういうえば昨日作つてそのうち食べようと思つていたクッキーが何枚か有つたな。でも俺今お腹空いてないんだよな。誰か食べてくれないかな。そろそろ食べないと痛んじやうな。コマツタナー」

レオンは『無限の背負い袋』インフイニティ・ハザアザックからバスケットを取り出したその中からクッキーを取り出しながら笑つていた。

「クッキー!? ネム食べたい! レオンさんいいですか!？」

「こ、こらネム! レオンさんに失礼でしょう!？」

食欲がないと言つていたがクッキーを目にしたネムは大はしゃぎだ。エンリもネムを咎めてはいるが視線はレオンの手元にあるクッキーから外せずにいる。

「はは、もちろんいいぞ、ネムの好きなだけ食べるといい：エンリも気にせず食べれるだけでも良いから食べるといい」

ネムは受け取ったバスケットからクッキーを取り出し勢いよく頬張つていた。エンリは迷つていたがレオンが手で勧めると遠慮がちにだが食べ始めた。

この村にはそもそも甘味と言うものが存在しない、しかしレオンが来ると村の子供用にと時々クッキーやパンケーキなどのお菓子を持つてくるのだ。子供達は村では味わえないお菓子に喜ぶのだ。

レオンは両手にクッキーを持ち満面の笑みで食べるネムと遠慮がちにだが笑顔で食べるエンリを見て口元が綻ぶのであった。

「ネム食べ終わつたらそろそろ寝なさい、お腹が膨れたら眠たくもなつてきただろ？」

「うん、分かりました!：レオンさんネムが眠るまで一緒にいてくれますか？」

ネムの突然の提案にレオンとエンリは呆氣に取られていたがレオ

ンは微笑みネムの手を取った。

「ああ、いいともネムが寝付くまで一緒にいてあげよう、エンリも一緒においで」

「ええ!? 私もですか!？」

エンリはまさか自分も呼ばれるとは思っておらず何と返答して良かわからず慌てていた。

「お姉ちゃんも早く!」

そんな姉を置いてネムはレオンを連れて寝室へと向かっていた。

寝室に置かれていたベッドは元々姉妹2人で使っているのだろうネムとエンリが横になっても余裕があるようだった。

「ネムが真ん中でエンリが壁側かな?俺はベッドの横に椅子でももって来るとしよう」

「ううん、レオンさんは真ん中!その横にネムとお姉ちゃんが横になるの」

「ちよ、ちよつとネム!？」

この提案には流石にエンリが1番驚いたようだった、エンリとしてはレオンが提案した方法でよかったのだ、自分も流石に年頃の娘だから昔から知っているとは言え男性が直ぐ隣で横になるのは恥かしいのだ。

しかし

「…ネムはそれで、いやそれがいいのか?」

「はい!」

「そうか、ならそうしようか、ほらエンリもこっちに来るといい」

「ええええ!？」

レオンに手を引かれベッドに入っていく、川の字ならぬ小の字のようだ。

「さあネムもう寝なさい」

「はーい!…レオンさん手を握って貰っていいですか?」

「ああ勿論構わないよ」

ネムは満足したようだがエンリは動転していて直ぐ寝れる気分ではなかった。

それからどれだけの時間がたったかは分からないがネムは眠っていたがエンリはまだ眠れていなかった。この状況に慣れていないのか胸がドキドキしていて寝れないようだった。

「…エンリ眠れないか？」

「は、はい、すみませんネムの我俣に付き合っていたらいい」

「気にすることは無いよ不安だったんだろう」

「そう、なのかも知れませんがママとパパを殺されてネムは不安なんだと」「それだけじゃないと思うぞ？」「え？」

エンリは言葉を遮られ驚きレオンの方へ顔を向けるとレオンが上半身を起していた。

「ネムが不安になっていたのは両親を失ったことだけではないと思うぞ？」

「それだけじゃない？それって…」

「ネムゆっくり休むと良い…悲しい夢を見る事もないほど深い眠りを『睡眠』^{スリープ}」

レオンはネムへと魔法を掛け周囲へも。

『^{サイレンス}静寂』の魔法もこの家全体に掛けた…さあエンリ」

レオンはそういうと再び横になりエンリを抱きしめた。

「これこれ、レオンさん!?!ああああのこれはいったい!?!」

エンリは突然の出来事に慌て気が動転しているがレオンに抱きしめられている為に起き上がることが出来ないでいた。

「よく頑張ったな辛かったな」

「え？」

「怖かっただろ？兵士に襲われて。悲しかっただろ両親を殺されて。不安だっただろ姉妹2人きりになって」

「…確かに怖かったし悲しかったけど私にはネムが居るから…ネムの前では頑張らないと…」

「ネムは気づいていたぞ？」

「そんな…」

「ネムはエンリが無理しているのを分かっていたから俺が真ん中に来

るようにいったんだと思うぞ」

ネムが自分を真ん中にすれば両サイドに信頼している人に囲まれて安心して眠ることが出来るだろう。しかしそうすると姉はどうなるのだろうか？自分の前では気丈に振舞ってくれているが本人も怖いはずだ不安なはずだ、実際に村長の家から帰るときにレオンの服を握っていたのはそういう事なのだろう。だからこそレオンに真ん中で寝てもらえば姉も安心できるのではないのか。

「私、ネムを不安にさせない様になって振舞っていたのに本当は心配させていたんですね…お姉ちゃん失格ですね」

「それは違うよ、大好きなお姉ちゃんだからこそ一緒に安堵したかったんじゃないかな？」

「一緒に…」

「自分を守ってくれる大好きなお姉ちゃん、だからネムは大好きなお姉ちゃんが悲しくならないように守るねって。そういうことなんだと思うよ」

「でも…私はお姉ちゃん…ママもパパももう居なくて…私が頑張らないと…」

「なにもかも一人で抱え込まなくて良いんだ、ネムと一緒に頑張っていけばいいんだそれに俺も居るだろ？これからは俺ももつと小まめに来るようにするから。みんなで頑張ろう」

「それでも…私はお姉ちゃん…」

「なら今日思う存分に悲しいことや不安を吐き出すといい。魔法を掛けているからネムが起きることはないし家の外に音が漏れることは無い。明日からしっかりとお姉ちゃんに居たいのなら、弱いお姉ちゃんをここで出しておくといい」

レオンが優しく抱きしめるとエンリも抱きつき、思いが止めどなく溢れ出した。ネムの為に頑張らなくてはと思っただけでもエンリもまだ子供なのだ。本来はこの悲しみを抱え込めるほど強くないのだ。

「ばばああ!!ままあああ!!何で死んじゃったのお!!いやだよお!!2人になりたくないよ!!まだ一緒にいたいよお!!ネムと2人だけなんて…いやだよお!!ままあああ!!ばばああああ!!」

どれ程時間がたったのだろうか、声が枯れるほど泣き叫ぶと疲れたのだろうエンリも眠ってしまった。

レオンは眠るエンリにも『睡眠』を掛け家を後にした。

「さて『伝言』^{メッセージ}アインズ君お待たせして悪かったね」

「いえいえ、大丈夫ですよ。どこに『転移門』^{ゲート}を開けばいいですか？」

「んー村の中だと誰かに見られても面倒だからこつちで最初に出会った場所でもいいかな？あそこなら少し離れてるし」

「分かりましたではゲートを開きますね」

「んじや俺も直ぐ行きまーす」

レオンはアインズと合流しナザリックにある黒曜石が光り輝く円卓が有る部屋に来ていた、アルベドはレオンの『守護者たちは元気かな？悪いんだけど会ってみたいから呼んで来てもらえるかな？』の一言によってナザリックを走り回っていた。

「ナザリックがリアルになつたらこんな豪華絢爛なんだね、いやゲームの頃から豪華な造りだとは思っていたけどさ」

「そこらへんに置いて有る物とかリアルでは絶対に見ることが無いようなものが沢山有りますね」

レオンがナザリックの来てまず驚いたのはその豪華な造りだった、ユグドラシル時代に毎日と言っていいほどログインして見慣れていたが、そのすべての物がリアルの現物になっていると今までと見える景色が違うのだ。

「さて、アルベドが戻ってくる前に気になったことを聞いてもいいかな？」

レオンはモモンガと再会してからどうしても気になっていたアインズとアルベドの関係性について。レオンの記憶ではアルベドは守護者統括であってアインズの恋人、嫁という認識は無い、しかしこの数回会って話しただけでも『アインズ様好き好き』が凄すぎたのだ。

「いったい何があったの？アルベドからずいぶん好かれてるみたいだけど、ナニがどうしてナニがあったの？」

「何の発音を変えないでください！そういうったことはありませんから…」

「そういうこと？ん？どんなことだい？お兄さんに言っでごらん？」

「どこの助平親父ですか!? 本当にレオンさんの言っているようなことは有りませんか！ただ…」

アインズは言いよどむ、何時かは言わなければならない、だがいざ自分が行ったことを言葉にすると恥かしくなってくる。まるで自分の黒歴史ノートでも見せる気分だ。

「あー話したくないようなことが有ったならもう構わないよ？なんか悪いことを聞いたみたいだね…悪かったね」

レオンはぼつが悪そうにしているアインズを見て聞いてはいけな事だったのだろうと考え頭を下げた。

「や、やめてください！レオンさんが謝るような事ではないんです！実は…」

アインズはユグドラシル最終日に何があったのか、レオンを待っている間に自分の行ったことを話した。因みに自分の行いを話している間にアインズは3回ほど精神の沈静化を繰り返すのであった。

「く、くくくく…はははははははは！モモンガを愛してる!?!いいね!いいじゃん!モモンガ君もそういう気持ちがあったんだね!いいじゃん!美人に愛して貰える!男なら一度は夢見る願望じゃん!」

アインズの苦悩やいざ知らず、レオンは涙が出ているのか目頭を押さえ盛大に大笑したのであった。

「そんなに笑わないでくださいよ…自分でも気の迷いだつたと反省してるんですから…」

「はあ…はあ…あーやつべー笑いすぎてダメージ食らった気分だったわ、悪い悪いでも良いじゃん最後までらい自分の好きにしても、誰も文句なんて言わないよ」

笑いすぎて疲れたのか肩で息をしていた。

「しっかしタブラさんも人が悪いな自分の作ったNPCにビッチって…あの人の性癖そんなんだったのか」

「まあビッチが可哀想に感じたので変更したんですが、こうなる事な

ら変更せずに消すだけにして置けばよかったと後悔してます」

「そう？結果よかったんじゃない？」

「なぜですか？自分が盛大に笑えたからですか？」

「そういじけるなって、だって考え方を変えたらモモンガ君は『絶対に裏切らない仲間』を手に入れたんだろ？聞いた話ではNPCが裏切る事はなさそうだけど、それでも絶対的な味方を手に入れたと思えば気持ちもまぎれるんで無い？」

NPCは自分達に盲目的に信頼し忠誠を誓ってくれているがもしもの事が有る可能性が無い訳ではない、そのときアルベドは恐らく――モモンガを愛している――この設定によつて裏切ることは無くなるだろう。

「確かにそうかも知れませんが…タブラさんの設定を汚してしまった気がして」

「んーまあもうすんだ事だと思つて吹っ切れなつて。それにタブラさんも気にしないと思うよ？」

「なぜですか？」

「だって自分で作った設定にビツチつて書く性癖の持ち主だぜ？下手するとモモンガ君に設定をいじられた事に喜んでる可能性が有るよ」

そういうとレオンはまた大笑するのであった。アインズもレオンの意見に納得してしまいそうになっていた。

「失礼いたします、各階層守護者を連れてまいりました」

「うむ、入れ」

アルベドの声にアインズが入室を許可すると第4と第8以外の各階層守護者と執事が入ってきた。

「やあ皆久しいね、元気にしてた？」

レオンは入つてくる守護者達に飄々と声を掛けるが声を掛けられた方は驚愕の表情を浮かべていた。アインズから異常事態が発生したと言われ、その日からレオンを探すように言われていたが無事発見できたと報告は受けていなかったのだ。

「なに!?これはレオン様ご無事でしたか」

守護者たちが驚いている中最も早く状況を理解したのはデミウルゴスであった、彼はアルベドが自分を呼びに来た時『アインズ様がお呼びよ』としか言ってはいなかった。まさかこの様な事ならばもっと早く来るべきで有った。アルベドを横目で見るとまさにしてやったりと云った顔だ。

「レオン様！お帰りになられていたんですか！」

「お、お帰りなさいませレオン様」

デミウルゴスの言葉を聴き各守護者たちが思い思いの言葉を発し始める。

「ああ、レオン様御無事でよかったですでありんすえ、わたしに御声を掛けていただいてから御姿が見られないとの事でしたのでとても心配していたでありんす」

「至高ノ方々ノ御一人デアルレオン・D・ファンションサマデアレバナ何モ問題ハナイト思ツテオリマシタガ、御無事デ何ヨリデゴザイマス」

「御無事で何よりでございます、お帰りなさいませレオン様」

各守護者達が思い思いの言葉を言い終わるとレオンが椅子から立ち上がりシャルティア、アウラ、マーレの前に歩いていく。

「レオン様如何なさいましたか？」

「レ、レオン様？」

「い、いかがが為さいましたか？レ」「かーわーいーいー！」ひゃい!？」

唐突に大声を出したかと思うとレオンは目の前に起っていた3人を抱きかかえた。

「なーにーこーれー!?ちよー可愛いんですけど！何!?アインズ君こんなに可愛い子を独り占めしてたの!?それは駄目だわーずるいわーいやーやっぱいわー」

3人を抱きかかえ小躍りを始めたレオンにアインズは愕然としていた、セバスとデミウルゴスは微笑みコミュニティスは下顎をカチカチと鳴らしていた。そんな中私もウエルカムですよと両手を広げアインズの方へにじり寄る守護者統括殿。

「レ、レオンさん!?どうしたんですか!？」

「どーしたもこーしたも無いでしょ!?!こんなちよー可愛い子達を独り占めは駄目だわーそんな事されたら激おこだよー」

かわいいよーと連呼しながら三人へ頬ずりをしていくレオン、アウラ達も恥かしいが嬉しいのか顔を赤らめながらもなすがままであった。

「ええ…」

アインズとしても3人が可愛いことは認めるがそれ以前にレオンの言動に驚いていた。共にゲームをプレイしていた時からカッコいいモノや可愛いモノが好きなのは知っていたがここまで醜態をさらすような人ではなかったのだが。

「いやーユグドラシルの時から可愛いなーとは思ってたけどさ、何ていうの?レオン様とか言われたらもう無理だよね?」

「えええ…私としては今のレオンさんの言動の方がちよーやばいですよ…」

「え?なに?アインズ君はこんなに可愛い子達を撫でたいとか思わないわけ?抱きしめたいとか思わないわけ?可愛いは正義じゃないって?良いだろう表出ろや戦争だ」

レオンの言葉に守護者達の空気は固くなるがレオンが本気で言っている様子も無いので安心する。

「あ、あのレオン様!聞きたいことが有るのですが!」

アウラが抱き締められながらもレオンとアインズのやり取りに違和感を覚え質問をする。

「ん?なーに?誰が一番可愛いかって?それは決められないよー?皆が1番だよー」

すでにまともな会話にすらなっていない、デレッツデレである。親バカを通り越して最早爺バカである。

「はあ…レオンさん話が進まないし話が出来ないので3人を降ろしてください」

「えーしかたないなーじゃあまた今度ゆっくりお話しよーねー」

文句を言いながら3人を降ろしていく、アウラとマーレは顔が真っ赤になっており、シャルティアはだらしのない顔をしていた悦楽に酔い

しれているようだ。

「それでアウラよ、レオンさんに何を聞こうとしていたんだ？」

「ひゃ、ひゃい！先ほどからレオン様がモモンガ様の事をアインズ様と呼ばれていたので気になってしまっただけです。」

「そのことか、アルベドよ他の者は王座の間に揃っているのか？」

「ああ、アインズ様も私を抱き締めていただいても良いんですよ、ああ！そんなところをおさわりに……」

アインズが声を掛けるもアルベドは妄想の世界へと旅立ってしまっていた。レオンが人目も気にせず3人を抱き締めるものだから自分もアインズに人目を気にせず抱き締められたのだろう。欲望駄々漏れ過ぎですね守護者統括様。

「あー守護者統括殿がお疲れのようですので私が代わりにお答えしてもよろしいでしょうかモモンガ様？」

「そ、そうだな頼むぞデミウルゴス」

「はい、モモンガ様が戻られアルベドが我々を呼びに来た時にしもべの者を厳選し王座の間へ集めるように仰せ付かっていたので既にモモンガ様とレオン様の威光をその目に焼き付ける為に忠誠を誓っていることかと」

「ふむ、ではそろそろ我々も行くとしよう。アウラよ先の質問の答えは王座の間で答えるとしよう」

「畏まりましたモモンガ様！」

「我々は先に向かっておりますのでモモンガ様とレオン様は御緩りとお越しく下さい、行きますよアルベド」

呼んでも反応の無いアルベドにデミウルゴスがフックをかましていたがアルベドは特に気にした様子も無くけろりとしていた。さすがナザリツク最高の盾だなーと感心していたレオンにアインズは王座での打ち合わせを始めるのだった。

「さてレオンさん色々とお聞きしたいことが有るんですが、よろしいですか？」

「昼間に聞いたこと以上に細かく詳しくかな？」

「ええ、ですが全てを教えて頂けるわけではないですよね？」

「そうだね、自分で色々見て回るのもいいことだよ。でもこの世界でやっていくのに必要なことは教えてあげるよ。報酬しだいだ」

「ええ、お金取るんですか？」

「当たり前よー俺の10年分の知識が欲しいならそれなりの対価は頂かないとね？知識とは、情報とは、大切な資産ですのよ」

そう言ってレオンは左手の親指と人差し指で円を作りいやらしい笑みを浮かべる。

「何が欲しいんですか？武器作るのに必要なデータクリスタルとかですか？」

武器やアイテムを作るのが好きだった人の事だからこっちの世界に來ても武器を作っていただろう、ならデータクリスタルが減っているだろう。そう思いアインズは自分の所持しているデータクリスタルを探す。

「いやそこまでしてもらおう必要は無いよ、俺が教えられる事なんて少し調べたらいくらでも分かるような事だから。俺が欲しいのはポーションとかの消費アイテムを少し貰えたらってだけだから」

「それだけで良いんですか？」

「それだけって簡単に言うけどねアインズ君、ここがユグドラシルで無い以上今もっているアイテムは今後手に入らない可能性が高いという事、そしてユグドラシルではハズレアイテム等ですらこの世界では一級品のアイテムに早代わりなんだよ」

「なるほど…」

レオンの言葉にアインズは改めて考えさせられる、今自分たちが所持しているアイテムは『ユグドラシルの物』ばかり、それは今後手に入らない事がレオンの言葉によって明確になった。ならば現地でのアイテムで代用していくしかない。

「まあこの話は後日ゆっくり話そうか、王座の間に彼らを待たせているんだろ？ならそろそろ行こうよ」

「そうですね、この世界の情報だけでなくレオンさんがこの世界でどうやって生活していたのかも気になりますからね」

王座の間に集まっている多くの者が跪き頭をたれ忠誠を顕していた、その中をアインズとレオンの足音が響く。しもべたちは足音がアインズ一人のものでない事に気づき頭を上げその姿を拝見したい気持ちに駆られるが今はその時ではないと自制する。

階段を上りアインズが王座へ座りその横にレオンが立つ、王座から見える景色にアインズは感動を覚えていた。自分達が、ギルドの仲間たちが作り上げた景色。

「面を上げよ」

アインズはしもべ達が自分達の姿を確認するのを見る。

「今回謎の異常によって行方が不明となっていたレオン・D・ファンションが無事ナザリックに帰還した、そして喜ばしい事にこの世界の情報を手に入れての帰還となった」

アインズの言葉にしもべたちから歓喜と驚愕の声が漏れた。

その様子を見たレオンが一步前が出る。

「諸君、見知ってもらえている様だが名乗らせてもらおう、レオン・D・ファンションだ。諸君らよりはこの世界の事を理解できている。諸君らはその情報を元に行動しナザリックのために行動せよ。なに、存分にこの世界を楽しもうではないか」

「この場の者、そしてナザリックの者に伝えるべき事が有る——
グレイター・ブレイク・アイテム
『上級道具破壊』」

モモンガの魔法によって天井から垂れていた大きな旗が地面へと落ちる。

その旗に書かれていた模様はモモンガのモノだった。

「私は名前を変えた、今後私の名を呼ぶときはアインズ・ウール・ゴウン——アインズと呼ぶがいい」

アルベドが満面の笑みで声を上げた。

「ご尊名窺いました。アインズ・ウール・ゴウン様万歳！」

しもべたちが唱和し、万歳の連呼が王座の間に広がる。

「お前達に厳命する！アインズ・ウール・ゴウンを不変の伝説にせよ

！」

「アインズ君かっこよかったよー、魔王ロールは伊達じゃないね」

「それ褒めてます？でもなんか精神が高揚してきましたね」

「さて、気分が乗ってるアインズ君には悪いけど朝になったからエンリたちの元に戻ってから俺もこっちで住んでる家に帰るとするよ」

「そういえばレオンさん何処で暮してるんですか？と言うか何処で何やって生活してるんですか？」

「俺？客将やってるよ」

「はい？」

「だから『リ・エステイーゼ王国』で客将やってるんだよ」

「はあ!？」

「あ、屋敷住みで可愛いメイドも1人いるよ」

6話

「客将と言う事は戦士長と顔見知りだったんですか?」

レオンがリ・エステイーゼ王国で客将をしているならガゼフのことを知っているのも納得が出来る、しかし何故カルネ村でガゼフと会う事ができないと言ったのだろう。

王国内で2人は敵対してでもしているのだろうか? 出会ったらガゼフがレオンに戦いを挑んだりする関係なのだろうか、スレイン法国と戦闘を見る限りレオンが負ける要素が見当たらないが。

「そうだよー彼が御前試合に優勝したときに顔を見たのが初めてで話したのはその1年後だから3年の付き合いになるかな?」

「なら何で戦士長がカルネ村に来るとき隠れたんですか? 顔見知り同士だったら説明も早いでしょ?」

「そうなんだけどねー俺王国での立場ってか城内の評価って何ともいえないんだよね、リ・エステイーゼ王国って国王派と貴族派に分かれてるんだけど、ガゼフは国王派で俺はどっちつかずの立場にいるんだけど勝手に貴族共が自分達の派閥に引き込んだって吹聴するもんだからそこ等へん理解できてない国王派が目の敵にしてるのよ、ガゼフはそれとなく理解している感じだけど部下の一部は俺を目の敵にしてる風でね。はあ…これだからバカは嫌いだよ」

やれやれだと言わんばかりに大きなため息をつく、アインズはレオンの言いたい事が分かってきた、要するにレオンとしてはガゼフを助ける事に問題はないがああ状況での遭遇は今後の厄介ごとがおきる事への懸念だったと言う事なのだろう。

「事情は分かりましたがそもそもなんでレオンさんが貴族派だと言う事になっているんですか? どんな事したらそんな吹聴されるんですか」

「貴族にこつちの世界で手に入れた素材から作ったアイテムを高額で売ったり、休みの日に貴族の護衛してたら勝手に言い出した」

「自業自得じゃないですか!? てかこつちの世界でもアイテム作ってるんですか!?!」

レオンはギルドメンバーあまのひとつと同じ鍛冶師だが、彼とは違い職業レベルを鍛冶師と戦士職をメインにしたビルドをしていた。一応自分で作った武器を使うために魔法職も習得している。

「自業自得なのかなー？バイトは適当に相槌打ってモンスターや野盗とかあしらうだけだしアイテムは何の能力もない装飾品をぼったくり価格で買い取らせてるだけなんだけなんだけどなー」

「こっちの世界でもお金儲けメインなんですね、流石は経営者」

「そらそうよ、世の中お金よ？そう意味では貴族^{バカ}って便利だわ、ちやちやつと作ったガラス細工ですら金貨を大量に落としていくんだから」

貴族に対する商売を思い出したのか悪意たつぷりの笑みを浮かべていた。

「本当に価値を理解していない、できない貴族ほど便利な物は王国に存在しないと思ってるよ。話変わるんだけどナザリックって食堂とかシェフ^フっていたよね？」

「利用したことは無いですがありますよ。お腹空きました？食べに行くか運んで貰いますか？」

アイNZはアンデットになってから食欲とは無縁になってしまったがレオンはドツペルゲンガー、異形種と言えど食事もある。アイNZは再会してからレオンが何も食べていない事に気がついた。

「普段はリング・オブ・サステナンスを着けているから食事は不要だよー食堂は有るんだね。それじゃあそのメガネを掛けたメイドさん、10年も逢って無かったせいで名前が思い出せないんだお名前を伺ってもよろしいかな？」

「ボ…失礼しました。私は7姉妹^{ブレアデス}の副リーダーを勤めさせて頂いているユリ・アルファと申します」

「じゃあユリ、悪いんだけどこのバスケットにサンドイッチを作ってもらって入れて来て貰っても良いかな？」

レオンはそう言って空間からカルネ村で空になったバスケットを扉の横で待機していたプレアデスのユリに預ける。

「畏まりました、サンドイッチの具材は何がよろしいでしょうか？」

「食べるのは村の子供…女の子2人だから具材は野菜中心で干し肉を少し入れてもらえるかな？量は少ななくて良いよ」

「分かりました、ではそのように申し付けておきます」

ユリはバスケットを受け取ると笑みを浮かべ部屋を後にした。

（ふふ、やはりレオン様は前から私たちに御声を掛けて下さった慈悲深いお方。そして人間の子供にもその優しさを分け隔てなく与えてくださるなんて…流星は至高の御身と言う事ですね）

ユリ・アルファはナザリックでも希少な属性が善である存在だ。自分の考えがナザリックでは理解されにくい事も分かっている。そんな自分の考えを理解してもらえるのは同じく属性が極善であるセバス・チャンかペストーニャ・S・ワンコだけだろう。至高の御方々が何処かに行かれる中この地に残ってくださっただけでも慈悲深いお方だと思っていたが。

（お許しただけなら一度ゆっくりお話してみたいですね）

ユリは自分の造物主以外にも子供好きな至高の存在がいる可能性に胸を躍らせ食堂までの足取りが軽かった。

「やばいねアインズ君…ここが楽園、いや天国？桃源郷か？」

「またですか、いいたいことは分からなくはないですけどレオンさん、ユグドラシルの頃はそこまで酷くは無かったですよね？」

「酷くつてのは理解しかねるけど、そらアインズ君より先に10年も歳を取ったら多少感受性が豊かになるもんよ」

アインズからしてみれば人目を気にせず守護者達を抱きかかえるのは多少どころの話ではない。

「そういえばレオンさんに聞いておきたい事があつたんですが」

「ナザリックで誰が一番のお気に入りかって？そうだなーシヤルテイアは少し性癖変わってそうな雰囲気だけどそれはそれで可愛いところだよ。アウラは男装系少女でしょ？いいねそれがいい、恥かしながらワンピースでも着てきたら一瞬で心臓打ち抜かれるね間違いない。マーレって男の子でしょ？ん？ちがう？男の娘だっけ？ま

あいいや、あんな可愛い子が性別男って嘘でしょ？ぶくぶく茶釜の趣味も計り知れないね。プレアデスも可愛い子ばかりじゃん、あんな可愛い子達に『お帰りなさいませご主人様（ハート）』なんて言われた日には膝から崩れ落ちる自信が有るね。いや崩れ落ちない男がいたらもうそいつ男として生きてないし機能してないわ。一般メイドもいいよね、あの子たちレベル1なんだよね？そこがまたいいよねー全員守ってあげなきゃって使命感に駆られるね。父性ってやつかな？あ、でも勘違いしないでね？女の子ばかり見てるわけじゃないよ？デミウルゴスとかキュートスとかセバスも勿論いいと思うよ？デミウルゴスのまきになんでも分かってますって感じもいいし。コキュートスのザ・武人って感じは建御雷さんの求める武人って思いが強く現れてるよね。セバスはなにアレ？あのナイスなミドルなダンディーなおじ様渋すぎでし「レオンさん!」え、なに？」

アインズはもはや驚きを通り越して飽きれていた。元々おしゃべりな人ではあったがまさか500文字以上^{ほど}にわたって自分の思いをぶちまけられるとは思わなかった。

「私が聞きたいのは誰が可愛いとかではなくてですねって、アルベドの名前が出てきませんか？アルベドは好みでは無かったんですか？」

あれだけ勢いよく各守護者達の事を言っていたがアルベドの名前は出てこなかった。可愛いのは好きだが綺麗なのは話が別なのだろうか？

「あーアルベド？もちろん可愛いとは思うよ？いやどつちかと言うと美人な出来る女系だから綺麗かな？でもさ：彼女『モモンガ様大好き』が凄すぎでしょ。あそこまで凄いと流石に俺もノータッチと言うかあまり他の男に見られたくないかなって思ってる」

「あ、はい」

「で？聞きたい事って何？」

「お気に入りの事を聞きたいって事じゃない事には気づいていたんですね」

「そろそろよ」

なに当たり前のことを、当然だといわんばかりに冷笑を浮かべている。

(いやいやどう考えても本気で喋ってましたから！あんなに力説しておいて冗談だよって言われても説得力ありませんから！)

「なんか釈然としませんがまあいいです。守護者やセバス達から聞いたんですがユグドラシルの頃に1人でログインしてNPCに声掛けて回ってたほんとうですか？」

反応の返ってこないNPCに声を掛けて回る行為などアインズにとつてはあまり理解のできる行為ではなかった。やはりリアルでのストレスが原因で奇行に走ったのだろうか？

2人で運営用の金貨を集めているときもお互いに仕事の愚痴を言い合っていた。しかしそれだけではストレス発散にはなっていなかったのかもしれない。

「声掛け？回る？なんのこと？」

「シャルティアがユグドラシル最終日に挨拶してもらったとか、セバスが普段から声を掛けてもらっていたとか行っていたんですけど？」

「あーはいはい、挨拶してただけの話だね、いくらNPCとは言え横を通り過ぎるのに無言で過ぎて行くのは失礼かなって、別に声を掛けて回ってたって事は無かったよ？」

「ええ…そんな理由ですか」

「そんな理由ですな」

アインズには納得し難い理由であったがレオンが言い切るのだから納得せざる得ないのだろう。だがどんな理由にしてもレオンはその行動によつてナザリックのNPC達から『至高の41人』ではなく『自分達を気に掛けてくれる至高の存在』という認識に変わっているのだろう。アインズはレオンと共にナザリックの中を見て廻った時にNPC達が2人に対しての対応に僅かながら違いが有ることに気づいていた。

「そうだアインズ君、ずっとナザリックで籠ってるのもきつくない？もしよかつたらなんだけど…俺と冒険者やってみない？」

「冒険者ですか？しかしレオンさんの話を聞く限り冒険者になっても

ユグドラシルのような冒険はできないと思っただけです」

この世界の冒険者はモンスター退治が主な仕事だ、ユグドラシルのように人が踏み込んだような事のない場所への探索は基本行わず、自分達の拠点から離れる事はしない。これではただのモンスター退治専門の傭兵のようだ。

「まあそうなんだけどね、でもこの世界のお金を稼ぐ事もできるし、この世界の事を自分の目で見て肌で感じる事ができる。それに俺も行ったことのない場所は沢山有るから2人で観光がてらぶらぶらしてみない？なにより：ストレス発散になるよ？アインズ君結構無理してそうだし」

この世界のお金は確かに必要だ、ナザリックに掛かる費用は今まではユグドラシルの金貨で運営していた、当分の間の維持は宝物殿に仕舞って有るユグドラシル金貨で問題は無いかもしれない。しかしユグドラシルの金貨が尽きてしまう前にそれに変わる代用品を見つけなくてはならない。

アインズは守護者たちが求める至高の存在を演じていた。それは友が残してくれた子供たちが望んでいたから。だが…

「無理をしているように見えましたか？」

「そらね、元々魔王ロールしてたから上手に演じてるなーとは思ってたけど、それなりに長い付き合いだからね」

確かに無理な演技を続けていけば何処かでボロが出てしまう恐れも有る。たしかに気分転換も必要だ。この3日間だけで大分息抜きがしたい状態だ。

最初の頃でこそ守護者や美しいメイドが自分を慕い従っている状況に喜びもしたが、何処へ行くにも常に誰かが着いてくる状況に精神が磨り減っているのも確かだ。

「確かに気分転換は必要ですね。この世界のことをもつと詳しく知るいい機会ですし」

「いいねそうこなくっちゃ。俺も雇い主に交渉して自由に動ける時間を増やしてもらってくるよ」

「客将の身分で大丈夫なんですか？」

「んーまあ交渉しだいつてやつ？それに俺はいつまでも王国で暮すつもり無かったからこれを機に王都からさよならばいばいつてのもありだね」

「そうなるとなザリックに戻って来られるんですね!？」

アインズからしてみればそれは願ってもない事だ、こちらの世界で友人が近くにいるのはいざと言うときに心強い、守護者達NPCもきつと喜ぶ事だろう。そしてアインズ個人的にもそれは嬉しい事だ、ギルドのメンバーがナザリックに増える事によって守護者やメイドたちの期待や忠誠が2人いる事によって分散もされるだろう、ストレスが軽減される事を祈りたい。

「ナザリックに戻るのには別に構わないんだけどねえ、うちのメイドも連れて出てくるつもりだから…ほら、ナザリックって基本的には人間お断りじゃん？一部例外を除いて」

「メイドも連れてくるんですか、ナザリックは人間に対していい感情を持つものは少ないから大変かもしれませんね」

確かにナザリックの大半の者達はカルマが悪、極悪に偏っている。セバスやユリのように人間に対して敵意を向けない者もいるがそれはごく少数。

「だから少し考えてみたんだけど、カルネ村の近くに屋敷でも建てて暮そうかなって、そうすればエンリ達の面倒も見やすいし、ナザリックにも来やすい。俺のメイドも暮しやすい…まあメイド以外にも増えるかも知れないけど」

「なるほど、確かにそれはいいかもしれませんが、守護者達はナザリックに戻ってきて欲しいと言いますですがそこは何とか説得してみましよう」

アルベドやデミウルゴスは反対もしそうだがカルネ村との繋がりをレオンが引き受けてくれていると言えば納得もしてくれるだろう。

2人が今後の計画を話していると扉が静かに数回ノックされた。扉の横で控えていたユリが使いに出ているので室内にはアインズとレオンの2人だけだ。レオンは立ち上がり扉に向かった。

「はいはい、どなた？」

「ユリ・アルファアでございます。サンドイッチをご用意できました」
レオンが扉を開けるとバスケットを抱えたユリが驚いた表情でたっていた。

「も、申し訳ありません！レオン様に出て来て頂くなどメイドとしてお恥かしい限りです！」

「え？あーうん…」

レオンからすれば室内に誰も居ないのだから自分が出るのはあたり前だったのだが、ユリからしてみれば主人にわざわざ扉まで足を運ばせてしまった己の失敗だ。

「あー気にするなユリ、お使いを頼んだのは俺なんだ、そして君はそのお使いを済ませてきてくれたんだろ？だったらそんな君を労いたかっただけさ。だから俺の感謝の気持ちを受け取ってもらえると嬉しいな」

レオンは感謝の言葉を述べ室内へと促す。ユリもレオンの優しさに笑みを浮かべる。

「お心遣い有難うございます。こちら仰られていたサンドイッチでございます。人間の子供がお食べになられるとの事なのでカツトのサイズを小さめに頼んでおきました」

「ふふ、俺も君の心遣いに感謝するよ、もしかしてだけど子供が好きなのかな？」

「はい！やはりレオン様も子供が好きなのですか!? あ！いえ、申し訳ありません」

自分の行動が恥かしかつたのか顔を赤らめ俯いてしまった。

「ユリは可愛いなあー俺も子供は比較的好きな方だと思う、もしよかったら今度一緒にカルネ村に行ってみるか？」

「は、はい」

よほど恥かしかつたのだろう首まで真っ赤になって返事をする
首無し騎士^{デュラハン}

（流石レオンさん、ナチュラルにナンパしてるよ。その余裕が俺にも欲しい）

友人のナンパテクに感心する彼女居ない暦Ⅱ年齢のギルドマス

ターの姿があつた。

「さてと、それじゃあアインズ君俺はこれからカルネ村に戻って王都に戻るとするよ。今日か明日にでも雇い主に話をしてみるから君からもアルベド達にそれとなく伝えておいてもらえるかな?」

「分かりました、何て言つた方がスムーズに理解してくれますかね?」
「現地視察、現地調査で良いんじゃない? ストレートに言うのが楽だと思ふけど。多分言いにくいでしょ? その場の雰囲気でも臨機応変に受け答えでいいんじゃない? 転移門。それじゃーねー乙カレーカツカレーユリもばいばーい」

レオンは転移門を開きカルネ村へ帰っていった。

「殆ど私に投げていかないでくださいよ…まあレオンさんらしいと言えば嬉しいか。ユリよ、すまないが守護者達を呼んできてくれ」
「畏まりました、アインズ様」

ユリは守護者達を呼びに部屋から出て行つた、アインズは転移門を見る。守護者達に何て説明するべきか考えなくてはならない、へたな言い訳はシャルティアやコキュートス達は騙せてもアルベドとデミウルゴスは騙せないだろう。それらしい理由を考え手に入れなくてはならない、自分自身の休息を。

レオンはカルネ村のはずれ、エンリたちが襲われていた場所に転移で戻ってきた、そこにはアルカディアが羽を休めレオンの帰りを待っていた。

「アルカディア、バスケツトをエンリ達に届けたら転移門をつかつて屋敷まで帰るとしよう。疲れては無いと思うが…久々にお腹いっぱいにお腹が出来たんじゃないのか?」

レオンが頭を撫でると気持ちよさそうに目を細めレオンの顔を舐める、よほどお腹が満腹なのか上機嫌な様子だ。

「あと少しゆっくりしとくといい」

「エンリーただいまー、もう起きてるかなー?」

レオンは静かにエモット家の扉を開け中の様子を見る。

外は既に日が昇り始め明るくなりはじめている。普段であればエンリも起きて井戸に水を汲みに言っている頃だろう。しかし室内はまだ暗く姉妹は仲良く眠ったままだ。

「2人ともかわいいなー本当はこのまま寝かせてあげたいけど何も言わずに帰ったら不安になるかもしれないからな…さあそろそろ起きなさい。大治癒^{ヒーラー}」

睡眠の異常状態や肉体的疲労も回復したのだろう。エンリが先に目を覚ました。

「あれ？レオンさん？…おはようございます」

「おはようエンリ、ゆっくり寝れたかな？」

よほど眠りが深かったのか頭がまだ覚醒しきっていない状態なのだろう。

しかしレオンの顔を見て自分が昨晚どれだけ泣いたのか思い出した。

「れ、レオンさんおはようございます！昨晚はどうもすみませんでした！」

「謝る必要はないよ、でもあれで今日からまたお姉ちゃんにいられるな」

「は、はい」

エンリは改めて昨晚のことを考えると恥かしかったのか頬を赤らめ恥ずかしそうだ。

「やっぱりエンリはかわいいなーお持ち帰りしたくなっちゃうよ」

「お、お持ち帰り!?!」

「エンリがよかつたらだけどね？」

「お持ち帰り…私がレオンさんにお持ち帰り…」

レオンの発言に驚き自分の感情が嬉しいのか恥かしいのか分からないが俯いてしまった。

「ふわあー…あ、レオンさんおはようございます！」

「おはようネム朝から元気だね」

エンリの声に驚いたのかネムも目を覚ました。

「さて、2人とも目が覚めたか？俺は仕事があるからそろそろ王都に戻るから。机の上にバスケットを置いて有るから後で2人で食べなさい」

「えーレオンさんもう行っちゃうんですか？」

「お仕事有るからね、俺も2人ともつと一緒にいたいけど我慢するよ。さてエンリ、俺はもう行くよ？」

「ひゃっひゃい!?不束者ですが宜しくお願いします!？」

「ぶはあ!?!？」

「??？」

エンリの突然の発言にレオンは吹き出し笑いはじめた。ネムは自分の姉が爆弾発言をしたが理解できないのか首を傾げていた。

「え?あ!?!ち、ちがうんです!そうじゃなくて!そうじゃなくもなくて!?!あれ?私何言ってるんでしよう!?!」

「はー…はー…エンリは吃驚させてくれるな!ほんつとうにかわいな!」

レオンはエンリを抱きしめ頭を撫でる。その行動にエンリは固まってしまいが、横ではネムが羨ましそうに眺めていた。

「少し落ち着いたら皆で今後のことを考えよう、俺も王都での仕事をどうするか考えておくからエンリも考えといてくれるか?」

「こ、今後のこと!?!そ、それって!?!」

そういうとレオンは笑いながらエンリを離しネムの頭を撫でて入り口へと向かった。

「朝ごはんを食べて今後の事をゆつくり考えなさい、出来るだけ近いうちに来るからな」

レオンは驚きで口をパクパクさせているエンリとニコニコ笑顔で手を振るネムに見送られエモット家を後にした。

7話

リ・エステイザーゼ王国、人口900万人の200年以上の歴史が有る由緒正しき人間の国家。国王は民の事を考え民の為に税を安くし、より良く住みやすい国づくりを目指している。貴族は自分達の領地に住民の声を積極的に聞いて民の為に資材を投資してくれるすばらしい方々。

「なんてことは絶対にあり得ない、そんな国ならどれだけ救われる事が多いかしら」

実際は最早ただ古いだけの国。確かに国王は民の事を考えている、しかし実際のところは王派閥と貴族派閥の二分を抑える事で精一杯。重い税で国民は苦しい生活を強いられている。貴族達は自分達の領土でやりたい放題、気に入らない事が有れば勝手に税を重くし、民が思い通りにならないければ殺害し、気に入った娘が居れば税の代わりや借金のカタに問答無用に連れて行く、まさに自分の領地では自分は国王とでも言いたいのだろう。

「くだらない、実にくだらない。こんな国に最早未来は無い」

ではどうする？ 帝国に亡命でもする？ 確かにあの皇帝なら私の価値を理解して辺境の地に隔離してくれるはずだ。でもそれでは駄目、絶対に駄目。

「帝国だけは絶対に駄目、あの国に行けばあの方と離れ離れになってしまう。それだけは絶対に死守しなくてはいけない」

王国に未練は無いが恐らく私があの方と暮していくのに都合がよいのはこの国。

「でも腹立たしい事に誰もあの方の力と価値を本当の意味で理解していない」

ザナックお兄様は私のことを『化け物』と言っている様だけどあの方の前では私ですらただの人、本当の化け物というのはどれ程巧妙に知略を張り巡らしてもたった一つの行動で全てをひっくり返してしまうような力を持つている方のこと。

「ああ、私のレオン様。早く私の元に帰ってきてください。そして早

く私に」

私の願いはただ1つ、レオン・D・ファンション様と結ばれたいだけ、できれば私に首輪をつけて飼って下さいな。

時は戻って10年前

「申し訳ありません姫様、霧が濃く視界が悪いためこれ以上のスピードが出せないとの事です」

「ええ、分かっています」

リ・エステイーゼ王国の大通りを走る豪華な装飾が施され側面にはリ・エステイーゼ王国の国章が描かれている立派な馬車、本来であればその装飾も輝いて見えるのだがこの日は生憎の濃霧。

そんな濃霧の中を走る馬車の中に居るのは第三王女ラナー・ティール・シャルドロン・ライル・ヴァイセルフと初老の男性と護衛の騎士が1人。

なぜ第三王女であるラナーが城の外に居るのか、父であるランポッサ三世にラナーの拒食症について医者に見てもらおう為に城を出ていたのだ。

「しかし原因不明とは困りましたね、アレで王国随一の医者とは…」

「まあ、あの医者 of 調子が悪かったという事で…しかしラナー様、久々の城下はいかがですか？」

「そうですね、いつもと違う景色は新鮮です」

拒食症、その病名の通り食事を受け付けない。ラナーの体はやせ細り刻一刻と死へと向かっているのが見て分かる程だ。

ランポッサ三世はそんな娘の病状を如何にかする為に王国で随一と言われる医者 of 元に向かわせたのだ。医者を城に呼ばずに娘を向かわせた理由は城の中が息苦しいのだろうと思いき分転換になれば、と言った親心からだった。

(この症状が治ることはないわ、誰も私の言う事を理解しない。いえ、理解できない人間ばかり、こんな世界に私の居る場所は無いのでしょ

う。なら体の望むままに死を受け入れるだけ)

「どれだけ様々な政策を言っても周囲のラナーに対しての評価は『理解不能な事を述べる薄気味悪い少女』であった。ラナーは天才だった、しかし天才過ぎた。周囲にラナーの言っている事を理解できる者は誰一人として居なかった。」

それがラナーにとつて耐え難いストレスとなっていたのだ。

「何だ貴様？道を開けよ。この馬車には第三王女様であるラナー殿下が、な!? 貴様らいったが!?」

御者の慌てふためく声が聞こえたかと思つたのもつかの間、声どころか物音すら聞こえなくなつてしまつた。

「何事だ!？」

「い、いったい何が!? も、もしや賊が!？」

慌てふためく2人をよそに最も落ち着いているのはラナーだった。(賊、確かにそうかも知れないけれど少し違う、もう少しで始まる戦争によつて徴兵されて稼ぎが無くなる恐れの有る民の暴動といったところかしら)

「戦士殿! よ、宜しくお願いします!」

「は! 御任せください! 御2人は馬車の中からけして出て来ないようお願いします!」

戦士は手に持つていた剣を抜くと颯爽と馬車から出て行つたが、そこに広がるのは視界を遮る濃霧、馬車の中に居て外の様子を見ていなかった戦士は霧がどれ程濃いか把握できていなかったのだ。

「くそ! これでは敵が何処に居るか分からないではないか、だが条件は敵も同じ事。見えた瞬間に成敗してくれる!」

そう言うのと馬車を背に剣を構えた、背中を馬車に預ける事で集中する方向を正面左右の3方向に絞つたのだ。

「さあ賊よ! 掛かつてくるがいい!」

自分は王国に仕え鍛錬している戦士、そこ等辺の賊などに負けるはずが無い。戦士はそう考えた、確かに今回ラナーの護衛として呼ばれた男は王国に仕える戦士の中ではトップに入る力の持ち主だ。だが。

「どこからかかつてくる? ... な!? く!? がああああ!」

それはあくまでも正面からの戦いであれば、と言うだけだ。濃霧によって視界が遮られている状況ではその力は発揮できない。そして賊の中には視覚異常を無効にできる生まれながらの異能持ちが居た事によってパワーバランスは完全に覆されてしまった。

「足が!?俺の脚があ!!!」

戦士は馬車に背を向けることによって背後からの襲撃に備えたのだがそれは『背中』を守っただけに過ぎなかった。戦士は剣を構えたまま前に倒れてしまった。

「やった!やったぞ!これでそいつはもう動けない!今だ、やれ!」

生まれながらの異能持ちが馬車の下から忍び寄り戦士の足を切り付けたのだった。それを合図に武器を持っていた5人の男達が一斉に襲い掛かる。

「が!?貴様ら!ひきよう!な!」

「うるせえ!手前らばかり良い思いしやがって!」

「どうせ俺達は死ぬかもしれないんだ!だったら少しでも家族の為に金を残してやるんだ!」

「ぐ!ぐぞう、ひめ、さま、に、げ…」

男達が戦士に次々と剣やナイフを刺し続け、戦士が動かなくなる頃には辺り一面は赤に染まっていた。

「さあ!さっさと姫様さらって逃げるぞ!」

「分かってるよ!」

主犯格と思われる男が生まれながらの異能持ちの男に指示を出し馬車の扉を開ける。

「さあ大人しくしてれば怪我はしないぜ」

「ひ、姫様お逃げください!」

男が扉を開けると中から初老の男がナイフを構え男へ体当たり押し込んだのだ。

「な!?!ぐ!くそがああ!」

男は突然の出来事に判断が遅れナイフが腹部に刺さり初老の男性ごと馬車から落下した。

「くそが!死ね!死ね!」

男は手に持った剣で初老の男性の背中に何度も剣を突き刺している。

「おい！もう死んでる！そんなジジイほっとけ！」

「はあ、はあ、ちくしょう！いつてえ！」

「誰かナイフを抜いて止血してやれ、それで家に戻ったらポーション飲ませてやれ」

そう言うのと主犯格の男は馬車の中に入っていった。

「怖くて動けなかったのか？せっかくジジイが逃げるチャンス作ってくれたつてのに」

馬車の中には逃げる事も無く主犯格の男を見上げるランナーが座っていた。

「いえ、逃げてても無駄だと思いましたがここにいきました」

「そうかい、そら助かるよ、それじゃ俺達の家まで来てもらおうぜ」

男達はランナーを連れ濃霧の中へと消えていった。

「うう、姫様…誰か…姫様を…ぐ、あああ」

初老の男性は辛うじて意識が戻ったようだった、馬車から落ちた衝撃で気を失い剣を刺された場所も致命傷を避けていたようでもまだ意識があったのだ。だが流れ出る血の量からしてもう長くはもたない。

「だれか、誰でもいい…から」

あれだけの騒ぎにも周りの民家から人が出てくる気配は無い、残念な事に多くの民は重税に苦しみ貴族の身勝手な行いを憎んでいた。それによつてこの騒ぎを聞いても関わって面倒ごとに巻き込まれたくない、自業自得だ、ざまあみろ、等の感情が勝ってしまったのだ。

「おねが、だか、ら、だれでも」

「どうした爺さん？えらい出血じゃないか」

そこには先ほどまでとは違って一人の男が立っていた、その男が誰かは分からないが初老の男性は最後の望みを掛けて願った。

「！おねがい、です、姫様が、賊に連れて、行かれて」

「ええ…俺に利益無いんだけど」

「助けて、いた、できれば、こくおうさま、から報酬が」

「あー本物の姫様なのか」

「おねがいします、今は、これだけしか、もっていませんが」

ポケットから金貨を6枚取り出し男へ差し出した、男はそれを眺め尋ねた。

「爺さん先に自分を治してくれとか言わないのか？自分の方がやばそうだぞ？」

「自分が、もう駄目なのは、わかって、います、なので、どうか姫様、だけでも」

「そうか、いいぜ、その依頼受けてやるよ」

そう言って男は初老の男性が差し出した金貨を拾っていく。

「ああ、ありがとう、ございます、これで、あんしん、して」

最後まで言葉を紡ぐことなく力尽きた、しかしその顔はどこか満ち足りたようだった。

「本当に引き受けてもらえるかも分からないのに何本望って顔してやがんだよ、でも約束は果たしてやるよ」

男は立ち上がると周りを見渡す。その目には濃霧など関係ないかのように周囲を観察していく。

「さて、この馬車には女の子の匂いが有るはずだ、そしてその路地へと続いている血痕は賊のモノだろうな…さてカーディナル、仕事だ存分に働いてくれよ？」

男がそう呟くと霧の中に紅い光と深紫の4つの輝きが見えた。

王都の大通りから2つ程裏路地に入った場所に男達の隠れ家は在った。

「で、これからどうするんだ？堂々と城に身代金寄越せって行くのか？」

「んなわけあるか、そこ等辺のガキに要求の書いた紙でも持たせて城に行かせるんだよ」

「受け取りは？」

男達が今後の行動について話し合っている中捕らわれの姫となつたラナーは涼しい顔だ、自分がどうなるのか、開放されるのか、殺されるのか、最早どうでも良いことなのだろう。

(なんてくだらない、身代金を要求するならもっと効率の良い方法があつたでしょうに、まあ私にはどうでもいいことね)

「いてえ、くそ！やっぱりのジジイもつと殺しとけばよかつた！」

今回の作戦で負傷したのは1人だけだった、それも有るのだろう怒りが収まらないといった風だ。

「もう良いじゃねえか、ポーションも飲んだんだろ？少しは落ち着けて」

仲間の言葉など聞こえていないのだろう刺された男はポーションによつて塞がった腹部を擦りながら酒を飲んでる。

「…あ？てめえなに澄ました顔で居やがる、ちつたあ怖がれよ」

「おい、おちつけよ」

男の怒りの矛先がラナーへと向けられた、ほかの男達からすればただの八つ当たりだ。

「怖がつた方がいんですか？」

「あ？普通こんな状況だったら泣き喚くもんだらうが」

「ああ、なるほど普通とはそういつた事なんですか、すみません貴方を怖いと思わなかつたもので」

ラナーとしては素直に感想を言っただけなのだろう、しかし男にとつては何も面白くない、家族の為、金の為に怪我をするリスクが有ることは分かつていた。だが自分は怪我をして痛い思いをしてこのガキをさらつて来た。そしてそのガキは今の状況が怖くないと言ひ出した。男の怒りは限界だった。

「ああ!? だったら大人の怖さつてのを男の怖さつてのを教えてやるよ！」

「お、おい！おちつけ！」

主犯格の男が止めに入るが最早男の怒りは止まる事を知らないようだ。

「あ!?! いいじゃねえか! どうせ失敗したら殺されるんだ、だったらこ

んなガキでも楽しませてもらわねえと割に合わないだろうが！」

殺される、その言葉が他の男達が止めようとするのを止める。考えないようにしていた殺されるかもしれないという恐怖。

その恐怖は男達の正常な理性を崩壊させて行く。

「た、たしかに少しくらいなら…いいよな？」

「でも相手はこんな女の子だぜ？」

「なら黙って見てろよ」

「いや、見てるくらいなら…」

「それに良く考えれば『姫様』だろ？…こんなチャンスもう二度と…」

もはや男達の考えは1つにまとまってしまった。

「さあ、姫様よ怖かったら泣いても良いんだぜ？」

（ああ、所詮男なんてこの程度の生き物だという事ね、家族の為だなんて大義名分を掲げていても結局のところ、本能性欲にしか従えないという事かしら）

「ごめんなさい、やっぱり怖いと思えないわ」

「上等だこの糞ガキがあ!!」

（私はここで犯されて死ぬのかしら？つまらない人生だったし衰弱死で死ぬとばかり思っていたけど、こんな死に方もあるのね）

ラナーはこれから自身に行われる行為にすら興味が無いようであった。

「つたく、こんなちびっ子に欲情するとか相当な変態共だな」

「え？」

自分の身に男達の手が届くと思った瞬間それは起こった。自分は先ほどまで椅子に座らされていた。そのはずだ、なのに自分のいた場所から離れ入り口の前に移動しただけでなく何故自分は今先ほどまで居なかつた男にお姫様抱っこされているのか。

（なぜ瞬きもしていない状況で私の置かれた状況が変わっているの？なぜ!?理解できない!）

「あ、あの」

「ん？怪我は無いな？そらよかつた」

突然現れた男は困惑するラナーを置いて同じく理解できていない男達と対峙する。

「な、なんなんだお前?」

「本当は姫様助けたらさよならバイバイのつもりだったんだけど、口リコンの集まりってなつたら話は変わってくるかなー」

「なんなんだよお前は!」

「あ?ただの化け物だよ」

化け物、自身の事をそう呼んだ男が左手を男達にかぎす。

「社会的、いや常識的か? まあお前らやばそうだから死んどけ
ドラゴン・ライトニング
龍 雷」

男の手から男の腕よりも大きな龍のごとき雷撃が3本放たれた、それは男達を貫き家の壁をも破壊する。とどまる事を知らない雷撃は直線状にあつた建物を4棟ほど破壊した後空に消え去った。

「あ、やりすぎた」

男の眩きは誰に言った後悔の言葉なのだろうか。男の表情は若干の困惑した表情が見て取れる。

(やっべー想定外の威力なんですけどー!?なんで!? 『俺』の龍 雷
ドラゴン・ライトニング
なのになんであんなに威力でるの!?なんでーって背中の槍のせいかな!)

ユグドラシル時代に作り上げた『魔法三重化』^{トリプレットマジック} 『魔法位階上昇化』^{ブースデットマジック} 『魔法効果範囲拡大化』^{ワイドレンジマジック} 『魔法位階上昇化』^{グレート・マジックシールド} 『魔法効果範囲拡大化』^{グレート・フルポテンシャル} 『上位全能強化』^{グレート・ハートニング} 『上位魔法盾』^{グレート・マジックシールド} 『上位強化』を組み合わせんだサプライズ武器。その武器を背負った状態だった。

(なに今の魔法!? あんなの見た事も聞いた事もない! 私の知らない事が起きてる! 最初に私の場所が変わった事だけではなく、もつと知らない事が有る!?)

ラナーの目に光が差す、それは今まで感じた事のない高揚感。もしかしたら目の前に居る人物は自分の言っている事を理解してくれるかもしれない、自分の知らない知りえない事を教えてくれるかもしれない。何より。

(私の理解を覆してしまうほどの力を持っている! ああ、なんて、なん

てすばらしい事なんでしよう」

「え？なんかいった？」

「いえ、何でもありません♪」

「そう？んにしてもしまったなー少々やりすぎだよなコレは」

目の前に広がるのは5体の男の死体、打ち抜いてしまった壁の向こうにも子供だろうか丸まった黒焦げの小さな遺体が有る。そしてその先にもぽっかりと穴が開いていつ崩壊するのかわからなくなった建物と黒焦げの遺体らしきモノが。

「そこは安心してください、私を助ける為にと言えば罪には問われませんので♪」

「そういう問題なのかな？まあ、罪人扱いされるよりはましか」

「はい、問題ありません♪」

「ところで何で君はそんなに嬉しそうなの？」

「それはもちろん貴方様に会えたからです！私の王子様！」

「王子様!？」

「はい王子様です♪あ、お名前を聞いていませんでした、教えてくださいませい♪」

「レオン・D・ファンション…です」

「今後とも末永くお願いしますレオン様♪」

「ラナーの死を待つだけの人生に光を与えたのは人であって人ならざる者。」

「ラナーの新しい人生はここから始まったのかもしれない。」

「レオンの就職先も見付かった瞬間だったのかもしれない。」

8話

「今回のレオン・D・ファンシヨンの働きに国王陛下は大変満足され、白金貨20枚を褒美として授与する」

「はあ、有難うございます」

お金はどれだけ有っても困らない、お金は人が生きていく中でもっとも重要な物だ。そんな事はバカでもわかる。

この俺、レオン・D・ファンシヨンは自慢できるような事じゃないが金には煩い。金のために生きてきたと言っても過言じゃない。この世界に来てから2ヶ月間はカルネ村でエンリや子供らと戯れながら村周辺に出るモンスター狩ったり自分の能力の確認で金儲けはしてなかったけど、村を出た以上はモモンガ君、ギルドやユグドラシルについての情報収集しながら働くつもりだった。

そう、働くつもりだった、金の為に働くのは別に問題ない。問題ないのだが…

国王の横で昨日助けた姫様がかわいい笑顔で微笑んでいる。

ああ、やっぱり子供は笑ってるのが一番だな。

いや、違う、そうじゃない。

報酬を貰う事に問題ない、己の働きに見合った対価を貰うのは至極当然だから。

問題なのは。

「そしてラナー王女様の希望によりラナー王女様専属の護衛とし、客将としてリ・エステイーゼ王国に仕える名誉を与える」

なぜか俺が王国で働くことが決まった事だよ！

「宜しく願いますね、レオン様♪」

なんでこうなった!!!

「エンリ、そろそろ離しなさい。レオンさんが困っているだろ？」

「やだ！レオンさんはまだ行かないもん！」

カルネ村、人口は300人程度の小さな村。2ヶ月ほど前村の子供

であるエモット家のエンリが1人で森に入り行方が分からないという事件が起きた。

エンリが行方不明になって2日が経ち、誰も口には出さないが『モンスターに連れて行かれ殺されてしまった』そのような空気が流れていた。村の中にモンスターの類が襲ってくる事はめったに無い、しかしそれはあくまで『村の中』の話だ。

森の中に入ればゴブリンや絞首刑蜘蛛^{ハンギング・スパイダー}、森林長虫^{フォレスト・ワーム}が襲ってくる恐れも有る。そんなモンスターに襲われてしまつては武装した大人でも生き延びる事は難しい。

何も武装していない子供などなすすべも無く殺されてしまうのが関の山だ。

「エンリ、何処に行つてしまったの…早く帰つてきて」

母親は前日から泣き崩れ寝込んでしまつている。父親も朝から森の中を探し回り続けている。

「エンリ！どこだー！エンリー！！」

「これだけ探して見付からないって事はもう」

「よせよ、まだ2日しかたつてないだろ」

「でもよ…」

連日朝から探しに出ているが手掛かりが何も見付かつていない捜索隊の中には不穏な空気が流れ始めていた。

「エモットさん残念だけど…」

「さて、今何か聞こえなかったか？」

「え？…何も聞こえないぞ？」

「――」

「エンリ！エンリなのか!？」

「パパー！」

エンリと思われる声は森に響き渡つた、しかし声は聞こえて来るが姿は一向に見えてこない。

「エンリ！何処に居るんだ!？姿を見せてくれ！」

「パパ！上だよ！」

搜索に出ていた息を呑んだ、声に導かれ視線を上げるとそこにはいたのは真つ白な鱗に覆われた飛竜ワイバインが自分達を見下ろしていたのだ。

「エ、エンリなのか!？」

「そうだよ?」

「ああ、エンリ、そんな姿になって…」

「?」

「で、でも安心しなさい、パパはエンリがどんな姿になっても味方だからな!」

「パパ何を言ってるの?」

「ああ…エンリ、なんてことだ」

飛竜ワイバインが見下ろしてくる状況に他の村人達は驚きを隠せない。

村人達の上空でホバリングしていた飛竜ワイバインが目の前に下りてきたのだ、村人達は手にもつていた農具武器を身を守るために構えるが。

「まってくれ!皆落ち着いてくれ!」

「だがエモットさん!相手は化け物だぞ!」

「ちがう!アレはエンリなんだ!」

「はあ!」

父親は両手を広げ他の村人から飛竜ワイバインを守るかのように立ちふさがった。

「私には分かるんだ!アレがエンリの生まれ変わった姿なんだって!」

「はあ!?!」「ブフォ!?!」

「パパ?何を言っているの?」

「エンリ、大丈夫だ。パパはエンリがどんな姿になっても、絶対に見捨てないからな!」

「あ、あんた何を言ってる」

「パパ?」

本人は愛する娘は不慮の事故か何かで命を失ったが何らかの形で純白の飛竜ワイバインに転生したと思っているのだろう。

しかし。

「エンリ!大丈夫だからな!心配はいら…エンリ?」

父親が振り返るとそこには転生したと思っていた飛竜ワイバーンの前に愛し
のわが子が立っていた。飛竜の横には旅人風の男が笑いを我慢して
いるだろう肩を震わせ横を向いていた。

「パパさつきから何言ってるの？エンリはエンリだよ？」

父親は自分の行動が勘違いであった事に気がついた、飛竜ワイバーンが見え
たときエンリの姿が見え無かったため娘が転生したと思ってしまう
ていただけで、実際は角度の問題で姿が見えなかっただけなのだ。

「あーすみませんね、止めようと思ったんだけど。あまりにも我が子
を守る父親の姿に感動してしまって。プフツ」

「いや、お兄さんのせいじゃないでしょくく、子供のためならくく、そ
の身を捨ててでも守るのが親のくく、務めってやつだよ」

「パパどうしたの？お顔が真っ赤だよ？」

誰かが我慢できずに笑い始めるとそれは連鎖となって広まって
いった、みな笑う中皆が笑っている理由が分からないエンリと、見
た事ないほど顔が真っ赤に染まった父親が頭を抱えていた。

その後レオンは村へ招待され2ヶ月ほど滞在しドルイドの能力を
使って畑を耕し、料理人の能力を使ってお菓子を振舞ったり。この世
界の事を知るにはカルネ村は効率的ではなかったがリアルでの生活
では味わう事のできなかつたゆつくりとした生活に満足していた。
「エンリ泣くなって、また遊びに来るから」

レオンとしても村での生活に不満があったわけではないが、このま
ま元の世界に関する情報を手に入れるにはこの村では限界だった。

「本当？また帰ってきてくれますか？」

（んー可愛いなー子供はやっぱ可愛いよねー）

「ああ、約束約束。だからいい子にしているんだぞ？」

「うん！だから早く帰ってきてくださいね！」

（かーわーいーいー！キyun死しそう！）

「それじゃ、色々とお世話になりました。また遊びに来させていた
きます」

「本当に娘がお世話になりました。妻は家から出れませんがとても感

謝していました」

エンリの母親は第二子を身籠っており出産が近いとのことで見送りににはこれなかったようだ。

「いえいえ、私もこの二ヶ月間とても楽しかったです。それでは之にて失礼します」

そう言つてレオンはカーディナルに跨りカルネ村を背に出立した。

「さあ、王国の首都に行けば情報も充実してるだろ、図書館とかも有るだろうし。プレイヤーの1人や2人見付かるかもしれないな！」

レオンはまだ見ぬ未知に胸を膨らませ王国を目指した。

(そう未知を求めて王国へやってきたんだ。なのになんで客将とかよく分からない職業体験してるわけ!? 未知の職業を求めて王都に来たわけじゃないよ!?)

「どうしかしましたか? レオン様」

頭を抱えるレオンとは対照的に笑顔を絶やさない第三王女ラナー、レオンとであつた日に拒食症を医者に診て貰つていたとは思えないほど顔には生気が満ち溢れていた。それもその筈だレオンに助けられて以来それまで何も受け付けなかった身体が嘘のように食事を取っているのだ。その様子に父親であるランポッサ三世は驚きラナーに理由を尋ねると「レオン様とお会いできたからです♪」とお花全快の返答に父親としては複雑な心境であつた。

「あーいや何でもないですよ、姫様?」

「もう! 姫様と呼ぶのはやめて下さいと何度も言っているじゃないですか」

「いや、君王女様、俺何処の馬の骨か分からない旅人。そんな奴がラナーだなんて呼び捨てはまずいでしょ?」

「良いんです、レオン様は私を救ってくださった英雄なんですから、何て呼んでも問題ありません♪」

最早この会話も何回目だろう。レオンは考えるのが辛くなってきた。
た。

ラナーは問題無いと言っているがレオンとしてはそう言う訳には

行かない、最初は本人の望んだ通りに『ラナーの護衛って何をしたら良いんだ?』と喋っていたが周りからの視線がとてつもなく痛かった。改めて自分の行っている行動を振り返って呼び方を変えようとしたがその度にこのやり取りだった。

「はあ、いや、ラナー様聞きたいんですけど周りがずいぶん慌しい感じなんですけど一体なんですか? 祭りでも始まるんですか?」

呼び方の流れはレオンにとって有利に話が進まないので会話を変えることにした。

「できれば様も無くても良いんですけど、まあラナーと呼んで下さるのをお待ちしていますね♪」

(俺が周りに認められたらねー)

「それで今城内が騒がしい理由はもう少しで始まる帝国との戦争に向けての準備をしているからです」

「戦争…」

(たしか毎年エ・ランテル? 周辺だかで行われてる小競り合いだけか?)

「ですが、今年は今までと少々状況が違うようなのです」

「違う? 本格的な大戦になるって事?」

「いえ、毎年この時期になると帝国から場所の指定が来るのですが」

「来ていないって事?」

「はい、さすがレオン様ですね! 今ので分かっってしまうなんて!」

「いやいや今ラナーが殆ど答え言ってたからね!」

「あ、やっとならなうって言ってくださいましたね♪」

いい歳した大人が子供に玩ばれている。

「あーバカにされてる気分だ」

「そんなレオン様も素敵ですよ?」

「もういいよう、で? 今年は戦争が起こらないって考えている連中が多いってことかな?」

のんきな貴族達は『我々に恐れをなして挑んでこないのでしょう!』『やっとならなうの愚かさを理解したんですな』『いやいや、我々『貴族』の恐ろしさを理解したんでしょう』と、その自信は何処から出て

くるのだらう。しかし一部の貴族達は本気で戦争は無いと思ひ民を徴兵せず準備をしていない。

「はい、もし今のまま帝国が攻めてくるような事があれば…」

「一気に押し負けるって事か、で？ラナー様は帝国が攻めてくると？」
「はい、恐らく今の帝国のトップは自分の皇帝としての立場が危ういと思つているのだと思います。なので、場所を指定せずに王国が戦争を楽観的に捉えている隙に一気に攻め込むつもりなんだと思います」
「なるほどねー体裁なんてお構い無しって事か…こまつたなーまだ王国来てやりたいこと全然できてないのに滅びるのかー」

自分の置かれた状況に危機感を持つていないのかラナーの話の聞いても意外と暢気な様子なレオン、しかしラナーはそんなレオンの態度に驚いていた。

「レオン様？私のお話を疑わないんですか？城から殆ど出ることの無い私の話を信じるんですか？」

「え？だってラナー様がそう言うんだつたらそうなんだろう？まだ短い付き合いだけど…君とんでもなく賢いだろう？」

レオンはこの数ヶ月でラナーの凄さを理解していた、この少女は全くと言っていいほど決められた部屋から出していない。しかし、そんな環境下でレオンの評判、城内の様子を知っていた。最初は魔法でも使つて見ているのかと思つていたがそうではなかった。この姫様はメイドや貴族との会話だけで全てを把握しているのだ。レオンも仕事柄話を聞いて理解すると言うのは得意な方だ、いや得意だと思つていた。だがラナーの前では自分の理解力など見戯にも等しいのだらう。

「まあそんな、賢いだなんて、照れてしまいます♪」

（ああ、やつぱりこの方は彼ら凡人とは違うのですね、私の言っている事を理解しようとしてくださる。私はレオン様と出会う運命だったのですね）

「んーなあラナー様、もし俺が戦争で成果を上げたら国から報酬もらえたり評判とか良くなるかな？」

「それはもちろんです、功績を出せばお父様から功労金が支払われる

と思いますし、周りの評価も上がるとは思いますが、評判を気にされますか?」

「評判とかあんまり気にしないけど、ラナー様の護衛としては優秀であるところをアピールしてもいいだろ?」

「まあ♪」

「お金も貰えて一石二鳥ってやつだな」

「では戦争に参加されるんですね?」

ラナーとしては願ったり叶ったりだった、何故ならレオンの城内での評判は良くない、それもそのはずだ。突然現れ都合よく第三王女を賊の手から救い出し、その功績によって客将と言った身分を手に入れ、第三王女の護衛と言う役職まで手に入れたのだ。城内で働く一般兵や城に出入りしている貴族からすれば面白い話ではない。

なのでレオンが戦争で功績を出し、全ての連中にその素晴らしさを見せると言う事はラナーとしても喜ばしい事であった。

だが1つ問題があった。

「しかしそうなると帝国の情報が欲しいよな」

そう、最近では貴族の連中が戦争は無いと勘違いしてしまっているせいで情報が少なくなっているのだ。

「はい…でも残念ながら王国はあまり帝国の状況を調べていないみたいです。兵がどれ程の規模なのか、いつ何処に攻めてくるのかも分からないと言った様ななんです」

(無能共め…そうやって何も考えずに生きてきた結果が今の王国の衰退の原因でしょう。ここは如何にか国王お父様に動いてもらって帝国の状況を探ってもらえないかしら、でもそうすると他の連中も状況を知ってしまう。できればレオン様だけが状況を理解して進言すると言った状況も欲しいけど…欲張りかしら?)

「んーそれじゃあ帝国まで直接見に行く事にするか」

「はい?…あの、レオン様?今なんて仰いましたか?」

「初歩的な事だよお姫様、状況が分から無いと言うなら直接見てきたら良いんだよ?」

「そ、それは分かりますけど王国から帝国までは早馬で休み無しでも

2日は掛かります、なにより帝都に着いたとしても軍事情報を見る事はとても厳しいと思います」

例え帝都に潜入出来たとしても旅人が軍事施設などには入れるわけも無い、しかしそれは『普通の旅人・人間』ではなすだ。

レオンは顔の前で両手を合わせ不適な笑みをもらす。

「ふっふっふーラナーお嬢様、私は普通とは違うのですよ普通とは」

「レオン様にとって問題は無いんですか？」

ラナーは理解などできなかつた、常識で考えればいつ戦争が始まるか分からない状況で帝国が旅人などを自国の領地に入れる訳が無い。そもそも潜入できたところで見つかる恐れも有る。

「まあラナー見ているといい、私の魔法とペットの凄さをね」

(やはりこの人に不可能などは無いのですね、私の知らない事が起こるのかしら。ああ、楽しみです)

「折角だからラナーも一緒に行くとするかい？空のデートと洒落込もうか」

「はい！レオン様！…空のですか？」

9話

城内の灯りも少なくなり話し声も無く、聞こえてくるのは見回りをしている兵士の鎧が擦れる音だけ。第三王女の室内も例外ではなくラナーもベッドに入り、かわいらしい寝息を立てている、が。

それはラナーに掛かればとても簡単な演技でしかない、当の本人はベッドの中でこれからのことを考えて落ち着かない様子だ。

(ああ、今からレオン様とデート、それも空中デートだなんて、楽しみです。でもどうやって城を抜け出すのかしら?)

現在レオンは『準備が有るから夜お迎えに来るよ』と言って夕暮れと共に出て行ってしまっている。

城内の見回りにはメイドも居て定期的にラナーの部屋の扉を開け室内を見て回っている。城を抜け出すには兵士の目を掻い潜るだけではなく、室内にラナーが居る状況を残さなくてはいけない。

(誰にもばれずにお城を抜け出す、ふふ、まるで禁断の愛、逢引、駆け落ち。ああレオン様まだですか)

ラナーの室内に響き渡るのはかわいらしい寝息、かわいらしい寝息のはず。

ラナーが1人ベッドに入り悶々としているとラナーの耳元に突然レオンの声がささやいた。

「お待たせしましたお姫様、お迎えに参りました」

ラナーは声の聞こえた方へ顔を向けるもそこには誰も居らず何時もと変わらない室内があるだけだった。

「レオン様? 何処にいらしゃるんですか?」

「姫様の目の前ですよ?」

ラナーは目の前を凝視するもレオンの姿は何処にもない、しかし誰も居なかった部屋に突然レオンが現れた。

「まあ、レオン様は姿を消す事も出来るのですね!」

目の前に突然現れたことに驚く事も無くレオンの行動を褒める、しかしレオンとしては驚くと思ったのだろう、ラナーの思いもよらない行動に目を丸くしている。

「あつれー？ラナー驚かないの？」

「なぜ驚くんですか？レオン様の声が聞こえましたから直ぐ傍に来られているのは分かりましたから♪」

「あ、はい」

レオンは思う、驚かそうとする事が無駄なのは、と。

「それでレオン様、どうやってお城から抜け出すんですか？仰られていたように空から抜け出すんですか？」

「王都ことから帝都まで行こうとすると強化系の魔法を使っても時間が勿体無いから行ける所まではシヨートカットをして行こうと思ってるよ」

「シヨートカット？」

レオンは首を傾げているラナーを横目にベッドに幻術を掛けてゆく、ベッドの中に眠っているラナーが作られ、そこに本人が眠っているかのような状態が作られた。

「まあ！私ともう一人！これはどんな魔法ですか？」

「ただの幻術だよ、普通の幻術よりレベルが高いから触れる事が出来るし、触れたときに体温を感じる事もできる。俺の幻術を見破れる実力を持つマジックキャスターは王国には居ないと思うからばれる心配は無いはずだ」

「触れる幻術…」

ラナーは恐る恐るレオンの作り出した幻自分へと手を伸ばす、そこには本当にベッドで人が眠っていると間違えてしまうほど精巧な幻ラナーに触れることが出来た。

「本当に私が眠っているみたいですが、この魔法が有ればいつでもお城を抜け出せますね！」

「お姫様がいつでも抜け出すのはいかなものかと…さて、流石にドレスで帝国に行く訳にもいかないから取り合えずこれに着替えてくれるかな？」

レオンが取り出したのは装飾品が着いていない質素なズボンと上着だが。

「お姫様が着るには少々みすばらしい衣装かもしれないけどドレスが

汚れたりする方が嫌だろ？それに万が一にもありえないけどその服なら兵士が持っている程度の武器なら切れたり貫通したりしないから安心だよ」

何の変哲もない衣装、しかしそれは言葉の通り表面上の話で実際は、ユグドラシルで『上級』の装備でミスリル製フルプレート程の防御力を有する。

「それに俺が絶対に守ってあげるから心配は無いよ」

「はい、レオン様を信じているので心配していません♪」

ラナーはレオンから衣装を受け取るとおもむろに着ているドレスを脱ぎ始めた。レオンは思いもよらない行動に驚きラナーに背を向ける。

「お姫様!?!着替えをするときは周りの目を気にしていただけると嬉しいのですが」

「誰の前でも着替えるわけではないですよ？レオン様にでしたら見られてもいいですから」

「そういうのはもう少し大人になってから言いましょうね!?!」

ラナーの着替えが終わり、レオンがラナーを抱き寄せる。

「レオン様!?!」

「時間が勿体無いからささっといきますよテレポーション 転 移」

転 移その言葉が聞こえた後の景色はラナーにとって信じられない光景であった。

その景色は先ほどまで自分が居た部屋の景色ではなく木々が生い茂る森の中のような光景であった。

「レ、レオン様!?!これは一体?!何が起こったのでしょうか!?!」

「ん? テレポーション 転 移でエ・ランテルに近い村の外れに移動してきたのさ、これで約半分は距離が短くなっただろ?」

レオンは転移の魔法で自分が移動できる範囲で帝国に近づき時間の短縮を図った、エ・ランテルまで来てしまえば帝国領は目と鼻の先だ。

「一瞬でエ・ランテルまで、魔法と言うのは本当に便利ですね…これが王都の外」

「ラナー様は城、王都から出たことは無いのかな？」

「はい、普段の生活の中でお城から出ることはありません。レオン様とお会いしたあの日は滅多に無い外出でした」

第三王女、第三と言っても王族である事には変わりない、王族が城の外に出る事など稀だ。まして誰にも言わずに出てくるなどありえない、この事がばれてしまえばレオンは誘拐犯扱いで死罪は免れないだろう。

「だからレオン様とあの日お会いする事ができたのは運命だったんです♪」

「あ、はい」

当の本人達はのんきなものだ。

「さてラナー様、今夜帝国まで俺達を連れて行ってくれる優秀なペットを紹介するよ」

「ペット、ですか？」

紹介すると言うと白いワイバーンが空から舞い降りてきた。レオン達が転移して来てから周辺を警戒し見回っていたのだろう。

「可愛いペットのアルカディアって言うんだ仲良くしてくれると嬉しいな」

アルカディアの頬を撫で襲ってこない事を見せる。

「ペット、ですか」

アルカディアもレオンがラナーに敵意を向けない限り襲うつもりなど無いのだろう。ラナーを一瞥するも鼻先をレオンに押し付けもつと撫でろと言わんばかりだ。

「むう」

（今絶対に『レオン様は私？のモノだ』って表現よね？当のレオン様は気づいていないみたいだし…ああ、私もあんな風に撫でられたい）

「レオン様！アルカディアばかりでなく私も撫でてください！」

「どうした突然？「撫でてください」はいはい」

（撫でられてるアルカディアが羨ましかったのかな？ラナーも可愛らしいところも有るんだな）

ラナーの望み通り頭を撫でも撫でられているラナーとアルカ

ディアの間には見えない火花が散っていた。

「さ、こんな所で時間を無駄に出来ないからな、アルカディア背中に俺達を乗せて帝国へ向かってくれ」

レオンはラナーを抱きかかえアルカディアの背に飛び乗る、アルカディアも主人の命令が先決だと理解し二人を乗せ空高く舞い上がる。

（ああ、これが空中デートなのですね、レオン様に抱かかえられ優雅に空中散歩。ああ、すばらしいです）

ラナーはまだ知らなかった、『空中デート』の意味を、レオンの感覚が自分のイメージしていた感覚とずれていた事に。

「——さて、魔法による強化も終わった事だし、ささっと帝都まで行くか！」

「はい！レオンさまあああああ！」

馬と言うのは持続性の有る走りでも長時間走ることを想定した場合時速50キロが平均らしい。地上での世界最速の動物であるチーターなどは瞬間的な速度は110キロである、その代り持続して速度を保つ事ができない為長距離を移動するのであれば馬の方が速いだろう。

猛禽類のハヤブサの急降下時の最高速度は390キロを記録したと言う話も有る。ではアルカディアの速度はどれ程なのだろう、魔法によって強化され時速200キロを出せるようになった、それも水平飛行時の速度で持続できると言うから驚きだ。しかしそれを経験せず対策せず理解していない場合はどうなるだろうか。

（レオン様！こ、これは早すぎます！）

初めて経験する空気の壁に驚くラナーをよそにアルカディアの表情はどこか嬉しそうにも感じられる。

「どうだラナー様、良い風だろ？」

ラナーの驚きと衝撃をよそにレオンは楽しそうだ。頑張れラナー様、距離にしておよそ500キロメートルだ、ノンストップでいけば時間にして2時間半……長いですね。

「アレが帝都か、遠くから見ると分には王国と差異はない感じかな」

エ・ランテル周辺から出立しておよそ3時間、レオンたちは帝都アーウィンタールの近くに有る森に到着していた。

「レオン様…ラナーはもう…」

何度か休憩をはさんだとは言えラナーの体力は最早限界のようで、抱き抱えるレオンに力なく身体を預けている。

それも仕方の無い事だろう、道中でラナーにも強化魔法を掛けていたが経験の無い者が常に時速200キロの風圧を受けていれば衰弱してしまう。

「ん？やっぱりお城育ちのお姫様にはきつかったか」

（いやいや、一般の兵士でも普通は体力が持たないと思いますから！）見当違いの感想にも突っ込みを入れる元気も無いようである。

その様子を見てアルカディアは鼻で笑っているようであった。『この程度の飛行に耐えれないのか』とも『この程度で根を上げるようでは主に笑われるぞ』ともとれる哀れんだ視線をラナーに送っていた。（く、アルカディアめ覚えておきなさい！）

「まあ、お姫様には仕方なかったのかもな大治癒^{ヒーリング}」

「疲れてしまいましたレオン様…あれ？身体が軽い？」

「そら大治癒^{ヒーリング}で疲労のバッドステータスも回復したからな、落ち着いたら帝都に侵入するぞ？」

ラナーが落ち着くとレオンはアルカディアに完全幻覚^{パーフェクト・イリュージョン}を掛け視覚的対策を施す。

「これでアルカディアは心配ないだろう、今の俺にも見る事は出来ないけど繋がりを感ずるから大体の場所は分かるから問題は無いだろう。いいかアルカディア、俺達が帰ってくるまで勝手に移動したら駄目だからな？誰かが来た場合気付いていない様なら放置して、気付いている様だったら上空に逃げろ」

ラナーには姿が見えない為レオンは何もない空間に話しかけているようで何とも間抜けな様子だ。

「さて、ラナー様俺達は今から帝都と皇城に潜入するわけだ、それに

伴って今アルカディアに掛けた魔法より高位の不可知化の魔法を俺とラナー様に掛けていく。この魔法はアルカディアに掛けた魔法と違って音や気配まで消す事が可能な潜入に最適なほうなんだが：『今の俺』では逸れてしまうとラナーを瞬時に見つけることが難しい。だが俺とラナーが振れてしまえばお互いの姿は見えるし周りには聞こえない会話が可能だ」

お互いが見えない状態での潜入には危険が伴ってくる、ましてラナーは非戦闘員、逸れてしまつて兵士に見付かりでもしたら大問題だ、敵国の王女が夜の帝都、皇城を歩いていれば問答無用で捕縛されてしまうだろう。

レオンからしても王都のマジックキャスターや兵士などの実力は理解できているがここは未開の地、万が一自分を上回る相手が居てもおかしくない。

(俺を知ってるプレイヤーが居ない事を祈るよ)

ユグドラシルではアインズ・ウール・ゴウンを目の敵にしているプレイヤーは少なからず存在するのも事実なのだ。

「取り合えず手を握ってるだけでも問題ないから絶対に離さないでね？」

「それは嫌です」

「え!?!何で!?!俺と手を繋ぐのそんなに嫌!?!」

「ずっと抱き締めて下さい♪」

「え、あ、はい」

レオンに抱きつき先ほどまでアルカディアが見えていた場所に笑顔を向けるラナー。そこには見えない視線と見えない火花が散っているかのようであった。

「パーフェクト・アンノウアップル
完全不可知化」

魔法を唱えるとラナーとレオンは周囲から存在が無くなつてしまったと錯覚してしまう。

「さて、お姫様? 何処から見て回りますか?」

『何処から』と言つてもレオンは帝都に來た事はないので何処に行きたいと言われても連れて行くことなど出来ないのだが。

「では皇城に行きましょう」

「練兵所や軍事施設では無くて？」

軍事施設に侵入し現在の兵の徴兵状態や戦力を確認するのではなく、皇城に行けといったラナーにレオンは疑問を覚える。

「んー理由はいきながら教えてくれると嬉しいな飛行^{フライ}」

飛行^{フライ}の魔法を使い上空に上がり皇城を目指して行く。上空から見える帝都は王都とさして変わらないように見える。ぽつぽつと見える明かりが石で出来た道路を照らしている。

「王都も帝都もそこまで差は無いんだな、今が夜だからか？」

「現状は王国より帝国の方が繁栄していると思います。今は夜ですので人が町に出ていないだけです。城下の賑わいは王国以上だそうです」

「ふーん、繁栄しているなら国としては安泰なんじゃないのか？なんで場所の指定や勧告もなく戦争始めようとしてるんだか」

「繁栄しすぎているのも問題なのかもしれません、現皇帝がいかに優れていてもそれを超える者が出てきていて。配下の支持がそちらに流れてしまっているのかもしれないね」

「優れた者はそれを超える才能に追いやられるつてか。はー、トップてのは疲れそうな人生送ってるんだな」

皇城に潜入しラナーが求めたのは秘書官の部屋への潜入であった。

「秘書官の部屋ねえ、確かに秘書の部屋なら必要な書類が有るわな」

「やはり土地勘が無い場所なので無理をして様々な場所を探索するより効率がいいと思いました。それに帝国には逸脱者と呼ばれる大魔法詠唱者のフールーダ・パラダインと言う人物が居ますから」

『フールーダ・パラダイン』帝国における最大戦力にして最強と呼ばれるマジックキャスター、その力は第6位階の魔法を使用でき逸脱者と呼ばれ、その戦力は1人で帝国全軍に匹敵すると言われている。

「逸脱者…そいつって強いのか？」

「えっと、私は魔法に関しての知識はあまり持ち合わせていませんの

で明言は出来ないのですが。なんでも第6位階の魔法を使用できると聞いた事があります」

(第6位階?その程度の魔法で逸脱者?マジかよ…出会っても問題ないな、ラナーを抱えたままでも余裕で撃退可能か。いや、もし俺の知らないこの世界独自の魔法が有った場合は危険か?王国はマジックキャスターの扱い悪いし、軽視してる傾向が有るから魔法に関しての情報って多くないんだよな)

「レオン様?」

ラナーは考え込んだレオンに不安を覚えてしまう。もしかしたら自分の常識を覆し続けるレオンをもつてしても第6位階の魔法を駆使用するマジックキャスターとは危惧する相手なのだろうか。

「ん?ああごめんよ、帝国最強の強さに驚いていたんだ」

(ああ、やはり逸脱者と呼ばれるのは伊達ではないのかしら。レオン様の方がお強いとばかり思っていたけど、もしこの場でレオン様とお別れすることだけは避けたいから…)

「やはりもう王国に帰りますか?情報は何一つ手に入りませんでした
が帝国観光だと思えば」

「予想以上のしよぼさに」

「え?」

「ん?」

「何だラナー様怖くなったのか?心配しなくてもやばくなったら即時撤退は視野に入れて行動してるから問題は無いぞ?」

「そういうことではなくて…相手は逸脱者と呼ばれる方ですよ?」

ラナーは自分の耳が信じれなかった、目の前の男はなんと言った?
帝国最強の話聞いて『しよぼい』といったのだ。

「第6位階の魔法で逸脱者とか言われてたらユグドラシルあっの連中なんて神様か化け物しかいない事になってしまっようよ」

自分の常識が通じない、まさにラナーが感じたのはそれだけだった。

(ああ、やはりレオン様は私の常識を覆してくださいのね。ああ、もつとこの方の事を知りたい、もつとこの方の力を知りたい)

「どうする？不安なら撤退するか？」

「大丈夫です、レオン様と一緒に居るだけで不安なんて何一つありません♪」

「嬉しい事言ってくれるねーそれじゃあちやちやつと秘書官の部屋に行きますか」

ラナーの言葉に気分を好くしたのか笑顔で城内を散策し始める。

しかし始めてきた場所、秘書官の部屋が何処になるのかなど知るはずも無い。

「レオン様は秘書官の部屋に心当たりが有るのですか？」

「有るわけ無いよ？始めてきた場所だし」

「で、ではどうやって探すのですか？手当たり次第に部屋を開ける訳ではないですよ？」

城内の部屋を一つ一つ見て回っていたらそれこそ日が上ってしまった。

「そこら辺見回してる兵士にでも聞こうと思うよ」

「はい？」

レオンは巡回している兵士達に近付いてゆく。ラナーは不安を感じてしまうが、2人組みの兵士には2人の姿が見えていないのだ、目の前に敵国の王女が侵入しているとは思えないだろう。

「こいつ等でいいだろ魅了^{チャーム}」

レオンが魔法を唱えると2人は足を止める、その視線は空中をさま迷っていて焦点が合っていないようだった。

「声だけ聞こえるようにしてつと、よう兄弟元気にしてるか？」

レオンは数年来の友人でもに話しかけるように親しく声を掛ける。

「あんたか、どうしたんだ？」

「いやー秘書官に会いに来ただけど部屋が分からなくてね、悪いんだけど部屋の場所教えてくれない？」

「ああいいいぜ、なんなら俺達が連れて行ってやろうか？」

「いやー2人は仕事で中だろ？場所教えてくれたら勝手に行くから大丈夫だ」

「確かに仕事は放置できないか、いいぜ教えてやるよ」

レオンは友人から秘書官の部屋を聞き出していた。

「ここが秘書官の部屋かーまあ当然護衛の兵士は居るよな」

レオンとラナーは秘書官の部屋の前まにやってきたが扉の前には兵士が2人たっていた。本来は目の前で会話しているレオンを捕まえてはならないのだが、魔法によって姿も声も見えていないので暢気なものだ。

「では、先ほどの兵士達と同じ魔法を掛けて扉を開けさせるんですか？」

ラナーも最初の頃はすれ違う兵士達に見付かってしまうのでは、と考えていたが悠然と城内を歩き会話をするレオンを見てると不安など無くなっていた。

「いや、もし交代の兵士などが来た時に違和感を感じたら面倒だから魅了チャームは使わないで別の手段で入ろうか」

別の方法、もしこのまま扉を開け入ろうとしたら兵士達は心底吃驚する事だろう。なんせ自分達の目の前で誰も居ない扉がひとりで開閉をするのだから。しかしそんな事をすれば騒ぎの元になってしまう。

「別の方法、それは一体？」

「まあ見てな時間停止タイム・ストップ」

レオンは周囲のものが動きを止めた事を確認すると扉を開け室内に入っけてゆく。

「ここが秘書官の部屋か、机の上も綺麗に整理整頓されてるな。これなら簡単に資料が見付かりそうだな」

部屋は広く書類などが綺麗に纏められている、秘書官の性格が出ている部屋だった。しかしベッドなどが無い事から寝室は別に有るのだろう。

「綺麗過ぎる部屋だな…そろそろ時間も動き出すか」

レオンは書類が置かれている机の前に置かれている椅子に腰掛ケラナーを自身の膝の上に座らせる。

「え？この書類は一体？レオン様は？なんで私座って？」

「驚いた？もう部屋の中に入ったよ」

「れ、レオン様!？」

(いつの間に部屋の中にも!?これって前にも同じような事が)

「もしかしてレオン様と始めてお会いしたときも同じ魔法を使われましたか？」

「お、流石はラナー様だな、あの時も同じ事をしてラナーを抱きかかえてたんだよ」

レオンは話しながら周囲に静寂サイレンスの魔法を掛けてゆく。

「ラナー様これで書類を見ても音で誰かが気付く事はないよ、思う存分情報収集といきましょう」

「はい、一緒に見ましよう。あ、初めての共同作業ですね♪」

「え、あ、はい」

「しかし驚いたな、軍隊の準備は既に完了していて既に帝都を出て行軍を開始しているとは」

「はい、予想以上に事は進んでいたと言う事ですね。軍隊も10万の兵を導入とは、よくこれだけの情報が王国まで流れてこなかった事に驚きです」

(帝国の情報操作がそこまで優れていたのか、王国の情報収集が脆弱だったのか。恐らくは両方と言ったところかしら)

「さて、ラナー様そろそろ撤退しますか?いつまでも書類と見つめ合っけてもしかたないしな」

「そうですね、軍隊の規模は分かりました、まさかこれほどのものとは思いませんでした。」

(今までよりも戦争が早く始まる、今何処まで進軍しているか分からないけれど今から兵を集めていては帝国軍がエ・ランテルに進軍してきた時に間に合わない。どうすれば)

今更王国に帝国軍を相手に出来るほどの兵を徴兵するのは難しいだろう。そもそも帝国の軍隊はきちんと訓練されていて『軍隊』として成り立っている。一方で王国の兵は徴兵された農民が大半だ、訓練もしていない形だけの軍隊などお飾りもいいところだ。

レオン達はアルカディアを待たせている森まで戻ってきた。

「んでラナー様、今回の戦争どう見るんですかい？」

「はつきり言って状況は芳しくありません。何も準備していない王国に帝国が攻め入ったらひとたまりも無いでしょう、今回の戦争を凌いで領土の大半を失うだけで済むかもしれませんがそれでも今後王国を維持するのは難しくなっていくと思われれます」

一番の問題は兵力差では無い、今この情報を王国にもって帰ったとしてもいったい誰が信じるというのだろうか。国王が今の状況をどう考えているかは不明だが少なくとも貴族達は『戦争が起こらない』を本気で信じているものが多くなっている現状だ。そんな中で発言力が低い第三王女が『戦争はもう直ぐそこまで来ている、自分がこの目で直接見てきた』などと言ったところで絶対に誰も信じない。

「ふーん：なあラナー様1つ言いかな？」

「はい、なんででしょうか」

ラナーは恐れた、もしやレオンは王国を見捨ててどこか違う国に旅立ってしまうのではないかと。

「ラナー様はまだ王国で暮りたい？王女でいたい？」

「私は：正直「まだわかんないよなー」え？」

「いくら賢いって言ってもまだ人生なんて分からないよなーまだ10歳にもなっていないしなー」

ラナーはレオンが何を言いたいかが分かった。そう自分はまだ『子供』なのだ。ならばその『子供』を利用しよう。

「王国はきつと帝国に戦争で負けてしまうのかなーそうなったら俺は困るからどこか別の国に移動しようかなー」

「まあ、それは困りました！私はまだ王国で暮りたいんですレオン様も一緒に王国で暮りませんか？」

「えーでも戦争に負けてしまうかもしれないだろー？」

「でも王国にはレオン様が居て下さいますから大丈夫ですよーね？」

ラナーには目の前の男がどの様に戦争を終わらせるか見当もつかない、しかし今までと同じで『ソレ』はラナーには理解できないような力なのだろう。ラナーには今回の戦争で王国が滅びる未来は見え

ていなかった。

「ああ、もちろんだともラナー様の為に王国に勝利をもたらせますとも」

「まあ…なんて頼もしい事でしょう！ではレオン様が帝国軍を追い返して下さったら国王お父様に沢山の報酬を頂ける様にお願しいしないといけませんね！」

「それは楽しみだなーじゃあさっそく王国に戻って準備をしようか」
（レオン様がどう思われているかは分かりませんが私にとって今求めるのはレオン様だけ。でもレオン様が王国で私と暮して下さるなら）
ラナーとレオンは顔を見合わせ笑いあう、レオンの笑みは報酬を思ってたか、ラナーの笑みはレオンと共に居られる思いか。

もはや二人にとってリ・エステイーズ王国は都合のいい国でしかないのかもしれない。

「ところで…またアルカディアに乗って王国まで帰る事になるんですよ？」

「そんなに風が気持ちよかった？」

「…キモチヨカッタデス」

「…フツ」

「今アルカディア笑いましたよね！レオン様！あの子私をいじめるんですー！」

「いやーラナー様と会ってからアルカディアが感情豊かになった気がするよ。でも帰りは時間が勿体無いから魔法で帰ろうか」

「それは残念です♪」

10話

ラナーは帝国から帰ってくると王が起床するタイミングに部屋を訪ねていた。

「お父様、おはようございます」

王はラナーが医者の下を尋ねた日から食事を摂るようになり、日に日に健康になっていくのが嬉しくてたまらなかった。そんな娘が朝早くに自分の元を尋ねてくるなど今まで無かった事で不思議ではあったが嬉しかった。

「おお、ラナーおはよう。やはりラナーは元気に笑っているのが一番だな。しかし朝から私の部屋に来るなど珍しい、いったいどうしたのだ？」

あの日、ラナーを乗せた馬車が襲われていた、と言う報告があった時はあまりのショックに倒れてしまいそうだった。しかしその知らせを聞き城下の方を見えないと分かっているも探してしまうのは親としての本能だろう、城下は霧に覆われ何かが見えるような状態ではなかったが、その光は唐突に現れた。王城より離れた場所より3本の稲妻が大地から空へと上っていったのだ。

ラナーの搜索隊を編成させ、娘の無事を祈っていると本人がひよっこり帰ってきたから驚きであった。驚く王を他所にラナーは事のあらましを話し出した。

『お父様ただいま帰りました、お父様聞いてください！馬車に乗ってお医者様のもとから帰っていたら怖い男の人達に連れ去られてしまったんですけれどレオン様に助けていただいたんです！あ、レオン様こちらが私のお父様です♪』

見た事がないほど豪華な装飾の施された槍を背負った男に抱きかえられ嬉しそうに自身に起こった出来事を話していくラナーに驚いた、医者の下へ見送った時は力なく虚無を見ているような目をしてきた。しかしそれがどうだ、賊に連れ去られたと言っている当の本人は今までに見た事もない笑顔で話しかけてくるではないか。

ラナーを抱かかえている男も呆れているのか驚いているのかは分

からないが顔が引きつっていた。

そのような事があってからラナーは自身を助け出した男、レオンを慕い自身の護衛に任せさせてしまった。しかしそれからのラナーは笑わなかった日々をどこかに置いてきたのかと思ってしまうほど楽しそうに笑うようになった。

「今日はお父様にお願いが有って参りました」

「ふむ、一体どの様な事かな？無理なお願いで無ければいいが…」

時にラナーは周りが理解できない事を言っただけで周囲を困らせてしまうことが有る、元気になってきている娘の願いは出来るだけ叶えたいと思ってしまう。

「とても楽しい夢を見たんです。気がつくところは見ただ事もない町でした、一人ぼっちでも不安だったんですけど目の前に小さな妖精さんが現れて、お父様やお兄様達が御泊りになられていた宿まで案内してくださったんです。その宿では皆さんがとても楽しそうに笑顔でお食事をされダンスも踊られていました」

「それはすばらしい夢だね」

王は考えた、楽しそうに笑顔で食事をする。家族が揃って楽しそうに食事が出来たのはいつだろう。いや、そもそも家族が揃って笑顔で食事をした事など有っただろうか。

ラナーがそのような夢を見たのはラナーが寂しい思いをさせてしまっている自分に責任が有るのかもしれない。

「はい、だからその町に行って妖精さんとまたお会いしたいんです」

「妖精に会いたいとはまた難しい事を思いついたものだな、第一その町は夢の中に出てきた町だろうか？」

「いいえお父様、妖精さんにその町の名前を聞いてみたんです。そしてたら実際に在る町だったんです！それも王国領なんです！これは運命だと思いませんかお父様！」

なんと現実じみた夢なのだろう、しかし王国領であれば多少の外泊は許可して上げられるかもしれない。

「それは嬉しい事だな、王国領であれば護衛を付ける事を条件に許可してもいいぞ？」

妖精など存在しない、だがそんな事をこれほど楽しそうに話す子供に言える筈が無い。ましてラナーの容態は回復に向かっている最中だ。

「本当ですかお父様!? ラナーは嬉しいです! 有難うございます!」

外泊の許可が下りてよほど嬉しかったのだろう、ラナーはベッドに腰掛けている王に抱きついた。

「これこれ、王女だと言うのにおてんばが過ぎるぞ?」

注意してはいるが父親として嬉しいのだろう王は破顔した。

「それでその町の名前はなんと言うんだ?」

「妖精さんが教えてくださった町は、エ・ランテルという名前だそうです」

ラナーが王にお願いをしてから二日後、エ・ランテルの町はかつて無いほど慌しかった。それは仕方の無い事だろう、例年通りであればこの時期は周辺の村から男達が徴兵され王国と帝国の戦争に向けて準備が行われるはずなのだ。しかし、今年はいつもより徴兵される民の数が少ないようだ。噂では今年は戦争が起これないから貴族や国が徴兵しない、帝国が攻めてくるのを止めた、等と言われている。

では戦争と無縁の年になりそうな城塞都市がなぜ慌しくなっているのか。その理由はエ・ランテルに到着した200人の兵士と2台の豪華な装飾が施された馬車が理由であった。

「しかしまあ、よくエ・ランテルへの外泊許可が下りたものだな。普通じゃありえないだろ」

馬車の中には動きやすそうな衣装でとても護衛とは思えない服装のレオンとラナーが乗っていた。レオンはラフな格好だが着ている衣装や装備はユグドラシル時代の物で神器級ゴツズと伝説級レジェンドの装備で固められている。

「そうですか? お父様にすこーし我俣を言ったら許可して頂けましたよ?」

「すこーしねえ…毎年戦争が起きている都市に大事な愛娘を行かせる

もんかね？まあ例年の戦争が行われる時期より少し早い、と言えば早問題ないのかもしれないけどさ」

もしかすると王自身も今年は戦争が起きない、などと考えているのかもしれない。

「はい、それでも納得はして頂けませんでしたが、『偶然』六大貴族のリットン伯爵が護衛にと兵を貸して下さったのでお父様も納得されました」

偶然ラナーがエ・ランテルに行きたいと言っているのを聞きつけたリットン伯爵が王に。

『私の兵を護衛に就けますので許可してあげてはいかがでしょうか？』

と申し出たので最低限の護衛を付ける事を条件に許可が下りただ。

「まあ『偶然』伯爵が兵を貸し出してくれたってのが凄いね」

「はいリットン伯爵には感謝しないといけませんね♪」

ラナーの笑顔とは対称的にレオンは苦笑していた。帝国から帰ってきた僅かな間でどうやって六大貴族の一人を都合よく動かしたのか。

リットン伯爵からすれば第三王女であるラナーに恩を売ったつもりなのだろう。自身の勢力の拡大のためならば如何いった話にも食いつくのかもしれない。

エ・ランテル最高級宿屋『黄金の輝き亭』に着くとラナーのもとに都市長を名乗る男がやってきた。

「これはこれは、ラナー王女様この様な所までよくお越しくさいます。私は国王陛下よりこのエ・ランテルの都市長に推薦していただきました。パナソレイ・グルーゼ・デイ・レツテンマイヤと申します。ぜひともお見知りおきください」

「都市長様、わざわざ有難うございます。第三王女のラナー・ティエール・シャルドロン・ライル・ヴァイセルフです、ラナーと及びください」

その笑顔を見れば全ての者が破顔するであろう、眩い光に包まれて

いるかのような笑顔で挨拶をするラナーの後ろに立つ男にパナソレイは違和感を覚える。

「それではラナー王女様、と呼ばせていただきます。ところで、そちらの男性はラナー王女様の護衛の方でしょうか？見たところ鎧などはお召しになれていないようですが」

（見たところ身に着けている衣服はとても仕立てがいい物だとは思いますが、護衛の者が鎧も着ないというのは如何なものか。もしやラナー王女様の）

パナソレイは笑顔で尋ねているがその笑顔の下では男が危険な人物なのか、如何いった者なのか観察していく。

「こちらは私の護衛を勤めてくださっているレオン・D・ファンシヨン様です」

（レオン・D：なるほど！ラナー王女様を賊から救ったと噂される旅人か）

「お初にお目にかかります都市長殿、この度ラナー王女様の護衛を勤めさせていただいております、レオン・D・ファンシヨンと申します。どうぞ宜しく願います」

レオンはラナーの笑顔とは違いさわやかな笑顔でパナソレイに手を差し出す。

「まさかラナー王女様を救ったと言われる戦士殿にお会いできるとは思っていませんでした。そのような方が護衛に就かれているのでしたらエ・ランテルにいる間は心配ございません。こちらこそ宜しく願います」

差し出された手を笑顔で握り返し握手をする。

「ところでラナー王女様は何ゆえエ・ランテルに？」

例年であれば戦争の準備をしている様な時期になぜ城塞都市エ・ランテルに来たのか。視察のために王国から派遣されたのではないかと危惧したがそれなら10歳の子供を派遣する事はないだろう。護衛の者が視察者でラナー王女はお飾りかと考えもしたがつい最近ラナー王女の護衛として召し使えた者にそのような役は与えないだろう。ではいったい何の用があつて来たというのか。

「実は夢を見たんです」

「夢？ですか」

パナソレイは目の前の王女が言葉の意味が分からなかった。

「お父様やお兄様達が皆笑顔になってご飯を食べる夢を」

「それはすばらしい夢だったのですね」

王族とも在ればこの様な年齢であれ様々なしがらみ等も有るのだろう。そんな家族の団欒が王女にはとても羨ましかったのかもしれない。

「その夢に出てきて私達を笑顔にしてくださいました妖精さんを探しに来ました」

「ようせい、ですか？」

「はい！」

パナソレイは目の前にいる王女の言葉がますます分からなくなってきた。

（妖精？さがす？この王女は何を言っているんだ？レオンという男の顔も引きつっているではないか。：王女の我俣に振り回されているだけなのか？まあこの年頃の子供であれば意味の分からない事を言ったりもするのも知れないな）

「そうですか、ではラナー王女様が妖精を見つけれる事を私も祈っております」

子供の我俣でエ・ランテルにやって来たのだろうと考える事にした。

（まあ護衛の兵も2000人程度だと報告が来ているから本当に観光と
言う事なのかもしれないな）

部屋には先ほどまで沢山の人間が出入りしていたが今はラナーとレオンだけになっていた。

パナソレイが帰った後も宿屋のオーナーや商人を名乗る人間が入れ替わりで挨拶をしにきた。到着したのが昼過ぎだったのだが、挨拶の波が引けた頃は夕暮れ時になってしまっていた。

「っ、疲れた：なにアレ、王族って観光しに行くだけで半日つぶれるものなの？」

「お疲れ様でした、王族が自分達の住む都市に来たとなれば体裁や今後のコネ作りを求めて挨拶に行くのは仕方のないことなのかもしれないですね。レオン様はああいった事にはなれていませんでしたか？」
「ラナー様に会うまでしていた仕事柄人間を相手にするのは慣れていただけど……ここまで長時間もかしまった態度でいたことは無かつたな。つかれたよー」

レオンは椅子にもたれかかり手足を力なく投げ出していた。

「そうなんですか？笑顔で対応されていたのでレオン様はてつきり貴族の出なのかとばかり思っていました」

レオンが終始ラナーの横で笑顔だった理由は至極簡単だ。『意地』この言葉に尽きる、ラナーの護衛として出て来ているのだから自分の態度1つでラナーの評価が下がってしまったえば悔しいからだ。

「そんないいとこの出身じゃないですよ、ただ他の人より運を持っていただけさ。まあアレだよ俺って万能で天才だからな、ラナー様の為なら笑顔で対応しますよ」

実際のところ肉体的疲労に関しては一切問題ないのだ、リング・オブ・サステナンスなどの装備によつて疲れは無い……が。精神的な疲労は装備やアイテムでは補ってもらえないのだ。

「それにしても何人かは失礼な方がいましたね！レオン様を『何処の馬の骨か分からない人物』だとか『素性の知れない者だから一緒にいることはお勧めしない』とか、1番失礼だったのは『その様な者より私の部下の方が強いので滞在される間お貸ししましょうか？』だなんて！レオン様の強さを知らないから適当な事ばかり言つて。本当に失礼な方々です！」

どうにかラナーに取り入りたい者達からすれば突然現れ護衛を勤めているレオンが気に入らないのだ。しかしレオンを下に見た発言をするたびにラナーに怒られ自身の評価を下げるだけの行動になつてしまっていたのだが。

「いや、あいつ等の意見も少しは正しいと思うよ？『何処の馬の骨か分からない』とか完全に的を射ているじゃん。ラナー様は俺を信用しすぎなんだよ？普通は怪しんで護衛に雇わないからね？いや、国王も俺

雇っっちゃ駄目だろ」

普通であれば賊とグルなのか、帝国のスパイでは。などと怪しくて手元に置く事などありえないのだ。

「そんな事は有りません、レオン様は私を助けてくださったじゃないですか。私はそれだけで十分信頼できますよ」

「あーこの会話何回もしたな…：はいはい、その信頼を嬉しく思いますよ」

レオンは過去にしたやり取りを思い出し両手を上げ参ったと言わんばかりに首を横に振った。

「はい、お慕いしています♪」

「それは違う捉え方されちゃうから他の人がいるところでは言わないでね!」

翌日ラナーはレオンと2人で馬車に乗ってエ・ランテルを散策していた。

「あれがエ・ランテルで一番の薬師と言われているバレアレ薬品店らしいです♪」

「ふーん…」

レオンにとってこの世界のポジションに魅力を感じないのだ、自身が大量に所持している下級マイナー・ヒーリング・ポジション治療薬にすら劣るポジションなど興味など無い。

「もう！レオン様、私とお出かけするのはそんなにつまらないですか！」

先ほどからラナーが声を掛けてくるのに対しレオンは生返事しか返していない。どこかつまらないといった態度であった。

「ん？あーごめんごめん、ラナー様とお出掛けがつまらない訳じゃないよ？ただ」

「ただ？」

「昨日から移動するのが馬車ばかりでそれに飽きてきたんだよ」

お出かけといってもラナーが普通に歩いて回るわけではない、それこそエ・ランテルの人通りを第三王女が歩いているとなれば騒ぎの元

だ。レオンの気疲れがますます酷くなってしまう。

「ですから2人でこっさり歩いて見て回りましょうと言ってるじゃないですか」

「無茶言わないでくださいお姫様、それこそ大騒ぎになって観光どころじゃなくなってしまうから。俺がストレスで死んでしまいません」

レオンはもう一つ気になっている事を声を抑えながら口にした。

「それにしても遅くないか？帝国兵の移動速度がどれ程かは分からないけど、予定ではそろそろ戦争をするカツツエ平野？の周辺まで来ているんじゃないのか？时期的に戦争が近づいているなら兵が数人は待機してはるはずだろ？その兵から何の連絡が無いってのはおかしくないか？」

レオン達が帝都から持ち帰った情報では今日の朝の時点でエ・ランテル近くのカツツエ平野まで来ている計算なのだが。

「エ・ランテルの住人が平和すぎる、と言う事ですね？」

誰も慌てている様子が無い、噂の通り『戦争など起こらない』といった様子だ。

（レオン様はお気づきにならないようですが、私達がエ・ランテルに来た事によってあの噂は信憑性を高めてしまっているんですよ？『第三王女であるラナー様が観光で来られたと言う事は、今年は戦争が起こらない』今人々はそう話しているでしょうね）

「んーもしかして…すでにカツツエ平野を抜けているのか？兵はやられてしまった？もしくは買収された？」

レオン達を乗せた馬車が戦争など起こらないと信じ、笑顔に溢れた人々の間をゆっくり走っているとそれは突如鳴り響いた。

都市に鳴り響く大きな鐘の音色、それは笑顔に溢れていた人々の心を震わせるには十分すぎた。

次第に鐘の音に混じり人々の不安の声が言葉が混ざり始め、それを肯定する言葉が聞こえてしまった。

「帝国軍がそこまで攻めてきたぞおおお!!」

馬車の中にまで聞こえてきたその言葉にレオンは顔を歪めた。

「ようやくおでましか」

その顔に浮かんでいたのは不敵な笑み。

ラナーはせせら笑うレオンを恐れることはない。

(ああ、やっとレオン様の力を見る事が出来るんですね)

レオンからは見る事のできない角度でラナーはこれから起こる出来事に期待し破顔する。

都市は不安に満ち溢れ始めているが、馬車の中は異様な空気が満ち溢れ始めていた。

11話

エ・ランテルの外周部の城壁から見える位置に軍を展開するバハルス帝国、その数はおよそ4万、この数は毎年行われている戦争で帝国が揃えて来る兵士の数だ。王国と違い訓練されている兵士が4万。

それに対し王国：何の準備もしていなかったリ・エステーゼ王国がすぐさまエ・ランテルで展開できる兵の数はたったの1万にも満たないだろう。そして、その多くの兵は普段訓練をせずに生活をしている平民が多く占める。

「何ということだ、例年通りであれば帝国から宣言書が届いてから軍を準備するはずだった。しかし今年は何も帝国から情報や宣言書が来ない事に違和感は覚えていたが：まさかいよいよ帝国が本気で王国を攻め落として来るとは」

兵からの報告を聞いた都市長パナソレイはエ・ランテルの要人を集め緊急会議を行った。

「中将、今の現状でどれだけ日数を帝国軍と戦えると思う？」

中将と呼ばれた白髪交じりの男が苦い顔をする。

「正直なところ今の兵力差で帝国軍と戦うのは無理です。そもそも相手は訓練された兵士4万です、こちらの『戦える兵士』の数となると5千程度：軍を展開したところで半日すらもたないでしょう」

半日すらもたない、パナソレイ自身も予想はしていたが帝国との戦争を実際に経験している中将の口からはつきりと不可能だと言われ、てしまうと現実味を増していく。

「ですが城壁内に閉じこもり籠城する場合なら2日：いえ、3日は耐えられると思われませう」

確かに城塞都市と言われるエ・ランテルならば兵力差を考慮しても2日か3日は耐えられるかもしれない。

「3日では駄目だ、急いで王都に使いを出したが早くても明日の朝になるだろう。その後兵の準備をして行軍したところで到着は4日後だ。それでは遅すぎる」

なによりそれは戦争の準備をしていた場合に限られるだろう、戦争

が起こらないと思っていた貴族達は徴兵などしていない筈だ。そのような状態では準備に何日掛かるか分かったものではない。

「では如何するのですか？むぎむぎと野蛮な帝国にエ・ランテルを攻め落とされるのを見ていると言うのですか？」

「おい！その言い方は無いだろう！」

「では何かいい案があるのですか？戦って勝ち目が無いなら出来るだけ被害を出さないように考えるのも手ではないのですか？」

「それではまるでエ・ランテルを大人しく引き渡せと言っているようではないか！まさか貴様が帝国軍を秘密裏に引き込もうとしていたのではないのか!？」

「な!?!私は出来るだけ被害を抑えようとしているだけで！」

「ええい黙らんか！今ここで言い争っている時間など無いのだぞ！」

険悪な空気になりつつあった会議室にパナソレイの怒号が響く。

「お互いの言い分も分かる、だが今はここで争っている場合ではないのだ。いかに援軍が来るまでエ・ランテルを死守するか考えねばならん時だろうが！」

死守するとは言ったものの、今の状態でどうにかできる様な案は何一つ出てはいない。

会議室の空気が重くなり始めたが1人の兵士が駆け込んできた。

「失礼します！帝国より文書が届けられました！」

「いったい何を要求してくる事やら……」

パナソレイは文書を受け取り目を通していく。

「こんな要求が通るわけが無いだろう、帝国は我々をバカにしているのか？」

そこに書かれていた内容は『皇帝陛下は無益な争いを好まない、速やかに武装を解除し城門を開けよ』

「これでは抵抗せずに降伏しろと言っているようなものではないか。……それに耳が早いな」

文章は最後にこの様に書かれ締めくくられていた。

『リ・エステイーズ王国第三王女ラナー・ティエール・シャルドロン・ライル・ヴァイセルフを差し出す事を要求する。無駄な血が流れる事

はないだろう』

パナソレイは一旦会議を中断しラナーの元に足を運んだ。権限が弱いとは言えラナーは第三王女だ、エ・ランテルに一時的とは言え滞在しているならば状況説明は必要だろう。なにより帝国側の要求も話さなくてはならない。

（しかしラナー王女様を差し出すわけにはいかない、一体どうすれば…）

パナソレイは前日に黄金の輝き亭に向かった時よりも遥かに足が重く感じた。

「なるほど…都市長様の仰られていることはよく分かりました」

ラナーはソファーに腰掛け帝国の要求を静かに聴いた後パナソレイと向き合った。

「しかし…安心ください、エ・ランテルの民が一団となってラナー王女様をお守りいたします」

（たとえ素直に帝国の要求を受け入れてラナー王女様を差し出しても民に危害が及ばない確証はない。ならすぐさまエ・ランテルより王都にお帰りいただくのが一番か？しかし帝国が大人しく見ているとは限らない…）

「都市長様は援軍が来るまでの時間稼ぎが出来れば良いと仰っているんですね？」

「え？ええ、まあそう言う事ではありますが…」

「でしたら時間を稼いでいただきましょう」

「は？い、いえ。お待ちくださいラナー王女様、先ほども言いましたが現状のエ・ランテルに居る兵力ではとても援軍が来るまでの時間稼ぎになりません！」

なぜ目の前の少女は笑顔で座っていられるのだろう、戦争というものを理解出来ていないからなのだろうか？それとも時間稼ぎできる程の兵力は無いと言っているのが分からないのだろうか？

「都市長様…安心ください私達にはこの方がいますから」

そう言うトラナーは後ろで控えているレオンに笑いかける。

「レオン様お願いしてもよろしいですか？」

「それがラナー様のお望みであるのなら」

まるでお使いでも頼まれたかのようにレオンは微笑を浮かべ頭を下げたのだ。

「ま、待って下さい！ファンション殿はこの状況を打破する策をお持ちなのですか!？」

「ええ、何も問題ございません。ですが…」

パナソレイは目の前の2人が恐ろしくなった、何故この状況でこうも笑っていられるのだろうか。そしてこの男は一体どれほどの実力の持ち主なのか。これほどまでの戦力差を埋めるにはそれこそ逸脱者と呼ばれるマジックキャスター、フルーダー・パラダインでも連れて来ない限り戦況をひっくり返す事など不可能だろう。しかしその逸脱者がいるのは帝国なのだ。

（狂っているのか？それとも、もうエ・ランテルは終わってしまうのか？）

「都市長様をお願いしたい事がございます」

パナソレイは笑顔で話しかけるレオンに今まで感じた事が無いほどの恐怖を覚えた。

「それでは都市長様、先ほどのお願いを兵士達と市民に周知して頂きますね？」

「ほ、ほんとうに大丈夫なのですか？この様な事をしても」

「はい、こうでもしなければエ・ランテルの市民が危険な目にあうかもしれませんので」

「しかし、市民は家の中に避難、全ての兵士は城壁内で待機しているなど…もし帝国軍が攻め込んで来た時に即応できなくなるのでは…」

レオンの願いは3つ、『全ての市民は建物の中に避難している』『兵士達は全ての城門を閉めて城門の内部で待機する』『すべてが収まるまで戦場を見てはいけない』

たった一人を残してエ・ランテルの中で待機しろなど馬鹿げた話は無い、もしかしたらレオンは帝国と繋がっていて帝国を引き込む手筈なのではないだろうか。

「大丈夫ですよ都市長様、レオン様を信じましょう」

（やはりラナー王女様はこの男に何か魔法でも掛けられているのではないのか？）

「それでは申し訳ありませんがラナー様と少々2人でお話したいので、席を外して頂いても宜しいですか？」

（こうなつては背に腹はかえられん！この男が帝国のスパイかどうかは監視するしかあるまい、もし本当にたった一人で帝国軍を足止めできれば御の字だ！）

「分かりました、では私は各代表の者へ先ほどの言葉を通達して参ります」

パナソレイは覚悟を決め黄金の輝き亭を後にした。

「さて、俺は準備が出来たら行きますからラナー様も黄金の輝き亭から出ないで吉報を待っていてくださいね？」

「いやです♪」

ラナーの即答にレオンは体制を崩し倒れそうになってしまう。

「いやいやいや、貴女さつき俺が言つてたこと聞いてました？危険だから建物から出るなつていいましたよね？如何するつもりなんですか!？」

「それはもちろんレオン様の勇姿を身に行くに決まっていますよ？」

かわいらしく首を傾げ、何当たり前の事を言っているのだろうか？と訴えかけている。

「それは絶対駄目！本当に危険だから駄目！」

「何故です？レオン様の御姿が見えないと不安なんです、だから一番外の城門で見えますね？」

「危ないから駄目ですよー！」

「いやーでーすー私も行くんです！レオン様が止めてもこっさりついて行ってしまいますからー！」

「それ冗談抜きで止めてくれますか？いや、マジで…」

「じゃあ前もって言えば安全ですよね♪」

レオンは頭を抱える、このままでは埒が明かない。しかしこのまま置去りにするのはもっと宜しくない。かといって魔法で眠らせて行ったら後で何を言われるか分かったものではない。ならば…

レオンはラナーと目線を合わせると最後の確認をする。

「ラナー様、これから起こる事は戦争なんです、意味は分かりますね？貴女を助け出した時よりも汚い光景、見るに耐えないような現実を見る事になってしまう。それでも貴女は付いて来るのかな？」

「私はレオン様に『戦え』とお願いしたんです、ですからお願いした身として。そして、リ・エステイーズ王国第三王女としてもこの戦争の結末を見届ける義務があります」

ラナーはレオンの目を見据え、自身の覚悟を伝えた。レオン自身も戦争など参加した事も経験した事が有るわけも無く、戦争がどういったものなのか理解していない。

しかしラナーは第三王女としての義務といった。それはレオンが考えているよりも複雑な事なのかもしれない。

(そういう意味でなら、俺よりも覚悟を決めてるのか)

「はあ…分かりました、城壁の上から見ていても文句は言いません。でも後悔しないでくださいよ？気持ちの良いものではないと思いませんから」

「大丈夫です、たとえどのような結果が待っていても今エ・ランテルに居る私の務めですから」

そこまで言われてしまっってはレオンに止める気はないのだろう。両手を挙げ降参のポーズをした。

「それにレオン様のお傍に居られるだけで怖い物なんてありません♪」

「身に余る光栄です…やれやれ、それじゃあご希望に応えられるよう頑張りますか」

私は何故この様な事をしているのだろう、王国との戦争は毎年の事だ、1年前も2年前も今まで行ってきた事だ。しかし今年は今までと違う。

「――將軍」

「ん？どうした？何かあったか？」

副官の呼ぶ声によって思案していた頭を切り替える。

「どうしたもこうしたありませんよ、エ・ランテルに文書を出して半刻が経っています、今だに門が開く気配も第三王女を差し出す様子が見られません」

「そらーまあ、そうだろうよ。今までと違って書状が届いてないってだけで戦争が起こらないって考えていた連中だ、宣戦布告も無く突然帝国軍が現れたら驚いて考える事を放棄してらるだろうよ」

例年であれば戦争の地はカツツエ平野であった、しかし今年の場合はエ・ランテルになった。それは今まで行っていた王国の国力を下げ、戦争から、王国を占領する戦争に切り替えたという事。

なぜ皇帝陛下はこの様な手段に打って出たのか、なぜこれほどの強硬手段に出たのか。

「なにせよ、こんな方法でエ・ランテルを、王国を手に入れても周辺国家からの評価は最悪だろうな。暴君と言われなければいいけど」

今回の進行は皇帝陛下の独断で強行して行われているとも噂されている。その証拠に前軍に4万と本陣6万、合計10万の兵を導入しているにも係わらず帝国の切り札であるフルーダ様が参加されていないとの事だ。

「エ・ランテルには恨みは無いんだがこれも戦争だ。大人しく従ってくれることを祈るよ」

「ですがいつまでもここで休憩している分けにもいきません、返答が無かった場合は速やかに進軍で構わないでしょうか？」

「お前は何でそんなにやる気なんだか：もう少し待っても何の返答も行動も無ければ進軍するか考えるよ」

第一こういった制圧は市民の反感を買い無駄に遺恨を残す事になるからなあ、私はあまり気が進まないんだよな。

本陣も直ぐ後ろまで来ている筈だから前軍が無理しなくても合流してしまえば、圧に押されてエ・ランテル^がかつてに開城してくれると思っただけどなあ。

「それに…なんだか嫌な予感がするんだよねえ」

直感、とでも言えればいいのだろうか。部下に見せるわけもいかなから態度には出さないが、なぜだか無性にここに居ては駄目な気がする。

「えーっと探知無効、飛び道具無効、状態異常無効、捕縛無効、他には、物理無効と魔法無効はもしプレイヤーが帝国側に居たときのために発動するタイミングを選ばないと駄目だな。それとアルカディアとカーデイナルにもアイテムを持たせないと危険だよな、ネックレス系は装備できるよな？」

レオンは口に出しながら自身の装備を変更している、本人曰く『声に出しながら確認する事がミスをしない一番の対策』との事でユグドラシル時代から戦闘に入る前には必ずボイスチャットを切って行っていた。

レオンは装備を変更するとこれから起こる対策のために、ラナーの元を訪れた、最終確認をしておく為だ。

「失礼しますよラナー様」

「レオン様、準備は済まされたのですか？」

レオンが部屋に入るとラナーは敵国に攻め込まれようとしているにも拘らず、ソファーに座り優雅に紅茶を飲んでいた。その姿はまるでどかな休日の一コマを見ていると錯覚してしまいそうになる。

「ん、あ、ああ。俺達の準備は終わったよ」

「いかがなさいましたか？」

「いやー随分と落ち着いているものだなって」

「もちろんです、私達にはレオン様が就いていらっしやいますから」

ラナーの絶対の信頼を受け嬉しくもどこかこそばいレオンは苦笑する。

「ラナー様最後の確認なんですけど、本当に宜しいんですね？」

「はい、私は自分の行動に迷いはありません」

「りよーかいしました…ではこちらを身に着けていて貰えますか？」

ラナーの前に差し出されたのは三日月の形で見事な装飾が施され小さな紅い宝石がちりばめられたネックレスと、真ん中に琥珀色の宝石が鎮座しているバングルを差し出された。

「まあ…なんて綺麗なんでしょう、これほど綺麗な装飾品はじめてみました」

それはラナーの率直な感想だった。王族であるために様々な調度品を見て来たラナーですら、レオンの差し出した2つのアイテムはこれまで見た事がないほどの輝きを見せた。

「これはラナー様に身に付けておいてもらいます、この二つをつけていないと城門まで連れて行きません。ネックレスは異常状態を、バングルは恐怖を、両方1度だけ完全に無効化出来るアイテムです」

「異常状態？…よく分かりませんが此方をつけている事が条件であるのなら分かりました。レオン様付けてくださいますか？」

「りよーかいしましたお姫様」

「さて、これからラナー様には絶対に守って貰わなくてはならない約束があります、これを守ってもらわないと私は王国から出て行かなくてはなりません」

「約束をお守りするのは分かりますが、守らないと何故出て行かなくてはならないのですか？」

「簡単な事です、ラナーが死んでしまうからです」

ラナーの死、それは護衛についているレオンの失敗、そうなればラナーを守れなかった事を罪に問われてしまうだろう。他の子供よりラナーの事を気に掛けている王のことだ、重罪扱いになり死罪は免れないだろう。

そうなった場合レオンは転移の魔法などを駆使し王国から姿を消す事になる。

「それは…困りますね、ではどの様な事を守ったらいいのですか？」

「2つだけ、1つ『俺が魔法を発動させたら上空を絶対に見てはいけな

い』2つ『恐ろしくなっても闇雲に動き回らない事』この2つを絶対に守ってください、まあ怖くなったらしゃがんで目を閉じてもらうのが1番かと思えますよ」

「それはずつとレオン様を見ている問題ないということでしょうか？」

「ん？んーそうだな…じゃあラナー様の居る城壁より高く飛ばないようにするから、俺よりも上を見たら駄目って事で」

「ではレオン様から目を離さないようにしますね♪」

「それはそれで如何なのかな…いや、それが1番安全なのかな？んーまあいつか。それじゃ行きますか」

レオンは扉を開けラナーの後ろに控えて歩いていく、パナソレイには伝えていたので城門に勝手に行ってもいいのだろう。

黄金の輝き亭はエ・ランテルでは最も高級な宿だ、そんな場所で働くスタッフもまた一流の教育を施されている。しかし、そんなスタッフ達も高級宿で働いているとはいえ人間だ、スタッフ同士で噂話などに花を咲かせる事も有るだろう。

パナソレイがラナーの元を訪れ、鬼気迫るか表情で出て行ったのを目撃し、スタッフがラナーの部屋から聞こえてくる会話を聞いていた。黄金の輝き亭に居るものたちは、これから戦争が始まるのだと覚悟した。

しかし、そんな不安に陥る者達を落ち着かせる為だろうか、ラナーは笑顔で黄金の輝き亭を後にした。

（レオン様はお気づきになられてないのでしょいか、帝都に行った時やエ・ランテルまで来た時は私の身の安全を第一に考えてくださっていたのに。先ほど『ラナーが死ぬ』と仰ったのはまるでそれが当たり前だといった様子でした。あの一瞬はラナー^私を見ていなかった）

だが周りから見えているラナーの笑顔は不安を落ち着かせる為のものなのだろうか。

（ああ、一体どの様な事が起きるのでしよう。そうだ、私の事を心配してくださった方々に護衛をお願いしますようか）

エ・ランテルに訪れた絶望的な状況に恐怖する市民は笑顔で歩くラ

ナーを見て心を落ち着かせる。

(とても楽しみです♪)

エ・ランテルの市民は嫣然たるラナーの姿に目を奪われていた。

1番内側の城門に着くと其処には慌しく駆け回るリットン伯爵から貸し与えられている兵士達の姿があつた。パナソレイもレオン達を待つていたのだろうか、数人の武装した者を集めなにやら話し込んでいた。

「こんにちは都市長殿、おれ：私がお願ひした内容は周知していただけましたか？」

レオンはこれからの行動内容を煮詰めているのだろうかパナソレイ達に笑顔で声を掛けた。

「これはラナー様にファンション殿：ええ、一応は話を通したんですが…」

パナソレイが言いよどみ険しい顔をする。それもそうだろう、いくら第三王女直属の戦士の頼みとはいえ、敵を目の前にして何もせず城門を閉め1人だけ外に残し籠城しろと言うのだ。普通に考えれば正気の沙汰ではないと思うはずだ。なによりこの作戦を立案したレオンを帝国側のスパイだと疑い始めるだろう。

「ああ、作戦の内容にご理解いただけないと言う事ですか、それは困りましたね」

「何が困るってんだ？城門を閉めて敵の姿を見るな、だなんて言われたら城門を閉めたと同時に一気に攻めて来ると思うだろ。あんたが帝国と繋がってるかもしれないんだしな」

レオンとパナソレイの会話に割り込んできたのは昨日レオンを『どこの馬の骨か分からない』と嘲った貴族の男だ。

「あなたが仰つている事はごもつともですが：んー困りましたね、如何いえばいいのでしょうか」

「結局は帝国のスパイだったんだろ！」

それは確証の無い事だが今は関係ない、男にとっては今後の貴族生活が重要だ。そして、流れてきた噂で、貴族の出身でもなくただその

場に居合わせたというだけでレオンが第三王女に気に入られているという事が気に入らない。

男がレオンに難癖をつけるには十分すぎる理由だった。

(このまま帝国にエ・ランテルが飲み込まれてしまったら私が貴族で居られるか分からない！なんとしても王国の援軍が来るまで持ちこたえて貰わなければいかんだ、1人で帝国軍を抑えるだ？バカも休み休みに言え！そんな事不可能に決まっている！なにより偶然王女を助けただけで王女直属に抜擢されるなど…腹立たしい！)

「まあそう思われるのも仕方ないですよね」

逆の立場であればレオンも疑っている筈だ。この様な状況だ男の言い分が尤もに聞こえてしまう。

(そうなるよなー俺だって訳の分からない提案してると思うよ？でもそれが1番王国側の被害を少なくする方法なんだけどな…でもなんて説明したらいいんだろ、こつちの世界は第六位階の魔法で逸脱者扱いなんだろ？そんな世界で『超位魔法使うから隠れていてね』なんて言っても理解できないだろ、ん？いや…どうにかなるか？)

レオンは考える素振をしラナーの方へ一度顔を向ける。ラナーは事の成り行きを見守っているようで笑顔でレオンを見つめていた。

(好きにしていって事ですかね？ならこつちの世界でご都合主義に使えるカードを切るしかないかな…)

レオンは男に向き合いパナソレイたちにも聞こえるように話し出した。

「はあ…本来戦いの前に手の内を晒すのは好みではないのですが、皆様がたの不安や不満が有るのも理解しました。どうやって帝国軍を抑えるかなどの内容までは御教えできませんが。生まれながらの異能の力を使います」

生まれながらの異能、その言葉を聞いて集っていた者達から納得できたかのような空気が漂った。

(よし、やっぱりこの世界では魔法と同様に生まれながらの異能ってのはなんでもありのモノなんだな。一言で納得されるんだな)

「そ、そんなの納得できるか！そんな生まれながらの異能有るわけが

！」

貴族の男は認めたくないのだろう、落ち着きを見せた空気を自分の方に向けてためにレオンに食って掛る。しかし。

「貴族様、ぐぐ存じないのですか？200年程前に生まれながらの異能トによって国が1つ滅んだというお話を」

ラナーが助け舟を出した。

「レオン様のお力もそれに匹敵するものとお伺いしています。どうか信じてもらえないでしょうか？」

「それは、しかし…」

「ではこうしましょう、私は1番外側の城壁でレオン様の勇姿を見ていようと思っっていますので、レオン様の行動に不安が有る方々に私の護衛をして頂きながら監視をすると言う事でどうでしょうか？」

「そ、それはなりませんラナー様！もしラナー様の身に何かあった場合、国王陛下になんと報告したらいいのですか！」

ラナーの提案に異議を唱えたのはパナソレイであった、それもそうだろうパナソレイにはエ・ランテルでラナーの安全を保障する義務がある。

レオンを監視すると言った提案は願っても無い事だが第三王女であるラナーにもしもの事があればパナソレイの首だけではすまない。

「それはぐぐ安心を、レオン様に対策をお伺いしていますので安全対策はバッチリです、護衛をお願いできますよね？貴族様？」

「それは…」

あれほどレオンを罵っておきながらいざ戦場が見える位置には自身は来ないのか？ラナーの言葉にはそのような言葉が感じられ、周囲の視線も同様の事を物語っていた。

「く…ええー！いいですとも！私がこの命に代えてもラナー様をお守りしましょう！そしてこの男が不審な行動をとらないか監視しましょう！」

話し合いの結果数人の貴族がラナーの護衛を勤める事となった。巻き込まれた者たちも最初は嫌そうな態度だったが男の提案で『どの

ような結果であれラナー様をお守りしたという事が国王様の耳に入ればそれ相応の褒美がもらえる』護衛を快く受け入れたのだった。

ラナーとレオンは我欲に満ちた男達からはなれ周囲に聞こえないよう今後の方針を決める。

「ラナー様、お心遣い有難うございます」

「まあ、レオン様そんなに改まらないでください。私はレオン様をお慕いしているだけです♪」

「やれやれ、そのお気持ちだけ受け取っておきます。それでは彼らには説明をお願いしますね」

「はい、おまかせください。レオン様もお気をつけて」

「…ラナー様、貴女様にはとっておきの護衛を付けておきますので。帝都に行った時の様に不可視の魔法を掛けてありますが、城壁の上に待機させてありますのでご安心を」

「お心遣い有難うございます。レオン様もお怪我はしないでください」

「俺は大丈夫ですよ…約束ちゃんと守って大人しくしててくださいね？」

レオンはラナーの頭を撫でると最終の打ち合わせをするためにパナソレイの集る場所へ歩いていった。

「護衛についてくださる皆様、レオン様の生まれながらの異能から身を守る方法を御伝えします。それは能力を使われたレオン様を直視しては駄目らしいとの事です。そして出来るだけレオン様よりも上空を見ておく事だそうです」

ラナー達が城壁に上がっていくのを確認し、レオンは城門の外へ出て行った。レオンを見送った兵士達が抱いた感想は『打つ手は有るけど流石に怖いんだろうな。あまりの恐怖に顔が笑っていたよ』

「將軍！エ・ランテルから誰か出てきた模様です！」

「そうだな、1人か？こつちに歩いてくるようだが…文書でも持って

来るのか？」

「いかが致しましょう？・捕縛しますか？」

「まちなさいって、文書を持って来たんだったら手荒な真似はしないように：アレはワイバーンか!?まさか1人で戦うつもりか!？」

上空に舞い上がった人物、男だろうか？手には槍のような物が確認できる。

「全軍に通達！戦闘準備を開始しろ！目標はワイバーンに乗っている者だ！」

(本当に1人で戦うつもりか!?それとも牽制のつもりか!?)

男が槍を上空に向けたのと同時に見た事もない魔方陣のようなものが男の周りに浮かび上がった。

「な、何だアレは！魔法か!?あんなモノ見たことないぞ！全軍進軍を開始しろ！あの男が何をしようとしているのかは不明だが嫌な予感がする！全力で攻撃しろ！」

戦闘準備が整った部隊から順にエ・ランテルに、ワイバーンと男に向かつて進撃を開始した。しかしマジックキャスターを部隊編成に組み込んでいなかったため上空にいる敵に対して有効打を与えられないのは弓兵のみ。しかし今いる全軍で攻め込めば怯むかも知れない。そういった打算を持ちながら進軍を開始する。

(畜生が！結局戦争が始まっちゃったじゃねえか！どうしてくれんだ！)

先行していった部隊がワイバーンの下に着く頃男の周りに浮かび上がったいた魔方陣が消えた。

「さて、この距離なら帝国側の全軍は範囲内だな。そして：エ・ランテルも範囲に入っているだろ」

レオンはアルカディアに跨りエ・ランテルと帝国軍の中間に：ではなく帝国側よりの上空に構えた。

「戦争か、向こうの世界では経験できなかった事だな」

目の前に展開するのは4万の帝国軍。

「これだけの帝国兵を倒してエ・ランテルを守ったら英雄扱いされるかな？」

4万の兵をたった一人で押し退けた、そうならば後世に語り継がれる事だろう。

「しかし、初めてだからかな？緊張で顔が強張ってるなこりや」

レオンは槍をもつ手とは反対の手で顔を擦る。

しかしその顔が見える者は誰もいないだろう。

「戦争なんだ、敵も味方も被害は有るのは当然だよな。互いに血を流さない戦争なんて戦争じゃないよな」

レオンは槍を天に向かって掲げた。実際魔法を使用するのにこの様なポージングをとる必要は無いが気分の問題だろう。

「さあ、絶望を始めよう」

レオンは歯が見えるほどニンマリと不敵な笑みを浮かべていた。その顔に浮かんでいたのは緊張した表情ではなく、これから起こる惨劇を楽しもうとする笑顔であった。

「超位魔法——Festival of the madness 狂乱の祭り」

先行していた部隊がはつきりと確認できる距離で見えたのはワイバーンに跨る男の周囲を取り囲んでいた魔方陣が消えた瞬間、魔方陣が消えるとワイバーンよりも上空に扉のようなものが現れた。それは両開きの門であった、扉の大きさはエ・ランテルの城門よりも遥かに大きい。

帝国兵は違和感に気がついた、扉の形状が下、即ち大地の方へ向いているのだ。扉が下を向いているなどありえない、それでは扉から何かが落ちてしまうのではないだろうか。

しかし帝国兵の疑問は解決する事となる。

ゆっくりと扉が開くとその中は闇が広がっていた、中からソレは姿を見せた。

とてつもなく巨大な手が見えた。その手は白い斑模様で腕までも同じだった。2本の手が開いた扉を掴み中から現れたモノも斑模様

の巨大な見た事もないような化物であった。

巨大なモノが口を開けた。いや、そもそもどのような形か理解できない帝国兵達は大きく開いたソレを口だと思おうしかなかった。口と思われる場所も白い斑で覆われていた。

口を開けたソレから発せられたのは聞いたことも無いような謎の声であった。そもそも声だったのかすら定かではない。

白い斑の中に紅い光が輝いた、それらは様々な方向へ動き出した、まるで何かを探す目のように。

全軍に指示を出した直後に謎の門は現れた。なんだあれは？どの様な魔法を使ったのかは分からないが上空に門が現れるなど理解できないしありえないだろう、恐らくアレは幻術で此方の戦意を削ぐのが目的だろう。そんな幻より早くエ・ランテルを制圧しなければ。

「気にするな！ただの脅しです！速やかにエ・ランテルの城門まで行き門を開けるのです！」

今回の王国への進軍に当たって上官である將軍はどうも乗り気ではない様子だ。自分にはそれが理解できない、奇襲に近いものでは有るがこれほど簡単な戦争など他に無いだろう。

ならばエ・ランテルへの進軍は自分が成果を出せばいい、そしてこの戦争で私は將軍の座に着き今まで馬鹿にしてきた連中を見返すんだ！俺は有能な將軍として認められるんだ！

『ひっ!?!』

な、なんだ何だ今の音!?!足が動かない、いや震えて前に進めなくなったんだ。汗が止まらない、眩暈がしてきた。今の音は一体何処から!?!上か!?!さっきの幻か!?!何がおこ!?!った。上空にいたのは見た事も無い化物だった。そして無数の目に見られた!?!

「ああ、ああ、ああああああ!!!」

なんだあれ!?!なんなんだ!?!!!

「くるなあああ!!」

「やだああ!!腕がああ!!俺のうでがああ!!」

「どうした!?!落ち着け!現状をほ…う…く、来るな!やめろおお!!」
気付くと回りにいた仲間は何処にも居なくなっていた、自分の周囲に居るのはアンデットばかりだった。

「くるなあ!ああ!!」

剣を抜き周りのアンデットを切る。くるな!死ね!

「ぐっ!?!左腕が…なんだ、なんだこれええ!?!腕が!腕が溶けてるううう!?!」

左腕に痛みを感じアンデットに攻撃されたと思ったがそうではなかった。腕の肉が手首まで溶けていたのだ、骨は残っていた。

「やだああ!溶けたくない!アンデットになりたくない!死にたくない!」

必死になって手に持っている剣で左手を切り落とそうとするが中々切れない。

「やだ!死にたくない!こんな所でこんな死に方なんていやだあ!!」

怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い死にたくない死にたくない死にたくない

「ひ?!!しょ、しょうぐんです、か?ああ、貴方もアンデットに成ってしまっただけですな」

目の前に現れたのは将軍が着用していた鎧をつけたアンデットだった。

「ひ、ひや、ひやははは!将軍でもアンデットになるのか!?!あは、はは、ひやはははは!」

ああおれももうあんでつとになっているのかな

超位魔法——Festival of the madness 狂乱の祭り

恐怖・狂気・狂喜・狂乱・悦楽・歓喜・喜悦・享楽・恐悦

これらの感情を幻術によって助長し感情の思うがままに行動させる。命有るもの全ての感情のを解き放つ。

それは全ての幻を理解し作り出す事ができる者が得た力、触れる幻、痛みを感じる幻。己自身が幻となった者が得た力。

その効果は様々なバッドステータスを相手に与えるという能力。その能力は特殊でエネミーなどに与える効果は、永眠、石化、恐怖、などで動きを阻害したりダメージを与える事だ。PVPなどで相手プレイヤーに与える効果も様々で一時的に魔法を使用禁止にしたり、移動速度を制限したりといった阻害系魔法の強化版、即ちリアル阻害系魔法だ。

門から現れたモノは自身を見ていた全ての者の目を直視し終ると再び扉の中に帰っていった。門は消え普段と変わらない空へと戻っていった。

「この世界では恐怖や混乱などのバッドステータスでも死ぬのはカルネ村でゴブリン相手に立証済みだったけど…」

門は消えたが効果が消える事はない。エ・ランテルに進軍してきた4万の兵は、ある者は悲鳴を蹲り、またある者は奇声を上げ逃げ惑い、ある者は武器で周囲の者に切りかかる者や己の体を切りつけるもの。

「俺の超位魔法で人が死ぬか…！これほどの量の人が死ぬのか！」

眼下に広がる景色はまさに地獄絵図であった。

「ああ、そうだ！それでいい！狂気せよ！恐怖せよ！そして絶望せよ！それがお前達の感情だ！それが死というモノだ！」

地獄を見て笑う、己がどれ程の人を殺しているのか理解し。

「いいね！最高だ！これが！この程度で兵か！この程度が脅威か！弱い！弱すぎる！」

帝国兵の脆弱さに笑い、自身の放った魔法の脅威に笑う。

「ふーくくーはあはははは！！！！」

帝国兵の悲鳴が響く中ただ一人狂喜に身を任せ笑う姿はまさに人の姿をしているが、ソレはまるで化物のようであった。

聞いた事がない音だった、一瞬全身の毛が逆立つ感覚に襲われるが

直ぐに収まった。左腕を見てみるとレオン様から頂いたバングルが砕けてしまっていた。

言われた通りレオン様を凝視していると遠くの方で悲鳴が上がり始めた、恐らく帝国兵が見てはいけけない物を見てしまったのだろう。恐らくこれで今年の戦争は終わるはずだ、本陣が来たところでこの惨劇を見たら戦意を失うだろう。

横からも悲鳴が上がりました、すすり泣く声、奇声、ソレはまさに望んだモノだった。レオン様をバカにする者はこの世に必要ない、むしろ良かったではないか。馬鹿にしたレオン様の力をその身で感じて死ぬるのですから。

城門の内部や市内でも悲鳴が上がっているようですね、音を聞いたもの、のぞき窓から見ていたもの：恐らくレオン様より上の上空を見ていた者が発狂しているのでしょうか。

ああ、レオン様が笑っていらつしやる、後姿しか見えないけれどアレはきつと笑っていらつしやるんですね。

「ああ、レオン様、やはり貴方様は私の理解を全て覆してしまうのですね。ああやはりレオン様は私の」

「ああああああ!!」

奇声の上がる方を見てみるとレオンに文句をつけていた男が焦点の合っていない状態で剣を振り回しながら近づいてくる。

が、ラナーとの距離が1m程まで近づいた瞬間男は城門を飛び出し空を舞い地面へと落ちていった。

ラナーは自分の直ぐ横に何かが居るのを感じた。恐る恐る手を出してみると目には見えないが何か毛で覆われたモノが寄り添っているのが感じ取れた。

「あなたがレオン様が付けて下さった護衛なんですね、有難うございます。そして見てくださいあの後姿、とても嬉しそうだと思いますか?」

その言葉に答えるように獣の鳴き声がラナーの直ぐ横で聞こえた「あなたも嬉しいですか?、私は嬉しいですよ」

ラナーの護衛についていた者達は誰一人城門の上には残っていない

かった。城門から飛び降りたもの、レオンが用意した護衛に吹き飛ばされたもの。どの様な形であれ城門にはラナーの姿しか見えない。

レオンがアルカディアののって城門まで戻ってきた、しかしその表情はラナーが送り出した時の表情とは異なっていた。

「レオン様！お帰りなさいとても凄かったです！」

「ああ…」

「レオン様？」

レオンはラナーの元まで戻ってきたにも拘らずラナーに振り向きもしない。ラナーの横に居るであろう護衛の不可視の魔法を解いていった。

そこには2つの頭を持つ獣、カーディナルが大人しく座っていた。

「ただいまカーディナル、命令を聞いて良い子にしてたんだな？」

カーディナルの2つの頭に挟まれながら体を撫でていく。

「アルカディアもよく頑張ったないこいいこ」

アルカディアの頭を抱きかかえ撫でていく。

その表情は法悦に浸っているようだった。

「あ、あの…レオン様、私も頑張っただけ見えていました…」

先ほど虐殺をしていた時、いや、今までのレオンとの違いに戸惑いながらも声をかけていく。

「ん？…ああ、怖くなかったかラナー？アイテムがあっただけ大丈夫だったか？」

「っっ!？」

「どうした？」

「い、いえ、何でもありません。怖くは無かったです。レオン様からお借りしていたアイテムを壊してしまっただけ…申し訳ありません」

「気にするな、どちらかは壊れる事前提で渡していたからな、ラナーに怪我が無いならそれでいいよ」

「あ、有難うございます」

「それじゃ俺は後詰で来る筈の本陣をお出迎えにいつてくるよ、カーディナルすまないけどまた姿を消してどこかに隠れていてもらってもいいかな？まだお披露目のときじゃないんだ、アルカディア

はラナーの護衛が何所かに行ってしまったみたいだから護衛として就いていてあげてくれ」

そう言うのとカーディナルに不可視の魔法を掛け飛行フライの魔法で戦場に帰って行ってしまった。

「ああ、レオン様」

戦争が始まるまでの対応と打って変わって、いつもより気に掛けて貰えなかった事にショックだったが、そんな事よりもラナーにとって今まで感じた事の無い感情が体を駆け巡った。

「ああ、先ほどの目、何て素晴らしかったんでしよう」

レオンに話しかけ自身の方へ向いた時。それは今まで向けられた事の無かった視線。

（あの目、私をラナーと言う人ではなく）

ラナーの今まで感じた事のなかった感情。

（何処にでも居る人と同じ…いえ、あの目はアルカディアやカーディナルを見ていた目と同じ。動物を、ペットを見るような目でした）

ラナーはきづいているのだろうか自身の新しい感情に破願している事に。

（ああ、もっとあの目で見ていたきたい）

12話

眼下に広がっていたのは地獄だった。

「まったく一体なんだって外出禁止令なんか出てんだよ」

「面倒な事になりやしたね！」

帝国軍がエ・ランテルの前に陣を構えてから数刻。突然の市長によつて出された一報は戦争に関しての事だったがそれは一般市民だけでなくエ・ランテルに駐留している兵士達にも動揺が起きたモノだった。

『一般市民は市長の許可が下りるまで建物外への外出を禁じる、兵は全員城門内で待機せよ』意味がわかんねえよな、しかも城門の外を見ることがすら禁止だつてんだろ？」

目の前で俺よりも歳が上と言うだけで偉そうにしている男が不服そうにしている。

ここはエ・ランテルにある城門の一番外側だ、本来であればこのエリアも立ち入りを禁止されている。が、どんな所にも真面目な連中ばかりじゃない、一般兵や市民、様々な連中が城壁の覗き窓から帝国軍^{戦場}を覗いている。

「それにしても本当に一人で帝国軍を抑えられるのか？ 四万人いるつて話だろ？ 絶対無理だろ」

小さな覗き窓を一人で占領しているせいで俺達は城壁の外を見る事が出来ないが、兵士達の噂では4万もの帝国軍をたった一人の男が生まれながらの異能^トを使って押し留める手筈になっているらしい。

「あーああ、さっさとおっぱじめねえかなー」

「早くどんぱち初めて欲しいっすね！」

たった一人で如何するのか気にはなるが、それよりも俺はこの男の方が気に入らん、俺より年上でこの世界に入ったのが少し早いからと言うだけで偉そうに指図してきやがる。

この世界は力ある者が上に立つ世界、俺の方が強いんだから覗き窓

を見る権利は俺に有るはずだ。しかし目の前の男に媚び売る連中がこの場には多すぎる。流星に今の俺ではこの場にいる17人を相手にするのは無理だろう。

「おーやっとならぬぞ！ 出て来やがったぜ！ どんな殺され方するのか楽しみだな！」

エ・ランテル側が殺される前提か……まあ俺も殺されるとは思っているがどんな事をするのか楽しみだったが……今は我慢するか、今のところはな。

「ひっ……」

「!!!」

聴こえてきたのは帝国軍の咆哮ではなかった。いや、帝国軍の咆哮らしいモノは確かに聞こえた、だがその後聞こえてきたのは今まで生きてきた人生の中で聞いたことも無いような『声』だった。

そもそも聞こえてきたのは本当に『声』だったのか。だが俺の中の本能が今聞こえてきたモノは『咆哮』だと言っている。そしてその『声』を聞いてから身体が動かなくなった、恐怖で身体が言う事を聞かない。これじゃまるで蛇に睨まれた蛙になった気分だ。

恐怖で動かない身体で周りを見てみると何人かは白目向いて地面に倒れていやがる、痙攣してるようだから気を失ってるだけだろう。偉そうにしてた男は覗き窓から目が離せないでいやがる。

「ひっ!? あ!? ああああ!? 来るな! 来るんじゃないやねえ!!」

男が覗き窓から勢いよく離れたかと思うと真つ青を通り越しもはや真つ白になった顔で俺たちを見た、その瞬間今まで見た事もない程の速さで反対の通路へと逃げて行った。

なにがあつたんだ? 一体何が……外から沢山の悲鳴が聞こえる。足が重たい……だが動かないわけじゃない。

俺は重くなった足で覗き窓から外の様子を見た。

「なんだ、あれ」

そこにあつたのは見方同士で殺しあっている兵士、自らの身体に武器を突き刺す兵士、地面でのたうち回っている兵士、逃げ回る兵士、ど

の兵士達も悲鳴を上げているのが分かる。

「いったい…なにが起こったんだ」

こんな戦場見たことが無い、そもそも俺が見ているモノは現実なのか？

「――」

笑い声？この状況で笑ってる奴がいるのか？そんな奴何処にも…あれはワイバーン!?跨っている男が笑っているのか!?後ろを向いているって事は帝国軍と向き合っていた？あれがエ・ランテルから出て行った1人か!?

狂ってやがる、この状況で笑える人間なんているのか!?

「あ、ああああ…」

振り返った男は笑っていた、この惨劇を喜ぶように。

「あれは…悪魔なのか?」

エ・ランテルを守るために出て行った男は人間などではなかった、アレは化け物で悪だ。

エ・ランテルにおける帝国との戦争から5日ほど過ぎラナーとレオンは王都へと戻った。

そしてレオンはランポッサ三世から報酬を与えられていた。

「今回の一件実に大儀であった、そなたのおかげでエ・ランテルの民は少ない被害で帝国の脅威から逃れる事ができた。感謝する」

「当然のことはしただけです」

「今回の働きに国王陛下より白金貨500枚を褒美として授与する」

「ありがとうございます」

ランポッサ三世はエ・ランテルに向かった時とどこと無く雰囲気の違いレオンに恐怖を覚える。

レオンが退室し残されたのは国王と大臣と護衛の兵だけになった。

「国王陛下!本当に宜しいのですか!」

大臣がランポツサ三世に詰め寄る。

「…なんの事だ？大臣」

「あの男はエ・ランテルの民を戦争に巻き込んだのですよ!？」

エ・ランテルの外で魔法を繰り返したレオンであったが多少だがエ・ランテルの兵士や市民にも死傷者がでてしまったのだ。

「大臣の言いたい事も分かるが…では大臣よ。お主はたった一人でエ・ランテルを守り抜く事ができたか？」

「それは…」

「出来る訳なからう？確かにエ・ランテルの民に108人の犠牲があつたとはいえ帝国兵4万人の進軍を防いだ。民を巻き込んだと言つたがそもそも帝国軍をエ・ランテルに居る兵士だけで抑えたとしたら被害はどうなつていた？それこそ我が国の兵、民の被害は想像もつかないものになつていたはずだ」

エ・ランテルにおける死者108名、その殆どが城壁から戦場を見ようとした者達。

突然奇声を上げて自害した者、奇声を上げて周囲の者に襲い掛かり最後に糸が切れた様に動かなくなつた者、奇声を上げた者に襲われて亡くなつた者。

そう、『建物の外に出なかつた市民』には被害が無かつた。

「で、ですが陛下、あのような男が城内に居るといふのはいささか問題なのではないでしょうか？」

「うむ…」

（大臣の言いたい事も分かる、確かにレオンと言う男はラナーが護衛にと雇い入れた男、その実力は申し分ないかも知れぬが。ラナーに悪影響を与えかねないのでは？しかし今更この国から出て行けとも言えぬ…それこそ追い出した事に怒り帝国側に付かれるのはもつと問題…）

「仕方ない、素性を探らせるしか有るまい」

「陛下？」

「大臣よ今すぐ朱の雫のアインドラに連絡を。あの男レオンの素性を探らせよう」

13話

私にもいつか幸せが訪れると思っていた。

私が産まれた村はとても小さな村でした、とても裕福とは言えない暮らしてましたが妹と2人で互いを支えあいながら慎ましくも楽しく暮らしていました。

そんな私にも夢という物がありました、この村の人でなくても良いから素敵な人と結ばれ幸せな家庭を築きたい。

子供は2人欲しいな、私は姉妹だったから男の子と女の子の兄妹つて憧れるな。何より父親母親揃っての4人家族で暮したいな…私にはもう叶わないから。

妹も素敵な男性と結ばれて欲しい、そして家族同士の付き合いというのを続けてたい。

そう、女の子なら一度は憧れるであろう王子様と結婚するなんて夢は持ち合わせていない。『幸せな家庭を築きたい』ただそれだけ。

まあ少し位は『裕福な』家庭を築きたいって思ったことは有るけど…それでも幸せな家庭だったら何でも良いかな…

私が夢見た理想の家庭…それは9歳で打ち砕かれる事になった。

村に徴税に来た貴族に妾として村から連れ出されてしまった、妹の所に戻りたいけど恐らく不可能だろう。

これから1人で生きていかなくは成らないけど貴女だけでも幸せになってね。

私の大切な――

リ・エステイーズ王国とバルス帝国の戦争から7日が経った、戦争があったと王都でも話題に上がりそうだが話題に成っているのは

ほんの一部界限だけ。

平和に慣れきってしまっている王国、特に戦地から離れている王都の民にとっては別の世界の話しなのかもしれない。

「これが平和ボケってやつなのかね？」

戦争をした国とは思えないほど普段とさして変わらない城内をレオンは歩いていった。

今回の戦争でレオンの行った行動については国王によって緘口令が出され戦争を直接見聞きしていない王都では『戦争を勝利に導いた立役者』として国王より褒美を貰った男という事に成っている。

(しかし、自分達の国で戦争が起こったって言うのに呑気な連中だ戦争の前となんら変わらない)

なんら変わらない、レオンにとって変化のない風景かもしれないが周囲のレオンに対する見る目には変化があった。

城内を見回る兵士達は。

「アレが帝国軍を滅ぼした英雄様か？」

「止せって、お前も滅ぼされちまうぞ、ってかその話はやばくないか？」

「大丈夫だろ？緘口令なんて出てるみたいだけどそんなの無駄だろ」

「まあそうだけど…とこっこち来たぞ」

兵士達の会話など興味が無いのかレオンは右手でチェーンのような物を指に掛けクルクルと回している、長さからブレスレッドのように見える。

「…横を通ったのに俺たちのほうを見向きもしないのかよ、会話が聞こえてなかったのか？」

「まあ、聞こえてないなら聞こえてないで良かったんじゃないのか？」

「一応ラナー様の護衛だから面倒事になったらやばそうだし」

「それもそうか…」

城内を掃除するメイド達は

「あの人国王様から白金貨授与されたって話でしょ？」

「白金貨!?何それ、生きてきた中でそんな物見たことないわよ?」

「それはそうでしょ、私達なんて金貨だつて見る機会そこまで有る訳無いじゃない」

「そうよね、貴族の家に嫁げば好きなように買い物も出来るけど、こんなメイド家業じゃ大量の金貨なんて夢物語もいいところよね」

「貴族の男引つ掛けてきたら？」

「止めてよ…お金は欲しいけどあんなドロドロしてそんな世界考えただけでお断りよ」

「だよね……つと噂をすれば」

レオンが近づいてきたので壁側に避け頭を下げる。

兵士達の時と同じで会話の内容など気にも留めないのかメイドの方を見向きもせずに通り過ぎてゆく。

「…ねえ、さっきの見た？」

「なにが？着ていた服？凄いわね、特に装飾品が沢山付いた服じゃないけど凄く高そうなのは分かるわ」

「そつちじゃないわよ、右手に持ってた物よ」

「何か持ってた？」

「ブレスレットに見えたけどアレは凄いわ、見た事無い宝石が付いてたわ」

レオンの右手に握られていた物は王族や様々な貴族の金品を見てきたメイドだが、それは初めて見る輝きだった。

「へーよく「ほう、それは気になるな」っ!？」

メイドは通り過ぎていったレオンに気を取られ後ろから来た人物に気付けなかった。

後ろから現れた人物は長身の男、目は細く一見何処を見ているのは分からないが、男の前に立つと全身を舐め回されている様な錯覚を覚えてしまう。

「こ、これはリットン伯爵様！申し訳ありません！」

「も、申し訳ありません！」

リットン伯爵、王国で六大貴族と呼ばれる貴族のうちの1人の当主だ、六大貴族に目を付けられてしまえば、どんな難癖を付けられ仕事

をクビになってしまうかも知れない、いや、クビになる程度で済むなら幸福なのかもしれない。

もし何所かに連れて行かれたら何をされるか分かったものではない。

「いやいや構わないとも、君達は職務を全うしていて私に気付かなかった。そうだね?」

「は、はい!その通りでございます!」

2人のメイドは頭を下げながら難癖を付けられない事に安堵する。

「しかし、私に気付かないほど職務に勤しんでいた君達が目を奪われる事とは一体なんなのかな?」

「それは」

「うん?」

メイド達は脅される訳でも怒鳴られている訳でもない、しかし今後自分達に降り掛かるかもしれない絶望から逃げる為に言葉を慎重に選んでいく。

「さ、先ほど通られたラナー様の護衛に就かれているレオン様が持つていらつしやったブレスレットのような物に目を奪われていました」「レオン?…ああ、確かラナー様を救って先の戦争で帝国軍を追い返したと噂の」

リットンの興味が自分達から離れたのを感じメイドは心の中で安堵する。

「ふむ…ブレスレットやらを見に行くついでに挨拶でもしておくか」

そう言い残すと離れて行くレオンの方へ歩いていった。

「リットン伯爵ま、待って下さい!」

長身のリットンに隠れて気付かなかったが魔法詠唱者の様な身なりの男と、いかにも貴族と言わんばかりの派手な装飾を身に着けた背の低い太った男が慌ててリットンの後を追いかける。

「ふう…良かった、本当に良かった」

「まったくね、変な汗かいたわ」

3人が離れて行くのを確認すると揃ってため息が漏れる。

「お、おい!何やってるんだ!お、お前もはやく来るんだ!」

「!?」

突然の怒鳴り声に驚き声の方向に顔を向けると先ほどリットンを追いかけて行った貴族のような男がメイドたちの方へ向かって来たのだ。

(え、もしかして聞こえてた!?)

「もうし「は、早く来い!」え?」

男はメイド達には見向きもせず後ろに立っていたドレスを着た金髪の少女の腕を掴むと急ぎ足でリットンの後を追って行った。

「い、一体なんなのよ」

その日レオンにとって珍しい事が起こった。

「少々宜しいですか?」

「なにか?」

エ・ランテルから帰って来てから城内を歩いても遠巻きに観察してくる者は居てもレオンに直接声を掛けて来る者は居なかった。

いや、エ・ランテルに行く前からレオンに話しかけてくる人物など誰一人として居なかった。

「お初にお目にかかります王国貴族のリットンと言います、爵位は伯爵です。貴方がラナー殿下の護衛に抜擢されたレオン殿で宜しいですか?」

「ああ、そのレオンで間違いないよ」

相手をするのが面倒だと思ったが、珍しく話しかけて来た奇特な人物に興味を引かれ足を止めた。

「何か御用で?」

「いえ、ラナー殿下を逆賊から救い出し、エ・ランテルを帝国から守り抜いた英雄殿にご挨拶をと思ひまして」

(建前だな、いちいちめんどくさいな、本題にさっさと移ればいいものを)

レオンはリットンが自分に話しかけてきた目的が挨拶ではない事に気付くもそれを指摘はしない。

(長くならないなら貴族の話し方ってやつを観察させてもらうか)

「エ・ランテルでの戦争のお話を是非とも聞かせて：いえ、その前にその手に持っている物を拝見させてくださいも宜しいかな？」

元々リットンはレオンの話など興味は無かった、使えるのであれば自分の駒として、などと考えもしたが一番の目的はメイド達が言っていたブレスレットだ。

会話をしながらブレスレットを確認するつもりだったが、ソレを見た瞬間目が離せなくなった。

（早すぎるだろ、貴族としての皮の被り方を観察してやろうと思ったら即効で素が出やがった）

「これがなにか？」

レオンは握っていたブレスレットをリットンの前に差し出す。

「これは…美しい」

（メイド達が目を奪われると言っていたのが分かる、幾つもの細かいチェーンに施された彫りも美しく、チェーンとチェーンの間には見た事も無い輝きを見せる大きな紫の宝石が取り付けられている）

あまりの美しさで無意識にブレスレットへ手が伸び、手が届く所でブレスレットは離れていった。

「な?!もう少し見せてくれても良いではないか!何故だ!?!」

「別に手にとって見せてくれなんて言っただろ?」

「くっ!ではソレを見せろ!」

レオンに話し掛けて来た時の態度など何処へ行ったのか、もはや取り繕う事を止め本性を露にしたリットンが居た。

「ほら、見ても良いが壊さないでくれよ?ソレはラナー様にあげようと思っただけだから」

もはやリットンはレオンの話など聞いてはいなかった、レオンからブレスレットを奪い取るように受け取ると細い目を大きく開け宝石に釘付けだ。

「美しい、素晴らしい!見た事ないカット!極め細やかな彫刻!これほど美しい装飾見た事ない!」

（なんだこいつ、頭おかしいのか?このアイテムに魅了チャームの効果なんて無かったぞ?)

「ど、如何なさいましたリットン伯爵!？」

後からやって来た魔法詠唱者風マジックキャスターの男と貴族の男は今まで見たことの無いリットンの奇怪な行動に引きながらも近づいてきた。

「これほど美しいブレスレットなど見たこと無い!レオン、殿!これを譲ってくれ!」

「いや、あんた人の話し聞いてたか?それはラナー様にあげるって言ったばかりだろ」

やはりレオンの言葉など聞こえてはいなかったのだろう、リットンの目は血走っていた。

「ではこれを私に譲ってくれ!金なら払う!」

「いや、これはラナー様に「幾らなら納得する!？」人の話し聞けよ」

「幾らなら満足してもらえる?これ程のモノだ金貨数十枚なら用意するぞ?」

「なっ!？」

リットンの言葉に驚いたのは付いて来た貴族だった。

そもそも背の低い太ったこの男、貴族では有るのだが、実際は膨大な土地を所有するリットンと違い、伯爵の所有する領地に隣接している小さな村を2つ程所有するだけの貴族なのだ。

そのような領地の為貴族の中でも地位は低く、着飾ってはいるが実際のところ資産など多くは無い、それこそ重税を課したところで金貨2枚程度の収入にも満たないだろう。故にリットンに取入ろうとしていたのだ。

「金貨数十枚ねえ…言っておくがソレはただのブレスレットではなくマジックアイテムなんだが」

「ほう、マジックアイテム?私も色々知ってはいるが、それが本当か確認しても?」

「勝手にしな」

「よし、おい!貴様、これが本当にマジックアイテムか、そしてどの様な効果が有るのか確認しろ」

リットンが連れてくる魔法詠唱者マジックキャスターの男はリットンに雇われた護衛だ、元々王国では魔法詠唱者の地位はそれほど高くは無いが、それで

も理解が有る者は貴族の中にも少数だが存在する。

「はい、では失礼します道アブレイザル・マジックアイテム具アイテム鑑アイテム定！付与魔法探知！」

二種類の魔法を掛けた男の顔に驚愕の色が浮かんだ。

「ふあ!? な!? え!? うそ! え! まじか!」

突然大声を上げ慌て始め驚愕した顔で自分の手元に有るアイテムとレオンを何度も見る。

「どうした、そんな声を上げて? 一体どんな効果があったんだ?」

自分の連れていている男の慌てようを見て我に返ったのかリットンは落ち着きを取り戻したようだ。

「は、はい…このアイテムは、第五位階までの魔法を3回無効にすると言った効果が付与されています」

説明している男の身体は震え顔が真っ青になっている、しかしその効果がどういったものか理解出来ていないのだろう、リットンは首を傾げている。

「魔法を無効化するというのは分かったがそれが凄い事なのか?」

リットンは魔法詠唱者マジックキャスターに理解は有るが魔法の効果などに関しては理解が追いついていないのだろう、説明されても良く分からないといった顔だ。

「はい、回数付ですが魔法を無効化、これだけでも凄いですが、驚くべきは無効化できる魔法の階が第五位階だと言う事です!」

「ええい! もっと分かりやすく説明せよ!」

「第五位階…それは英雄譚サガに出てくる英雄と呼ばれる者が扱う事のできる魔法です! 我々が使える魔法は第三位階が限界です! 言うなれば国宝クラスクラシックのアイテムで間違いありません!」

「国宝クラス!? そんな物だと言うのか!」

リットンも自分が欲していたアイテムの価値が理解できたのか驚きを隠せないようだ。だがこの価値を聞いた上でますます欲しくなったのかレオンの方へ顔を向けると。

「レオン殿、い、幾らでなら譲って貰える?」

「リ、リットン伯爵!? ほ、本気ですか?」

「ええい! 黙っている! レオン殿、如何かな?」

「いや売らないって最初から言ってるんだが」

「金貨100枚！いい、いや金貨300枚までなら出させて頂こう！」

目の前で行われている交渉に魔法詠唱者マジックキャスターと貴族の男は最早驚きが隠せない、マジックアイテムの効果を聞いただけでも信じられない内容だったのだが、リットンの提示する金貨の枚数が2人にとっては聞いた事の無い金額だった。

「さっきから言ってるがそれはラナー様にあげる物だって言ってるんだが」

「そこを何とか」

「いやもう返してくれ」

「今後何かあれば私の力を使って良い思いさせることも出来る！」

「やばいやつじやねえか」

「悪いようにはせん！」

レオンは頭を抱える、まさか王城に来る前に生産職としての特殊技術スキルを使って製作したアイテムだと言える訳でなく、どうやって納得させるかを考える。

(面倒だな、納得できないのなら、いつそ始末するか?)

目の前に居るのは貴族が2人と魔法詠唱者マジックキャスターが居るが先程の会話から第三階の魔法ですらやつとだと言っていた、レオンにとっては何の障害ではない。そして。

(ん？デブが腕を握っているのは女か？ドレス着てるから女だよな)

レオンは目の前の三人が騒いでいて今まで気付かなかったがこの場には自分達の他に少女が居た事に気が付いた。

貴族が興奮しているのか掴まれている箇所が鬱血している様子だが、少女は痛みに耐えているのだろう顔を歪めている。

(何でこいつは文句の1つも言わない？何だこいつ、痛みに耐えてるが：死人みたいな面しやがって。ん？もしかしてこのガキって豚の嫁か何か？年齢的にはラナーと同じ年ぐらいか？もしかしてこっちの世界はアレぐらいの年齢で結婚するものなのか？こっちの世界じゃそれが常識なものなのか?)

レオンはドレスを着た少女を観察する、見た目から考察できるの

は、ラナーと同じ年ぐらいだという事、この2人は親子ではないであろうと言う事、そしてリットンではなく連れ貴族の嫁？だと言う事、これらを考慮してレオンが導き出したのは。

(常識で考えれば…このガキを使って断れるか)

「なあ腰巾着の貴族さんよ」

「お俺!?!な、なんだ?ここ、腰巾着じゃ…」

声を掛けられると思っていなかったのだろう、レオンに話掛けられるとリットンとレオンの間を目が泳ぎだした。

「何でもいいだろ、あんたが連れてるのって嫁さんか?」

少女の身体がびくりと怯えたように震えているのが分かる。

「こ、これか?これは別によ」嫁なのかそうかそれは残念だ「え!ええ!?!」

「そうか、嫁なら無理だな、残念だよりリットン伯爵」

「ん?なんだその娘が気に入ったのか?」

「ああ、その娘をメイドにと思ったんだが…その巾着の嫁さんなら駄目だな」

「メイドを探しているのかな?」

「ああ、今日城に来る前に屋敷を購入して来たんだが、メイドを探しているな」

レオンにとって王城での生活は今まで経験した事無いような事ばかりで最初は楽しかったようだが、何処を歩いても誰かの目がありプライベートなど無いような世界。そしてカーディナルを何時までも森の中に隠しておくのは可愛そうだとも思い、自分だけの空間も欲しかったレオンはラナーには事後報告になったが王都から少しだけ離れた場所に建っていた空き家の屋敷を購入したのだ。

「メイドが欲しいなら私が『素晴らしい教育』が施された者を数人用意してもいいが?」

リットンの言うところの『素晴らしい教育』と言うのは料理や掃除だけでなく夜の奉仕もとの事だ、その部分を強調したのはやはりそういう事なのだろう。

「いや、俺はその女が気に入ったんだが、まあ嫁だと言うなら仕方な

い。諦めるよ、だからリットン伯爵貴方も諦めてくれ。それでは失礼する」

そう言うと魔法詠唱者マジックキャスターが持っていたブレスレットを素早く回収すると立ち去っていった。

残されたのは呆然と立ち尽くりリットンだったがいち早く立て直し貴族の方へ向き合う。

「さて、卿に聞きたいのだがその娘との関係は一体何かな？」

落ち着いて話しているように見えるがその表情は怒りに満ち溢れている様だ。

「ひーひゃひゃい、こ、この娘は数日前に領地からぜ、税の支払いとして妾に、に」

「なるほど、なるほど、では卿はその娘を手放しても問題がないと言う事だな？」

「へ？え、い、いえ…まだ数日しか楽しんでいないので出来ればもうす「あ？」な、何でもございません！」

リットンは貴族の両肩に手を置き最後の警告を伝えた。

「いいかい？卿がその娘をあつ男に渡す、そうするとあのマジックアイテムは私の元に来る。卿は私に貢献する事ができる、ほら皆が幸せになれると思わないか？」

「え、えも、でも、メイドを渡した場合マジックアイテムがて、手に入るのはお、俺「なにかな？」な、何でもありません！」

「はあ…いいか？もし今後も私の横の領地で貴族として暮して…『いききたい』と思うなら。わかるな？」

「わ、わかりました…」

リットンの言っているのは簡単だ『死にたくなければ大人しく娘を差し出せ』少女を権力によって手に入れたのなら、手放す理由となるのもまた権力なのだ。

「待つて頂いてもよろしいかな？」

「ん？もう話は終わったと思うんだが？」

ラナーの部屋まで後僅かと言う所でリットンが先程の少女を連れ追いついた。その顔には先程と違って白い歯を見せ満面の笑みを浮かべていた。

この世界に前の世界の常識を当てはめてはならない、レオンにとってそれは初めての経験となっただろう。

何より相手は『貴族』元よりこの世界の常識すら通じない相手である事を。

「さあレオン殿、貴殿の望みであった少女だ。たつぷり可愛がってあげるといい、勿論メイドの仕事も、様々な事を教えて上げると良い」「は?」

「なに心配する事はない、彼から既に許可は貰っている。コレではこれでこの娘の所有権はレオン殿のものだ」

レオンの肩に腕を回し破顔した顔を近づける。

「なに、何か困った事があれば何でも言ってくれたまえ。君と私の仲間だからな」

レオンの手からブレスレットを抜き取ると高笑いを響かせ通路の先へ消えていった。

「え?」

あまりに予想できなかった結果に立ち尽くすレオン。

まさに今回の結果はレオンにとって予想だにしない物となった。

——レオンさんだーいごさーん!

「まじかよ…予想外デース」

下を向き佇む少女と呆然とするレオンを残し、帰っていったリットンの笑い声も小さくなっていった。

「あーお前名前は何ていうんだ?」

「ツアレ…ツアレニーニャ・ベイロンです。ご主人様」

14話

その日レオン様は見たことの無い娘を連れやって来た。

見た所年齢は10才程、私とそれ程変わらない年頃でしょうか。こう言つては失礼かも知れませんが幸薄い娘と言つた言葉が似合いそうな娘ですね。

「やあラナー様今日も元気にしてるかな？」

「はい！今日も天気が好くて気持ちがいいですね」

レオン様は戦争アからまるで人が変わられたのかと思うほど落ち着いた雰囲気を見せるようになられました。前のように感情豊かなレオン様も素晴らしかったのですが、私としては城門あの時のような目で私を見て頂きたいです。

「ところでレオン様、そちらの方は何方でしょうか？」

私の質問にレオン様の表情が一瞬引きつりましたが…もしかしてレオン様はそのような娘がお好みなのですか!?確かに私も最初にお会いしたときは幸薄そうな雰囲気を出していたかも知れない!と言う事は明るく振舞うよりあの娘のように何処と無く影を落としたほうが振向いて頂けるのですか!?

「いや、まあ話すと長いようで短いんだが。さつきそこでリットン伯爵?つてのに捕まつてな、この前壊れたブレスレットの代わりに新しいのを持って来たんだが…譲ってくれて煩くてな、色々あつてこの子をメイドとして譲ってもらおう代わりに持つて行かれたんだ」

リットン伯爵、この前はエ・ランテルに行くのに都合がいいと思つて役に立つてもらいましたが。レオン様の物を奪うとは…殺す。まして私の為にレオン様が用意してくださった物を、レオン様を不快な気分させた上で奪うなんて…絶対に殺して差し上げます。

「まあ、それは大変でしたね。でもレオン様お城で暮していればメイドさんなら沢山いらっしやいますけど、専属メイドが欲しかったと言う事ですか?」

「いや、そういった意味では無かつたんだが。専属メイドか悪くない響きだな」

「レオン様？」

「いや、気にするな失言だ：ラナーには言っていないかったんだが、今朝王都の外れに屋敷を購入してきてな。その管理をする者が欲しいと思っていたから丁度良いと言えば丁度よかったんだ」

「屋敷の購入、ですか？」

何ということ、レオン様が王城こごから出て行かれるなんて！いえ、まだ王都から出て行かれると言う訳ではない王城こごから出て行かれるだけ。

「ああ、王城での生活は悪くないんだがカーディナルを何時までも周辺の森に隠すのも可哀想だからな。俺も色々好きに出来るスペースつてのも欲しかったから周辺に建物が無くて都合の良さそうな物件を購入してきたんだ」

なるほど、カーディナルを隠す為に。確かにあれらを森の中に何時までも隠し通せる物ではない、そして城内に連れて来る気も無かった。結果屋敷を買って隠すという訳なのですね。

「成る程！屋敷をお掃除していただくには確かにメイドさんは必要ですものね！」

「そう言う事なんだ、流石にドレスのまままで仕事はしたくないだろうから、後でメイド服や今後の生活に必要な物を買って行ってから帰るとするよ」

「そうなんですか？でもそうになると早めにお店に行かれたほうが宜しいのではないですか？」

「ん？それは何故かな？別にお店が閉まる位までラナーの護衛をしてからで問題ないんじゃないのかな？」

「私としてはレオン様に護衛をして頂きたいですけど、誰も住まわれないなかった屋敷なら汚れが凄いいんじゃないんですか？お洋服などを買って帰った後にお掃除をされてはゆっくりする時間が無いのかと思ひまして」

「確かに言われてみるとそうかも知れないな。だがそうになると護衛として居れないが：そうだな、じゃあ代わりにアルカディアをバルコニーに呼んでおくよ」

「はい有難うございます♪」

レオン様がメイドを連れて部屋を出て行かれた。

「本当はその屋敷で私も一緒に暮したいところですが…今はまだ辛抱のときですね」

私の目的はレオン様と共に暮す事、そしてあの目で見て頂いて可愛がって頂く事。

ああ、私はあの目で見て可愛がって頂けるのならペットでも何にでもなりますよ。

メイドはまあそうですね、レオン様の素晴らしさが理解できるなら一緒に飼って頂くのも良いかもしれません。素晴らしさが理解できるなら、ね。

「まあメイドの事は置いておきましょう、お父様国王がオリハルコン級の冒険者に召集を掛けたと言う方が気になるけど。恐らく今更レオン様の身辺調査と言ったところでしようね」

私の護衛として相応しいか調査するため。いえ、レオン様がどれ程の力を持っているかと危険人物ではないかの調査ね。

やはり凡人国王ではレオン様の価値を理解できなかつたかしら？

「レオン様にご迷惑をかけなければいいけど」

そんな事よりもリットン伯爵を如何するか考えなくては。

いえ結末は決まっているんです、殺します。

レオン様を不快にさせる者は必ず殺す。レオン様を馬鹿にする者は殺す。誰であろうと必ず殺す。

「ああ、レオン様、そのお屋敷で暫しお待ちください、必ずやレオン様のお手を煩わせないように準備いたしますので」

15話

王城にある王の部屋、本来であれば護衛の者や大臣等しか入ることは許されない。そのような部屋にランポッサ三世と大臣、そして冒険者風の男が1人。

「国王陛下、我々朱の雫に内密のご依頼があると聞き参りました」

朱の雫、王都を拠点に活動しているオリハルコン級冒険者チーム。リーダーのアズスは貴族の出身と言う事もあり、表立って冒険者などには依頼しにくい内容の依頼を引き受けているのだ。

「おおアインドラよ、この度は急な呼び出しにも拘らずよく来てくれた」

「いえいえ、国王陛下のお呼びとあれば即座に」

「ふむ、冒険者として多忙である貴殿に個人的な頼みがあつてな」

「個人的、でありますか？」

「これまで国王として直々に朱の雫に依頼が来た事はあつた、しかし^{ランポッサ三世}国王個人として依頼が来た事は今まではなかつた。

「うむ、今ランナーの護衛として雇っている男についての身辺調査及び戦力の調査を依頼したいと思つている」

「ランナー様の護衛の者となると…ランナー様を賊から救い、エ・ランテルを帝国軍から護りぬいたと噂されるマジックキャスターの事でしようか？」

アズス本人は会つたことが無いがランナーを救つた旅人として話は聞いたことがあつた。そして王都では戦争の影響が無い事もありそこまで話題には上がらないが、冒険者組合ではエ・ランテルでの逸話は耳にした、しかし誰もがソレを本気にはしていない。

「そう、最初はランナーを救つてくれた事もあり、ランナー本人が望んだ事もあつて細かい身辺調査などせずに雇い入れたのだが。此度の戦争の一件を聞いてしまつては、そこで貴殿の朱の雫に調べてもらおうかと思つてな…大臣」

「朱の雫には数日の内にレオン・D・ファンシオンを連れてアゼルリシア山脈に立地調査に赴いて頂きたいと考えております」

「立地調査ですか？あのような山脈など調査する必要など…」

アゼルリシア山脈とはリ・エステイーゼ王国とバハルス帝国の間に位置する境界線の役割と成っている山脈である。

「はい、アインドラ殿や朱の雫の方々には大変申し訳ないのですが、今回の立地調査で調べて頂きたいのは別のモノになります」

「ああ…成る程そういう事ですか」

『立地調査』それは建前であってレオンをアゼルリシア山脈まで連れて行きその道中や山脈で現地のモンスターとの戦闘によって、どれ程の実力を持っているかを確かめてきて欲しいと言う事である。

「アインドラには道中での会話で人となりも調べてもらいたいと思っている」

「承知いたしました、我々朱の雫がラナー様の護衛として相応しく、尚且つ王国に脅威をもたらす人物か審査してまいります」

朱の雫としてはアゼルリシア山脈に何度か行った事もあり道中に出てくるモンスターも有る程度把握している。メンバーに1人加えて目的地まで行って戻ってくるだけの仕事ではない。

「そうか！それは良かった。それではアインドラよ、宜しく頼むぞ」

ランポツサ三世は安どの表情を浮かべ座っていた背もたれに身体を預ける、信頼する冒険者に大切な娘の護衛を調査し、問題がない人物である事を知りたいのであろう。

「それではアインドラ様、今分かっている情報でございます」

大臣が小さなメモ用紙のようなものを差し出した。城内を見回っている兵士やメイド達から聞き取り調査を行い、大臣が独自に調べた物である。

「ありがたく頂戴いたします、では国王陛下、私はアゼルリシア山脈となると準備が必要になって来ますのでこれで失礼致します」

「私個人の我侭を聞いてもらってすまない、どうかよろしく頼む」

「は！お任せください！」

アズスは部屋を出ると大臣から渡されたメモを見ていた。

「なにになに？見たこと無い武器をもっている、見た事ない防具をして

いる、見た事もない装備って…これじゃただの感想じゃないか」

アズスは廊下を歩きながら頭を抱える、一体どれ程の情報が書かれているのかと思っただが、これでは見た目の感想でしかない。

「たく…ロツソ、頼んでいいか？」

「あいよ大将、国王からどんな依頼を受けたんだ？」

柱の影から1人の男が姿を見せた、全身黒ずくめで細身の男。朱の雫に所属している盗賊だ。

「アゼルリシア山脈に1人の男を加えて調査に行けってさ」

「調査？一体何の？」

「取り合えずロツソは対象人物を監視して欲しい」

「帝国か法国のスパイかなんかが入り込んだか？」

「それはまだ分からない、レオン・D・ファンション…この男が一体何者なのかを調べるのが今回の依頼内容だ」

「レオン・Dって言うのと先の戦争の有名人じゃねえか、ふーん…まありよーかいしましたよ大将、恐らくラナー様の部屋かどっかに居るだろうから早速いつてみるか」

そう言うところとロツソと呼ばれた男は幻術でだろうか、その場から姿が消えたのであった。

「よろしく頼むぜ、ん？まだメモの続きが有るのか。なにに？ラナー様とのやり取りが微笑ましい、ラナー様を見る目が優しい。んー子供が好きなのかな」

周囲のラナーとレオンのやり取りは、少女に遊ばれて居る大人に見える、子供の面倒を見ている大人に見えるのかもしれない。

「子供好きか、ってやっぱりこのメモ見た目の印象の事しか書いてないじゃないか…大臣大丈夫か？」

改めて渡されたメモの内容に頭を悩ませつつアゼルリシア山脈への準備やルートを考える。

アズスが城門まで歩き外に出ようとするすると背後から何者かが勢い良く走ってくる音が聞こえた。

「おーじーさーまー」

大きな声でアズスの事を叔父と呼びながら抱き着こうとする少女、
もといタツクルしようとする少女。

だが。

「あらよつと」

アズスは後ろを振り返らずに少女が立てる足音、声大きさ、それらを理解し距離を計算して自分に触れる寸前の所でかわす。

少女はバランスを崩し転倒しそうになるが耐えアズスへと向き合う。

「ひどいじゃないですか叔父様！そこはちゃんと受け止めてくださらないと！」

綺麗に着飾ったドレスに負けないその髪はラナーと同じで金髪で緑色の瞳をしている。だがラナーより年齢が上なのだろうラナーよりも大人びた印象を思わせる。

「悪い悪い、攻撃されると思って思わず避けてしまった」

「そんな事しませんでしたば」

少女はアズスの姪に当たるラクユース・アルベイン・デイル・アインドラ。

「ラクユース、御転婆なのは程々にしないと怒られるぞ？」

「大丈夫です、そんな事よりまた叔父様の冒険譚を聞かせてください。その後で私に稽古を付けて下さい！」

「またその話か、冒険の話しをするのはまだ良いとして。稽古は勘弁してくれ、また兄貴にどやされる」

「じゃあ稽古は付けなくてもいいから私も冒険に連れて行ってください」

アズスは頭を抱える、昔酒に酔ってラクユースに自分の経験してきた冒険譚を話したことが有った。それからと言うもの兄の家に行くとし新しい冒険の話の話を聞かせろと言う様になってしまった。

最初の頃は自分の話が出来てアズス本人も楽しかったと思っていたが、最近の話だけでなく剣の使い方を教えろだの戦い方を教えろと。要求が変わってきてしまった。

当然アズスの両親は話程度ならと許していたが、実際に剣を振ると

なつては貴族の娘としての嗜みどころの話ではない。今ではアズスは兄からお小言を貰うようになってしまった。

「一緒に連れて行けつて…また無茶な」

（ん？待てよ、確かさっきのメモに子供好き見たいな事書いてたな。これは使えるか？）

「えー良いじゃない「いぞ連れて行ってやる」本当ですか!?!」

ラクユースは思いもしなかった返答に驚きよほど嬉しいのだろうアズスの両手を掴み飛び跳ねている。

「準備はこつちで全部してやる、その代わり！兄貴にはぜつたいに言うんじゃないぞ?」

「はい！絶対に言いません!」

ラクユースは念願であった冒険への第一歩を踏み出せる喜びに胸を躍らせるのであった。

16話

第三王女であるラナー様の部屋から件の男と少女が出てきた。男の名はレオン・D・ファンション、数日前にあった帝国軍が王国領に宣戦布告無しで攻めてきた侵略戦争。その戦争における王国軍勝利の立役者。まあ立役者といってもエ・ランテルで帝国軍を全滅させた『殺戮者』って方がしっくりくるがな。

それにしても連れてくる娘は何者だ？ここ最近色々話題に上がっていたが娘がいるなんて話は聞かないし、嫁か？いや嫁には若すぎる気もするが…まあ付いていけば分かる事か。

レオンとツアレはラナーの勧めで護衛の仕事をアルカディアに任せ王都の町へと繰り出していた。

城門の正面はメイン通りとなっており町は活気に満ち溢れていた。「城内の雰囲気も戦争をしたとは思えないほど呑気な感じだったけど、町の中はそれ以上だな」

レオンは王都のメイン通りと呼ばれる道を歩きながら観察している。

道を行き交う市民には笑顔が溢れており、町を警邏する兵士達は平和すぎるのかやる気が無いのかは分からないが呑気に欠伸をしながら町を見回っている。

「王国内の出来事でも住んでいる場所が違っていると、自分達とは関係の無い世界の出来事に感じる物なんだろうかね？」

実際は帝国が戦争を仕掛けに来た時、パナソレイによってエ・ランテルから来た伝令が来た日はこの王都も大騒ぎだった。しかし国王や貴族が兵の準備をしている段階で新たにもたらされた情報は『帝国軍壊滅・帝国軍撤退』であった。

この帝国軍が撤退したという情報によって、男集は徴兵を免れたのだ。そしてこの情報によって市民は自分達とは係わりの無い戦争になってしまった。

王都の様子は帝国が攻めてきた3日後には普段となんら変わらな

い日々になっていたのだ。

「なあ、あーツアレだったか？少し聞きたいんだが、お前は今年の帝国との戦争ってどうなったか知ってるか？」

レオンは自身の二歩後ろを俯きながら歩く少女、ツアレへ質問を投げける。

「も、申し訳ありません、私はイーノ様に召し使えてからは外の事はまったく分からないんです。せ、戦争があつた事もまったく知りませんでした」

「そうか、それじゃしかたないな…ところでイーノって誰？」

「さ、先程まで私を連れていた方です」

レオンは先程のリットン伯爵達とのやり取りを思い出す。

しつこくアイテムを寄越せと言ってきた細目の男、見た目がザ・マジックキャスターの男、レオンのメイドになったツアレ。

(んー？イーノなんて呼ばれた男なんていたっけ？あ！豚巾着か！間違えた腰巾着もしくは金魚の糞か)

ツアレは自身の新しい主を怯えながらも観察する。

自身がレオンと呼ばれる男に引き取られる時の会話からして貴族ではないのであろう。着ている服はズボンにシャツと随分とラフな格好だがその生地はツアレが今まで見た事が無いほど上質なものであった。

(とても綺麗な服、とても高価な装飾品を持っていたから凄いお金持ちなのかな…どうせお金を持っている人にまともな人間なんて居ないんだ…)

ツアレにとってお金を持っている人間はろくでもない人間ばかりなのだろう、先程のリットンのブレスレットを寄越せと迫る姿は恐ろしい物があった。お金で全て解決できると思つているとはああいう事なのだろう。

目の前を歩くレオンは声を掛けて来た時はツアレの方へ顔を向けたがそれ以降は前を向いている、手を握ったりもしていない。

ツアレは考えるこれは自分自身にとって自由になれる最初で最後のチャンスなのかもしれない。

(もし、今走って逃げたら村まで帰れるかな…でも、もし逃げれなかったら…どんなに酷い事をされるか分からない)

どれだけ歩いただろう、一度声をかけてからレオンは一向にツアレの方を見向きもしない、それは自分に付いてきていると確信しているからなのか、逃げないと確信しているからなのか。それとも逃げても捕まえる自信が有るからなのかどうかはツアレには分からない。

(今なら、ちがう…今しかチャンスは無いかもしれない。なら「おいひゃーひゃい!」)

「ん?どうかしたのか?」

「な、なんでもありません!も、申し訳ありません!」

ツアレは自身が今から行う行動がばれたのではないかと思ひ咄嗟に謝罪して頭を下げた。しかし謝罪の声は思いの外大きかったのか周囲の注目を集める事になってしまった。

ドレスを着たツアレが往来で謝る姿は珍しいのだろう、女性達は怪訝な顔をし男達は下賤な笑みを浮かべ2人を見ている。

「なんで謝ってんだ?まあいいや、着いたぞ」

しかしレオンにとって周囲の目など気にならないのだろう。ツアレは怒られるとばかり思っていたがレオンが何も言ってくる気配が無いので頭を上げると、目の前には周囲に連なっている建物よりも高級な雰囲気漂う店舗の前まで来ていた。

「(っ)は?」

「城を出る前にメイドに聞いたんだ、なんでも有名ならしいぞ?」

一体何が有名なのか分からないがレオンは扉を開けツアレの中に入るように促す。中に入ると棚が天井まで造られており沢山の布やボタンなどの装飾品が並べられている。

「凄い…こんなに沢山の布見た事無いです」

置かれている布は数も凄いが生地も沢山の種類が有る。

「いらっしやいませ、本日はどういった御用でございましょうか?」

店舗の奥から現れたのはドレスを着た初老の女性だった、初老と言っても背筋は真っ直ぐで笑みを浮かべるその顔には薄っすらとしわが見えるが『笑顔が似合う』といった印象を抱かせる女性であった。

「突然の依頼という形になってしまっただが、この子に4着ほどメイド服を仕立ててもらえますか？」

入り口で恐縮しているツアレの背中を押し女性の前へ立たせる。

「メイド服、でございませうか」

「ああ、今日から家でメイドとして働いてもらうことになりました」

「なるほど…では今日から働かれるのでしたら2着ほどは既製品で残り2着を身体に合わせて仕立てるといふ事でどうでございませうか？」

「ええ、それをお願いします。それと宜しければその他に生活に必要な衣服なども見繕ってあげてください。俺は少々席を外してもいいですか？」

「ええ構いません、それでは畏まりました。ではお嬢さん此方へ」

女性に連れられツアレは店舗の奥へ消えていった。

「さて俺はリング・オブ・サステナンスで食事は要らないけどツアレあの子はそうもいかないからな、材料でも買いに行くか。ネズミは俺かツアレか…どっちがターゲットトなんかね」

城を出て何処に行くかと思えば王国で一番とされる仕立て屋に行つたと思つたら、レオン男は別行動で市場に行き食材などを買つてから仕立て屋で少女と合流…これじゃただの買い物してる男女を追跡してるだけじゃないか。

オリハルコン級冒険者の盗賊が夕方の街中で普通に買い物してる男女の追跡つて…技術の無駄使いだと思わないか？

まあ俺の追跡を察知できる奴なんて居ないだろうからな、楽な仕事だ。

幻術によって姿を消して追跡したらいいだけの簡単なお仕事ですつてか、簡単に眠たすぎて欠伸が出るわ！これは大将に費用請求しなくちゃな。

しかし思つてた以上に意外と紳士だな、今までの買った荷物を全部レオン人で持つてるよ。少女が何も持つていなくて動揺してるのが目

に見えて分かるな。

大分王都の外れまで来たな…こんな所に何かあったか？ん？アレは屋敷？それなりに大きそうだけど外観は出来てから年数が建っているのが分かるな。

屋敷の横には小屋と言うよりは倉庫と言ったほうがしっくり来る建物が2つ。

あ、少女が男の片腕を掴んで屋敷の中へ入っていった。

やっぱり夫婦なのか？でも少女の方がまだ若すぎる気がするけど…さてどうしたものか、屋敷まで尾行したから、任務は完遂しちゃあ完遂だけど…せっかくだ、屋敷の中までとは言わなくても窓にへばり付いて有る程度の会話も調査しておくか。

別に一組の男女が建物に入ったら恐らく行うであろう行為をしないか楽しみで敷地に潜入するわけじゃないからな！

さて、どんなお楽しみが有るのか楽しみだな！

17話

仕立て屋から出てご主人様のお屋敷まで帰ってきました、でも私は初めて来たからやっつて来たの方が正しいのかな？

お屋敷まで来る道中荷物を持つとうとすると『ん？子供がそんな気を使わなくていいぞ』と言つて何も持たせてはくれませんでした、私メイドとして雇われたんじゃ…

でもお屋敷について門の前に立つと小さい声で。

『悪いんだが俺の腕を掴んでくれるか？分からないだろうけどこの屋敷には番犬？んー番犬でいいのか？まあいいか。まあそんなこんなで取り合えずお前が襲われない様にするには俺にくっ付いておくのが1番なんだ』

門の内側は雑草が沢山生えていて手入れが行き渡っていない屋敷だと言う事が見て分かります。町から大分離れていたので買い手が付かなかつたのでしょうか。

ご主人様は番犬？がいると仰られていましたが右を見ても左を見ても動物の姿は見えません、草で姿が見えないだけなのでしょう。でも『自分と供に居ないと襲われる』：私はやはりこの屋敷の中から出ることは許されないうですね。

屋敷の中は庭の手入れが成っていない状況と違いある程度は屋敷を引き渡す前に掃除をしていたのだろうか、目に付くところに埃が溜まっている様子は見受けられない。

「さて、思いの外買物に時間が掛かってしまったな、すまないが適当に室内を掃除しておいてくれ」

「えっ？」

レオンの発言にツアレは目を丸くする、誰も居ない屋敷にメイドとして引き取られた自分を連れて来たのだ、掃除など後回しーいや、掃除など元より自分で自分を抱く事が目的なのだと思っていた。少なくともイーノには自分を村から連れて帰った日は屋敷に入ったと同時に襲われた。

「あ、あの、ご主人様、本当にお掃除で宜しいんでしょうか？」

「ああ、自分が寝起きする部屋でも掃除しておくといい、あー部屋は自分の好みで選んでくれて良いぞ？俺の部屋は後で決めるから」

部屋を選んで掃除しておけ、ツアレは目の前の男が何を言っているのか分からなかった。ツアレはこの屋敷、レオンに連れて来られたのは自分を好きに弄ぶ為だけにイーノから買われたとばかり思っていた。

しかし。

（このご主人様は本当に私をメイドとして買われた？もしかして…とても優しいご主人様なのかな？）

「掃除の道具は買ってきた物の中に有るから適当にやってくれ、何か分からない事が有ったら俺は厨房にいるから声を掛けてくれ」

「は、はい！分かりました！」

（優しいご主人様かもしれない、もしかして…ご主人様は私をイーノ様から救ってくださった？…でも）

レオンは伝えることは伝えたのであろう、買い物袋をもって屋敷の奥へと消えて行った。

（ご主人様の目が、どうしても…怖い）

ツアレは1階を掃除し2階へ移動しようとして階段を上っていると後ろから声が掛かった。

「あーツアレ、食事が出来たからリビングに来るといい」

「え？」

ツアレはどれだけの時間も掃除をしては居ない、レオンに言われていた通りリビングの掃除を軽く行い、2階に上がって主の部屋となるであろう部屋を見て掃除するつもりだったのだが。

「食事、ですか？」

「思いの外食事の準備が早く出来てな、腹も減ってきただろ。温かいうちに食べると良い」

何故メイドの自分ではなく主であるレオンが料理しているのだろう、そんな疑問を口にする前にレオンはリビングの奥へ歩いていっ

た。

ツアレがリビングの扉を開けると食欲をそそる香りが漂ってきた、机の上には今まで生きて来た中で見た事も無い料理が並びレオンがリビングの奥から新しい料理を運んでいた。

「ご、ご主人様!?!料理でしたら私が運びます!」

「ん?気にするな、これで最後だ。そんな事より椅子に座って食べるといい」

「そんな…そ、それに食事でしたら私が…」

「なんだ、ツアレは料理が出来たのか?なら今度は作って貰うとしよう。なに、今日は料理人としてのクリュプトン^カを試したくてな」

ツアレの料理は村娘が作る家庭的な料理だ、目の前に並べられている見た事も無い豪華な料理に匹敵出来る筈も無い。このレベルと同じ料理を出せと言われたら、と考えるツアレは苦笑する。

「ほら、冷める前に食べ「ぎやあああああ!!!」」

突如屋敷に悲鳴が響く。

「ひっ!?!」

屋敷に響く悲鳴は苦痛に苦しむ声色であった。悲鳴に驚いたツアレは身を強張らせリビングの中を見渡す、しかしリビングの中は何の変化も無くレオンがツアレの方を向いて立っているだけだった。

しかしレオンの方を向いたツアレは力が抜け尻餅を付いてしまう。ツアレが見た主は先程まで気を掛けてくれていると感じていた主ではなかった。

そこに立っていたのは瞳の輝きが消えた主。

「あ、ああ…」

そんなツアレを気にもとめず。

「なに、お前が恐れる事はない。屋敷に鼠が入り込んだただけだ、気にせず食事でもしているといい」

レオンは玄関へ向かって歩いて行く、その顔は薄ら笑いを浮かべていた。

屋敷に消えた男女を見送ってどれだけ時間が経っただろうか、周囲は薄暗くなり幻術によって姿が見えなくなっている男、ロツソは行動を開始する。

幻術によつて姿を消せると言つても、それは姿を消せるだけで気配や音までは消せない。よつて行動するときには周辺の状況などを確認して行動する必要があった。

「これだけ暗くなつてくればよほどの事じゃないと俺を認識できるやつは居ないだろう」

ニヤつく笑みを隠さずに、幻術によつて周囲からは見えてはいないが。屋敷の門を僅かに開け侵入を開始する。

「さーどの部屋でお楽しみなんですかねーどんなプレイしてるんですかねー」

当初の任務の事など忘れ下賤な笑みを浮かべ屋敷の窓を見渡しながら散策を開始する。

もし下賤な感情など無く任務を真面目にこなしていれば、オリハルコン級冒険者チームの実力者として周囲を気にして行動していた事だろう。

しかし、ロツソは目の前の建物にしか意識が向いていなかったが故に周囲の草が倒れていく事に気がつかない。自身の足音は日々の経験でたたない様に出来ている、だが、それでも僅かながら発生してしまう。しかし、草が倒れ近づいてくる何かの物音は一切聞こえてこなかった。

「んー2階の窓からは明かりが見えないな、1階でお楽しみなのか？ん？」

突如右腕が動かなくなる、腕の方へ顔を向けると手首は見えるが、肩下から手首までは何も見えなかった。

「え、な、!?!ぎゃあああああ!!?!」

突然右腕がロツソ自身の頭上よりも高い位置に『持っていかれる』、その瞬間右腕に感じた事のないほどの痛みが走る。

頭上より高く上がった右腕から血が流れ出し血しぶきがロツソの

顔へ飛び散る。

「があああああ?! いてええ!! なんだよ?! ああああ!!」

謎の痛みに悶えながらも右腕の見えない部分へ左手で触れるが何か大きな物で挟まれている事を理解する。

「なんなんだよお!!? くそ! くそ! すがああああ!」

必死に暴れながらも見えない何かを叩き外そうとするが、硬い何かを叩いている感覚は有るがソレが外れる様子は無い。

「がああ!! あああ! いてええ!! 「品の無い悲鳴だな」 あああ!」

ロツソは話し掛けて来た人物、レオンが屋敷の扉から出てきたことに気付いていなかった、いや幾らオリハルコン級冒険者だと言っても腕が鋭い何かと万力で挟まれたような力で押しつぶされれば周囲を気にする余裕など無いのだろう。

「これは! お前が仕掛けたトラップかあああ!!」

「トラップ: そうだな、まあトラップの一種になるんだろうな」

痛みに悶えるロツソを前にゆっくり考えるレオン、だがレオンが現れてもロツソを襲う痛みは緩むことは無い。

「これはずせ! はやく!」

「ん? なぜ? お前は俺が城を出てからずっと後を付け回していたじゃないか、何故そんなストーカーを逃してやらねば成らない?」

「お前、気付いていたのか!」

「アレではれないとでも? あの程度じゃ俺からは普通に丸見えだぞ」

ロツソは驚愕し顔色が悪くなる、自身の幻術が見破れたことなど一度も無かったのだ、それがこの男には丸見えだった? そんな事ありえるのか?

「なぜ、そんな、どうやって…」

「アイテムを使っているからな、姿を隠したいならカーディナルぐらいすることだ」

そういうとレオンは右手の指を鳴らす。

ロツソは自身の首後ろに生暖かい息が当たるのが分かった、右腕の痛みを原因を知るべく目を向けるとそこにあったのは赤黒い毛に覆われた巨大な獣に噛み付かれている右腕だった。

「な！なんだこいつわああ!?ひ!?顔が！顔が2つ!?2匹!?」

「ああ、余りやかましいと憲兵が寄ってくるかもしれないなサイレンス静寂これで問題ないな」

「お！おい！レオン・D・フアンション！この獣に腕を離すように言え！早く！」

「なんだ、俺の名前を知ってたのか、なぜストーリーカーのお前を助けるよいうなことをしなくちゃならない？」

「お、俺は！オリハルコン級冒険者！朱の雫のメンバーだ！国王の命でお前をつけていた！今なら水に流してやる！だから！早く!!」

最早自身が何を口走っているのか分かって居ないのだろう、この状況であれば敵であるレオンに所属、依頼主の事を言うなど本来であれば有ってはならないことだ。

「なんだ、最近のこそ泥は国王の遣いだ何ていうのが流行っているのか？普通に考えてみればあやしすぎるだろう？」

「違う！嘘じゃない！」

「どうやって信じ…どうした？食事をしておけと言った筈だが？」

レオンは扉の方へ振り向くと扉を開け怯えるツアレが居た、その顔は青白くなり恐怖で全身が震えているのが見て分かる。

「ツアレ、怖いのであればこんな所へ来てはいけない」

「は、はい、ご、ごめん、な、な、さい」

恐怖でまともに言葉を喋る事もできないのだろう。立っている事が奇跡とも思えるほどだ。

「はあ、カーディナル、こそ泥を逃すな、少し中へ戻る」

そう言々とツアレを抱きかかえると屋敷の中へと戻っていった。

「おい！まで！俺を助け!?!いがぎやああ!?!」

カーディナルにとつてロツソの発言は耐え難い物なのだろう、歯軋りする様に顎を動かすと牙が深く入り込み傷口が広がり激痛がロツソを襲う。

「やめ！助け!!!」

外から聞こえる悲鳴を無視し抱かかえたツアレをリビングの椅子へと座らせる。

しかし恐怖からなのか体の震えが止まる様子は無い、レオンはしゃがみ込みツアレの顔を覗き込む。しかしツアレはレオンを見ようとはしない。

「どうした、何故出てきたんだ？怖かったんだろ？」

「ご、ごめん、なさい」

「もうこそ泥もカーディナルも居ない、怖くないぞ？」

「ごめんなさい、ごめんなさい」

「落ち着け、なにが怖いんだ？」

「ごめんなさい、ごめんなさい」

「っち」

レオンはツアレの反応が変わらないことに苛立ちを覚える、最初は賊に、次はカーディナルに怯えていたのかと思ったが屋敷の中に入れても怯えが収まらないのでは話にならない。

「たく、魅了^{チャーム}…ツアレ俺の顔を見ろ」

今までの震えが落ち着きレオンの方へと顔を向ける。

「どうした？何が怖いんだ？屋敷の中には賊も魔^{カーディナル}獣も居ないんだぞ？」

「いえ、確かに賊も、獣も怖かったです、私が1番怖いと思ったのは別です」

「ん？それなら何が怖いんだ？」

レオンは考える、賊とカーディナルが怖くないと成れば他に何を怖がるモノが有るのだろうか、屋敷の中にお化けでも出たのだろうか。

「それは、レオン様の目が怖いのです」

「――」

レオンにとって何よりも予想しなかった返答であった。

怖い？自分が？なぜ？今までの行動で怖がらせる事があつただろうか？

「俺の…目が怖い？」

「はい、レオン様の私を見る目が怖いんです」

「それは……こそ泥を前にしていたからか？それとも俺が男だからか？」

「いえ、賊を前にする前よりも、それに下品な目をしていた貴族達などとは違います」

分らない、ツアレが何を言っているのか分からない。

「じゃあ何が怖いんだ？」

「レオン様は、屋敷に来るまで違和感を感じていました、でも、先程分かりました。それは、私を見ているときの目が、まるで人間では無い様に感じました」

人間ではない……汗が噴き出すのがわかる、それ以上の言葉を聴きたくない。

「どう、いうふうに？」

「まるでバケモノが人間を見ているように感じます」

ツアレの言葉が心の奥底に染込んでいくのが分かる。

「バケモノ……バケモノ……そうか、バケモノか」

レオンは立ち上がり天を仰ぐ、その顔は狂喜に満ち溢れていた。

「ふ、ふふふ！ははは！バケモノ！なるほど！なるほど！！俺は人間を辞めていたと言う事か！」

レオンは人間の見た目をしている。

「カルネ村でゴブリンやオーガを殺して罪悪感が無かったのはモンスタ―だったからではなく！」

ユグドラシルから転移し、自身の育てたキャラクター。レオン・D・ファンションがただ強かったのではなく。

「俺が今まで人間を殺して罪悪感を覚えなかったのはそういう事か！」

レオン・D・ファンションが人の見た目をしているだけに過ぎなかった。

「ラナーを助けるために男共と住人が死んでも罪悪感が無かったのは助ける為だったからでは無く！」

『レオン・D・ファンション』それは幻影の王

「帝国の兵を惨殺しても！戦争だったから仕方なかったでは無く！俺

が人間である事を棄ててしまったからだと言う事か!!」

人の見た目をしていても所詮それはただ『人の形をしているだけ』
「く、くくはははは！そうか俺は名実共にバケモノだったと言う事か
！」

そうレオン・D・ファンシヨンは、異形種である。

「こいつは傑作だ！ツアレ！俺が怖いか！」

「はい」

「そうか、ではどうすれば俺は怖くない？俺はどうすれば人間に戻れる…いや『人間を演じる』事ができる？」

ツアレは考える、人間を演じるなど考えたことが無い。

「…笑ってくださればいいと思います」

「笑う？俺は笑ったりしているぞ？」

「心から笑われていないように感じました」

「心から笑う…ああ、そういうえば戦争が終わってから心のどこかですれ違う連中、話す連中をゴミの様に思ってたな」

レオンの相手を見る時、無意識だが2つの感情あつた『興味が無いモノ』『自分の所有物』

「そうか、今のままじゃエンリに怖がられちゃうな、モモンガ君にも引かれちゃうかもしれないな」

レオンは笑うその笑顔は満面に喜悦の色を浮かべていた。

「なら俺は道化になろう、俺は幻影の王、幻とは偽りのモノ、ならば俺は全てを騙そう。この俺ですら騙してしまおう、ああ常に笑い続けよう」

「だからツアレ、俺を恐れるな、俺を見て笑え」

「はい、分かりました」

「お前は俺のペットモモノなのだから」

18話

レオンは目の前のツアレに魔法を掛ける。魅了チャームの魔法が解けた時にまた怯えられると面倒だと考えたからだ。

クリュプトンの能力でダブル・スマラグディナの能力を引き出しツアレの記憶の変更を行っている。

「ダブルさんの種ブレインイーター 族はこういつた時便利だな、記憶改ざんの魔法が低コストで出来る種族ボーナスが有るなんて。さて、何処から変更するかな？ やっぱりこそ泥の悲鳴が聞こえた時からいじつて：俺が椅子に座らせたら意識を失った事にするかな？ いや：魅了チャームの魔法を掛けた時の会話を一部覚えさせて：ん、こんなものか」

レオンはツアレの記憶を変更した後2階の部屋のベッドに寝かせ睡眠スリープの魔法を掛け優しい笑みを浮かべ頭を撫でる。

「ツアレ、俺は出来る限り守っている信条が有るんだ、『与えた恩は忘れよ、しかし受けた恩は忘れるな』俺はこれをできる限り実行してき たつもりでね」

レオンがこの言葉を知ったのはバーテンダーとして駆け出しの頃、大学の助教授を名乗る客の接客をしていた時だった。

『君若いのになんおじさんの相手しても楽しくないでしょ？ ごめんねー言い訳に聞こえる小さな授業をしてあげよう。『刻石流水』と言う言葉があつてね、これは仏教の教えの1つから来た言葉なんだけど。受けた恩義はどんな小さな事でも心の石に刻み、施した事は水に流す。という意味なんだ、でも今の世の中この言葉を実行できる奇特な人間なんて居ないよねーけれどこれも考え方を変えると『情けは人の為には有らず』と同じ物だと思ふんだよね。こんな世の中だけど、いい事をしてそのつど見返りを求めなければいつかは、つもりにもつて自分自身に戻って来るって事だと私は考えているんだ。だから君はこんなメンドクサイおじさんや酔っ払いの相手をして辛いかも知れないけど、いつか君自身に訪れる幸福の為だと思つて相手をしてくれると嬉しいな』

その男性は最後に、まあ酔っ払いのいい訳さ。と大笑いをしていた

がレオンにはその言葉が心に残り、出来る範囲で実行をしていた。

「だから俺は君に恩を返そう、でも俺は君の望む幸せは何か分からない。だから考えられる範囲で幸せを与えよう：君とはもう係わらない幸せかも知れないが」

そう言い残すとツアレが眠る部屋を後にする。

ツアレをリビングに連れて行った時は男の悲鳴が屋敷の中まで響いていたが今は静寂が訪れていた。静寂の中を歩くレオンは笑みを浮かべていた、それは喜びに満ち溢れる橋笑。

「さあ、彼らは何処に居るかな？つと悪い悪い、君の事をすっかり忘れていたよ」

レオンが屋敷の玄関の扉を開けると、そこには血溜まりの中でカーディナルに腕を噛まれ息絶え絶えな男の姿が有った。血が流れすぎたのだろう顔は血の気が失せ青白く生気が感じられない。

「おいおい、勝手に死ぬんじゃないよ。大治療^{ヒール}」

レオンが治癒魔法を唱えると男の顔に力が戻り顔を上げる、しかしカーディナルの噛み付いている部分は治癒魔法で直しても元に戻りはしない。よって痛みはなおもロツソを苦しめ続ける。

「あ、あああ…いったい何が起こったんだ？俺は死んだんじや？つつ!?くそ、まだ噛み付いてやがんのかよ」

ロツソは意識がはつきりし自身の置かれる状況を再確認する、しかし状況は何も変わらず何一つ好転して等いない。

「やあ、君には感謝しなくてはいけないね」

ロツソは声の方へ顔を向けると屋敷の中に消えて行った時とは別人のような笑みを浮かべるレオンの姿があった。

しかしロツソはその笑みに恐怖を覚える、先程は自身を虫けらのように見ていた雰囲気は一切なく、良い事でも有ったのか喜びを露にしている。

「君のおかげで早い段階でツアレの本音を聞くことが出来たよ、一緒に暮らしていればいつかは分かった事かも知れないけど何事も早いことに越した事はないからね」

ロツソには笑みを浮かべる男の言葉の意味が理解できない、しかし

そんなロツソを他所に言葉を続ける。

「だから君の命は助けてあげよう、喜んでくれていいんだよ？あぁ、ツアレには感謝しておくといい、言う所の命の恩人というやつなのだから」

そう言つてレオンはロツソの頭を掴み魔法を掛けていく。

「なに心配する事はない、君は屋敷の前で一夜を過ごす、今有った事、自身に起こった悲劇は何も覚えていない。君は屋敷内に入る前『日々の疲れで寝てしまったのだから』」

レオンはロツソを屋敷の外の茂みへ投げ捨てる。と王都の方角へと歩み始める、その笑顔はツアレやロツソへ向けていたモノとは違い狂気へ満ち溢れていた。その笑顔は喜びと苛立ちを感じさせるモノ。

「彼らは何処にいるのかな？…さて、最高のショーを始めよう」

19話

日も沈み日中の喧騒は鳴りを潜め明かりの漏れる民家からは家族団らんの声が、酒場であろう建物からは仕事終わりであろうか男達の陽気な笑い声が聞こえてくる。

そんな町並みを背に2台の馬車が数人の護衛を連れ王都を出立した。

1台の馬車は豪華な装飾が施され権力者で有ることを物語っている。しかしもう1台の馬車は商人や冒険者などが使用している荷物を運搬している荷車よりはマシであろう風貌である。まるで前を行く馬車の荷物が載っているかのようだ。

「リットン様、本当に宜しいのですか？この様な時間からご自宅に戻られるのは少々危険なのではないでしょうか？」

先を走る馬車の中には男が2人、ローブを羽織ったマジックキャスターの男が不安を隠せず主へ伺いを立てている。

「問題は有るまい、毎年であればこの時期は稼ぎ手を失った愚民共が野盗などを結成していたが、今年是我が国、特に王都の兵士や民に被害は皆無。賊になるような者共は居まい…わが領土の兵を失ったのは痛手だがコレが手に入った事を考えればそれも惜しくは無い」

主であるリットンはお抱えのマジックキャスターの不安など気にも留めず、今日手に要れたばかりのブレスレット^{戦利品}を腕に着けほくそ笑む。

「ところで、お前に聞きたい、ブレスレット^{コレ}は王国の秘宝に匹敵すると言っていたな、それこそ秘宝の価値は金額など付けられるような物ではないだろうが。しかしコレは別だ、一個人の所有物…あの場で鑑定したお前なら幾らが適正金額だと考える？」

「適正金額でありますか？そうですね…無効化できる回数は3回、そして無効化できる魔法の位は第五位階まで、そして見た事も無い見事な装飾…私個人としての見解は金貨三千枚…いえ、それでも足りないでしょうか」

金貨3000枚、その枚数は大貴族ですら即支払える枚数の粋を超

えている。基より魔法無効という能力が一度きりだとしても金貨数百枚は下らない、それが三回。

そして何よりも付加価値は『第五位階までの無効化』この内容は逸脱者であるマジックキャスター、フルーダ・パラダインの攻撃ですら無効にできると言う事を意味する。

「はーははーやはりそれ程の価値があったか、予想道理だ！お前が国宝クラスと言った瞬間にそれなりの価値は予想はしたが…まさかそれ程とは！」

自身が手に入れたマジックアイテムの価値を再確認し破顔する。

「で、では何故あの時金貨300枚と仰られたのですか？正直仰られた金貨の枚数に驚いてしまったのですが」

そうあの時マジックキャスターが驚いたのは国宝級だと言ったにもかかわらず、リットンの提示した金額は金貨300枚まで。吹っ掛けた金額にしても流石にどうかしていると思ってしまったのだ。

「ん？そんなの簡単だ、あの男は自分の手にしている物が国宝級だと言われたのに何の驚きも見せなかった、それは価値を知っている者が理解出来ていない愚か者のどちらかだ。そして国宝級のアイテムを城の中でしか生活していない姫…小娘にくれてやると言うのだぞ？ならば答えは一つ。価値を理解できない愚か者だと言う事だ」

あの瞬間リットンはレオンがどれ程のアイテム価値か分かっていないと予想し、少ない金額を提示したのだ。少ない利益で高価なものを手に入れる、それを実践しただけでしかないのだろう。

「な、なるほど。流石はリットン伯爵様、その様なお考えがあつての事だったとは考えもませんでした」

「はっはっはーコレが知者というものだ！しかし…私の後ろについて回ることにしか脳が無い者だと思っていたが、あの男もたまには使えるものだな」

リットンは自分達の後ろを付いて来ているみすばらしい馬車に乗る男の事を考える、事実リットンはレオンの要求であったメイドに関しては金貨一枚も係わっていない。言うなればタダ同然でブレスレットを手に入れた様なものだ。

「ふん…少しはあのみすぼらしい馬車では無くもつと良い馬車を借り、買うことができるだけの資金くらい出してやっても良いかも知れんな」

他の大貴族達より一步上に立てるであろうブレスレットを眺め、手に入れる切っ掛けを作った男にも何か褒美でも与えることを考えるのだった。

しかし良い事ばかり続かないのがこの世の摂理である、馬車の中に居る3人には当然気付く事が出来ず。周囲を護衛する兵士4人もこれから起こる惨劇など知る由も無かった。

「くそが！なぜこの俺の妾を奪われたと言うのにあのブレスレットが俺の手元に無いんだ！あれ程の…金貨数百枚の価値の物が有れば我が家とて大貴族に名を連ねる事も出来るかも知れないと言うのに！あー！くそが！」

今日はリットン伯爵が王都へ出向くと聞き、なにかおこぼれでも良いから少しでも良い思いが出来ないか、そして若いツアレ妾を連れて行き、リットン伯爵が気に入れば一晩貸し出すのを条件に金貨を手に入れないかと打算したのだが…

「俺のモノが無くなっただけで何も手に入っていないではないか！帰りには馬車まで違うなんて！くそ！六大貴族だからといって好き勝手しやがって！覚えておけよ！いつかお前よりのし上って見下してやる！…あ？馬車が止まった？」

イーノが乗っている馬車の内装は外観同様設備が整っておらず、車輪の振動は直接伝わってくるような物だ。故に大きい石に乗り上げれば中に乗っているイーノが宙に浮くこともある。

「何をやっている！早く出さないか！」

苛立ちを隠そうともせず中から馬車の御者へ怒鳴り散らすも返答が一向に聞こえない。

「なんだ？何か有ったのか？もしや野盗か!?お！おい！護衛の者は何をやっている！私を守れ！」

馬車の中からでは外の様子は窺えない。いや、そもそも確認出来た

としてもこの男は自身で確認するような事などしないだろう。

馬車が止まりイーノは不安に駆られるが馬車の扉が軋む音を上げゆっくりと開く、そこには王国の鎧を着ているが黒い外装を纏った男が立っていた。

イーノは護衛の兵にこの様な見た目の男が居たか考えるが、そもそも護衛の兵など気にして見ていなかった為、思い出すことが出来なかった。

しかし、目の前に立っている男は王国の鎧を着ている、ならば貴族で有る自分より格下の者であると判断する。

「おい！貴様！誰の許しを得てこの俺の前に立っている！何故馬車が止まったのだ！？早く説明せよ！」

イーノの言葉に答えるように鎧を着た男は腰に刺していた剣を抜いた、その刀身は返り血で赤黒く輝いていた。

「ひ！？な、何をしている！？俺は貴族だぞ！お前達のような兵士が冗談で剣を向けて良い相手じゃないんだぞ！」

威勢よく兵士へ向かって吠えるも逃げ場を求め後ずさるもここは馬車の中、扉は一つしかない、後ろに下がった所でもう早逃げ場など無かった。

「やめ、来るな、来るな！」

目の前の男が剣を構え喉元へ突き刺す。場所が狭い室内だが振り被らず自身の勢いを乗せた突きにイーノの首は成すすべなく下へ落ちて行った。

「何が起こった…なぜ馬車が止まったと言うのに御者も護衛の兵も何も言っ来ない」

前を走っていた馬車の中でも違和感に気付きマジックキャスターの後ろに隠れるリットン、マジックキャスターの男にとっても今の状況はけっしていい状況ではない。

本来マジックキャスターは前衛が居て相手との距離をとった状態での戦闘を主に得意とする、これほど狭い室内で、それも相手との距離や位置が不明な状態では下手に魔法を発動することなど出来ない。

「くそ！何がどうなっている！おい！早く周囲を確認して…いや！やはり私の元から離れるな！まだここは王都からそれ程離れてはいないはずだ！何か異変があれば見回りをしている兵士や冒険者が気付くかも知れん！」

王都から近ければ確かに異変を察知して兵士達が駆けつけてくる可能性も有るだろう。しかし、それは王都の兵士達から確認できたらと言う事でも有る。既に日は落ちて静寂と暗闇が周囲を覆いつくしてしまっている。

「リットン様、周囲を確認しなくてはこの状況は打破出来ないかと思えますが」

「ばかもの！もし賊が我々を出てくるのを扉の前で待っていたらどうするのだ！」

「しかし…リットン伯爵！お怪我はありませんか!？」ここだ！我々は無事だ！」

「失礼致します！」

そう言つて扉を開け入ってきたのはフードを深く被つた王国兵だった、外装や中に見える鎧には所々返り血が付いている。

「此方へどうぞ、賊によって馬が殺されており護衛の者も殺されてしまいました、私が何とか追ひ払つたので今の内に王都へと帰還しましょう！」

「よ、よし！よくやった！では追つ手が来る前に逃げるとしよう！」

「で、ですがリットン様！イーノ様は!？」

「知つたことか！早くしなければ我々も殺されてしまうかも知れないのだぞ?!」

「残念ながらもう一台の馬車に乗られていたイーノ様はもう…」

兵士の言葉で全てを理解し2人は急いで馬車を降り王都の明かりが見える方角へと走る。

兵士が夜道を先導し走っているがマジックキャスターの男にはどうしても腑に落ちない事があつた。

目の前の兵士は賊を追い払つたと言つたがそれにしても音が聞こ

えなさ過ぎたのだ、確かに馬や護衛の者が何者かによって殺されていたが、兵士4人、御者2人、そしてイーノの計7人を殺したと言うのに音が一切聞こえてこなかった、いくら六大貴族の乗る馬車と言っても周囲の音が聞こえない事等有り得ない。

マジックキャスターはリットンの近くへ寄り疑問を告げることにした。

「リットン様、やはりあの男どこかきな臭いのですが!？」

前を走る兵士が突然踵を返したかと思うと手に持っていた剣を投げつけてきた、咄嗟の出来事に判断が遅れ剣先はマジックキャスターの胸を貫いていた。

「あつが、お逃げください」

リットンには何が起こったのか分からなかった、突然前を走る兵士が振り返ったかと思えば横を走っていたマジックキャスターに剣が刺さり息絶えた。

何故自分がこの様な目にあわなくてはならないのか、今日は国王からエ・ランテルで失った兵の弔いとしての報酬を貰い、レオン・D・ファンション男からと高価なアイテムを実質タダで手に要れて良い事尽くしだったというのに!なぜ!

「お、お前の望みは何だ?金か?金ならやるぞ?ほら!金貨が50枚は入っている!これだけあれば好きだけ遊べるぞ!」

男の前に金貨の入った袋を投げ捨てる、男はその袋を拾いリットンの方へと歩き始める。

しかしリットンは金貨50枚を与えれば見逃してもらええると思つたのだから、近付いて来る兵士に怯え元来た方向ではなく森の中へと逃げ出す。

「くそー何故だ!?何故私こんな目に合わねばならない!」

後ろを振り返らずただ闇雲に森の中を駆け抜ける、後ろから兵士が追ってきているのかなど分からない、だが何が何でも生き延びたかった、あの場所から逃げたかった。

「なに!ギヤー!いつつ…は!」

闇雲に前だけを見て走っていた為に足が絡まり勢い良く転倒して

しまった。後ろを振り返るとそこには先程の兵士が剣を抜いて立っていた。

マジックキャスターの血だろうか、月明かりに照らされ剣先から血が滴り落ちるのが更に恐怖心を煽る。

「ひー来るな！来るな！」

兵士はゆつくりと近付いて来る、死を覚悟し下半身が生暖かく濡れているのが分かる。

そんな時、遠くの方から声が聞こえてきた、偶然にも城門の上で見回りをしていた兵士が悲鳴に気付きやって来たのだ。

その声に気付いたのはリットンだけではなく、兵士も歩みを止め声の聞こえる方角を眺めていた。

「は、ははー！これでお前もおしまいだな！おい！ここだ！私はここに居るぞ！助けてくれ！」

「っち」

リットン安堵し傲慢な態度に苛立ちを覚えたのか舌打ちをすると逃げるのではなく、手に持っていた剣を両手で頭上へと構えた。

咄嗟に頭を庇う為に両手を前に出すも、兵士は躊躇無く剣をリットンへと振り下ろした。

「ひー…あ？ああ！腕が、腕があああ!?!」

振り下ろされた剣はリットンの左腕を切り落とした。

兵士は切り落とした左腕を拾い、腕についているブレスレットを外し奪い取って行く。

「まてえ！それは、それは私のものだああ！」

痛みに耐え地面にのたうちながらも兵士を見上げる。

そんなリットンに止めを刺すべく剣を振り被ろうとするも、救援にやって来たであろう兵士の足音や声が近づいてきた。

目の前の兵士は声のする方角を見ると流星に状況が悪くなってきたのかりットンの方を一瞥すると急いで森の奥へと走り去って行く。

その瞬間フードが捲り上がり男の素顔が月明かりに晒される事となった。

「な!?アイツは！そうか、そうか！覚えておけ！必ずこの苦しみは返

してやるからな！」

王都から駆けつけた兵士達が見たのは傷口を押しさえ不適に笑う
リットン伯爵であった。

20話

目を覚ますと其処は初めてみる景色だった、窓には木が打ち付けられておらず朝日が眩しく、背中が痛くなる様な硬いベッドではなく村で暮っていた時よりも軟らかいベッド。

「ここは…」

寝起きのせいか思考が上手くまとまらない、どれだけ眠っていたのだろうか。とても長い時間眠っていた気がする、その証拠に身体がとても軽く感じる。

「そうだ、私は昨日新しいご主人様に引き取られて。ご飯を作っていただけで…あれ？ご飯を目の前にして眠ってしまった!？」

見た事も無い食事を目の前に驚いたのか気が緩んだのかは分からないが、そこから記憶が曖昧だ。

「あれ？何かご主人様とお話した気がするけど…じゃなくてご飯の支度をしないと！」

自分はメイドとしてこのお屋敷に引き取られたのだ、そのメイドが呑気に眠っているなんて…怒られてしまう!

慌てて部屋を出て階段を下りて行く、ツアレは急いで階段を下りるも自身の衣服に乱れが無い事に気づく、身体にも眠っている間に何かされた様子は無い。

「何もされてない？やっぱりあのご主人様はお優しい?」

食卓で眠ってしまった自分を2階まで運んでくださって、それにどこも犯されていない…

階段を降りるとリビングから昨夜と同じで食欲をそそる香りが漂っている。

もしや昨日と同じで主が食事を作って居るのではないのか、ツアレが焦り部屋を覗くとそこには昨夜のまま代わらない豪華な食事が並んでいた。

しかし並べられた料理は一晚経ったにもかかわらず出来立ての様な暖かさを保っている。

もしや自分はぐっすり眠っていたかと思っていたがそれ程時間が経っていないのか？そんなことを考えているとリビングの奥、キッチンからレオンが新たな食材を持って姿を現した。

「やあツアレ、昨日はゆっくり眠れたかな？」

「え？あ、は、はい！とても良く眠れました！」

目の前に現れたレオンの雰囲気戸惑う、昨日とはまるで別人のような雰囲気ツアレへと微笑んでいる。

「それは良かった、寝心地が悪かったと言われたら新しい布団を買ってこないといけないところだったからな」

レオンは軽口を言っているつもりなのだろう、しかしツアレは昨日とは違うレオンへ戸惑ってしまい上手い返しが思いつかない。

「い、いえ、そんな、その、そこまでして貰う分けには!?!」

「ん？ふふ、ただの冗談だよ。ツアレは可愛いな」

そう言うとレオンはとても優しい笑みを浮かべ、手に持った料理を机へ並べていく。

「ご、ご主人様！お食事でしたら私が用意します！」

主人に働かさせている状況を理解し急いで仕事を変わろうとする。昨日も同じ会話をした記憶もするが。

「気にする事はないよ、昨日作った料理を温め直してただけだよ。それにこの料理で最後だ、さあ食事にしようか」

ツアレを食事が並ぶテーブルの椅子を引き座るように促していく。

主の行動に困惑しつつも引かれた椅子へ座る。

「さあ、おあがりくださいな」

ツアレの向かい側に腰掛けると笑顔を浮かべ、ツアレへ食事をする様に促す。

しかし主よりも先に食事をするメイドが何処に居るのだろうか、そもそもその食事すらもメイドではなく主が作ったという時点で少々おかしいのだが。

「そんな!?!ご主人様より先に食べるなんて出来ません！」

「そんな事気にしないので良いんだよ？それに俺はもう食べちゃったから気にしないで」

そこまで言われて食べないのは失礼なのかもしれない、そう思いつアレはスープへとスプーンを沈める。

「い、いただきます…!?!」

口にしたスープは今まで食べた事がないほど甘く優しい味がした。「おいしいーおいしいですー!」

あまりのおいしさにレオンに見られている事など忘れスープを口に運んでいく。

「ふふ、それは良かった。さてと、俺はお姫様の護衛が…仕事があるから出かけて来るよ。すまないけどご飯を食べ終わったら食器を洗っておいて貰えるかな?その後は適当に掃除でもしておいてくれると嬉しいな」

レオンは席を立ち困惑するツアレを他所に扉へ向かう。

「あ、そうだ、昨日は番犬が襲うかもって言ったけど、もう屋敷を出ても襲わないように言い付けて有るから安心して出ていいから。でも門の外へは勝手に行かないようにね?」

それじゃあ言うてくるよ。笑顔でリビングを出て行き、玄関が閉まる音が聞こえた。ツアレは自分の置かれた状況に思考がつかずレオンが出て行った扉を眺めていた。

朝から城内は慌しい喧騒につつまれていた、もともと城内には子供が数多くいるような場所ではないので、このような状況になる事など戦争が近づく時だけだ。

しかし、すでに毎年行われる帝国との戦争はレオンの、王国の勝利によって終わりを迎えている。

そんな喧騒を横目に2人の城内の専属メイドは掃除をしている。

「今日はなんだか慌しくない?なにかあったのかしら?お祭りでも始めるのかな?」

1部の貴族達の間では『今回の戦争は圧倒的な勝利を収めた王国の兵力を大々的に周辺諸国へ知らしめる為に凱旋パレードでも行うのは如何ですか?』それは良い考えですな、勿論貴族や国王陛下の力

を民に再認識させる良い機会でありますな』などと言っている者達がいるのだ。

戦争に参加したのはたった一人だというにも拘らず。

「そんな訳無いでしょ…貴方知らないの？昨日の夜リットン伯爵が襲われたって話」

「え!?なにそれ!?リットン伯爵って昨日私達に話し掛けて来た貴族でしょ?」

「そのリットン伯爵で合ってるわよ…なんでも一緒に居た貴族と護衛の兵士達は殺されたって話よ」

前日の夜の事件だというのに、既に城内では『六大貴族が襲われた』という話題で持ち切りだ。

貴族が襲われたとあつてか城内には殺伐とした空気の漂っていた。

「うわー貴族、しかも六大貴族襲うって…よつぽど大人数の野党だったのね」

「それがそうでもないらしいのよ、さっき聞いた話だと襲撃したのはたった1人だったらしいわ」

「1人!?凄いわね、あれ?そういえば一緒に居た兵士達は殺されたってことはリットン伯爵は殺されなかったってこと?」

「なんでも殺されそうになった時に見回りの兵士達が駆けつけて助かったらしいわ、でも襲撃犯は逃げていったらしいけど…その襲撃犯が問題らしいのよ」

「なになに?犯人が分かっているの?」

「伯爵が襲撃犯の顔を見たらしいのよ、それでその犯人て言うのが「おはよー」おつおはようございます!」

2人は会話に夢中に成り過ぎていたのか、後ろから歩いてきた男レオンの存在に気付かなかった。

「おはよーございます、今日も良い天気ですね。」

「こ、これはレオン様、いかが為さいましたか?」

「いえいえ、歩いていたら丁度お2人が見えたもので。では俺はこれで失礼します、お仕事頑張ってください」

そう言い残しメイド達に頭を下げ笑顔で去って行った、その後姿に

信じられないものを見たかのように呆然と立ち尽くしてしまふ。

「ず、随分と機嫌が良かったわね…何か良い事でもあったのかしら？」
「さあ？」

なにやら朝から城内が騒がしい、何があったのか気にはなるけどまだ誰もこの部屋を訪れない。メイドでも来たらそれとなく聞き出すのだけだ…。

「でも朝一番にお会いするのはレオン様が良いわ、でもそうなるレオン様にこの喧騒の原因をお教えできないし…」

できればレオン様がいらっしやった時に『今日は随分と城内がやかましいな、なにかあったのか？』『なんでも——らしいです♪』『へー成る程な、やっぱりラナーは物知りだな。いいこいいこ』『ああ、そんな、レオン様に褒められて嬉しいです♪』

ああ、レオン様のお役に立てば頭を撫でてもらえたり…もつともつとお役に立てばあんな事やこんな事もして頂けるかもしれない…。

そういえばレオン様は昨日メイドを連れて帰られて…屋敷の中に2人つきり…なんて羨ましい！若い男女が2人つきりで周囲の目が無い状況なんて！やっぱりレオン様は陰の有る娘の方が好みなのかしら!?

「私もレオン様と2人つきりになったら…レオン様から手を差し伸べて下さるかしら」

やはりメイドも排除すべきかしら？でもレオン様があんな娘を気に入っているのですから無理に排除するのは好ましくない？まあレオン様の素晴らしさが理解できたら2人仲良く。

どうやって一緒になるのが好ましいかしら？でも一緒になるにはレオン様や私の障害になるものはすべて排除しなくては。

「ああ、レオン様はいつ来られるのかしら」

「やあラナー様、今日も可愛いね」

「え？あ、有難うございます♪」

ノックをして入ってきたレオン様は昨日までとは別人の雰囲気だ

した。

「ど、どうかしたんですか？」

「ん？なにが？」

「いえ、何と言えればいいんでしょうか？どこか昨日までのレオン様と違うと言いますか？」

レオン様である事は代わらない、それは間違いない断言できる。だけど昨日までの落ち着いた雰囲気とは違う、初めてお会いしたときの雰囲気は何処と無く近い気もしますが…ああ、でもレオン様に可愛いと言って頂けるのは良いですね。とても良いです。

「ああ、少し落ち着きすぎていたかな？んー少し違うかな？まあアレだよアレ」

「どれでしょうか？」

「辛いなー賢いラナー様なら分かってくれると思ったのに、ラナー様でも分かんないかーショックだなー」

そう言うレオン様は悲しんでいる様子は無く、優しい笑顔で笑ってくださいる。

ああ、そんな笑顔も出来たのですね、その笑顔に向けて頂けるだけでラナーは幸せです♪しかし『ラナーなら分かる』と言われてはその期待に応えねばなりませんね！

「んーなんでしょうか、朝良い事がありましたか？」

だめだ、これでは大雑把に言い過ぎた。落ち着きなさいラナー。

「そうだね、いい事はあったよ？けどもう少し具体的に言ってもらえるかな？」

やはり良い事はあったのね、そうなるよ…

ご飯がおいしかった？違う、そんな事でここまで喜ばない。

何かお金になるビジネスを見つけた？違う、大金を貰ってもレオン様はクールなままでした。

となると…あのメイドが思いの外可愛かった!?相性が良かった!?いえ、そんな、そんな事…レオン様の1番は私…そう私なの。

「もしかして昨日連れていらっしやったメイドさんと何かありましたか？」

ああ！聞いてしまった！何かあっても咎める事なんてできないのに！全てはレオン様のモノなのに！

「へえ、さすがラナー様！何でもお見通しですね」

やはりメイド絡みでしたか：でも。一瞬お見せになった表情、アレは紛れもないレオン様が時折見せるモノでした。

「いやー昨晚ツアレと色々と話してね、その結果俺はイメチエンでもしようかなって思った次第なんですよ」

「イメチエン？ですか？」

「あー、ラナー様はイメチエンが分からないかな？イメージチエンジ略してイメチエン、最近のナウイヤングにバカ受けてやつですよ」
なうい？やんぐ？一体何の事でしょうか、私の知らない言葉。一体どのような意味なのでしょうか。

「それは一体どういった事なん「失礼致します」はい、どうぞ？」

っち、レオン様との一時を邪魔するなんて。

扉から入ってきた兵士はレオン様を横目で確認すると私の方へと向き合った。

今レオン様を馬鹿にしたわね、隠しているつもりでしょうけど分かります。

殺す、絶対に殺す。貴方の顔は覚えました。貴方の顔なんて覚えたくないけどレオン様を蔑む様な者は忘れません。必ずその行動がどれだけ愚かだった分かせてあげます。

「失礼致します、国王陛下がレオン・D・ファンシヨン殿をお呼びとの事で参りました」

お父様が？ああ冒険者を使つてのレオン様の身辺調査ね、まったく愚かにも程が有るわ。

なにより私とレオン様の時間を邪魔するなんて。

「はいはい、りよーかいしました。今行きますよ」

ああ、レオン様が行かれてしまった。レオン様から新しいことを教えていただけるチャンスだったのに。まあ言いわ、レオン様の代わりに2人のメイドが入ってきた。

ならこの2人に今の城内の様子でも喋ってもらいましょう。

「失礼しますラナー様、レオン様がお戻りになられるまで入り口の外に2人、そして私達2人が警護としてお傍に控えさせていただきます」

「まあ、4人も私を守ってくださいるのですか？何かあったんですか？」
「そうなんですよ、実は今朝「こら、よしなさい」ああ、申し訳ありませんラナー様」

1人はおしやべりなのね、もう1人もたしなめてはいるけど何度も横目で私を見ているから、あれも喋りたくてうずうずしてる感じね。
「いったいなんですか？気になつてしまいます」

「い、いえ、ラナー様のお耳に入れる様なお話では「教えてくれないんですか？」いえ、それは…」

「良いじゃないですか、ラナー様も知っておいて損はないんだし」

「ま、まあ常に護衛が居るし、ラナー様も知っておいてもいいかしら…」

ちよろいわね、ここまで簡単に話してくれるなんて。やっぱりメイドは情報を仕入れるにはもってこいね、たまに役に立たないけど。

「早く教えてください、気になってしまいます」

「ええ、実は…」

昨夜リットン伯爵が自分の領地に帰る途中、何者かに襲撃される事件が発生。

リットン伯爵の護衛を含めた計8名が殺害される。

リットン伯爵は勇敢にも賊に立ち向かうも負傷、なんとか森の中に逃げるも賊の追撃にあい左腕を負傷する。

しかし、リットン伯爵と賊の戦いの音を聞きつけた王国兵達が現場に駆けつけると賊は逃亡。

その際リットン伯爵は賊の顔を見ることが出来た。

リットン伯爵の証言から浮上した犯人はなんと、王城内を警邏する兵士で有ることが判明。

兵士を拘束し、兵士の自宅内を調べるとリットン伯爵が盗まれたと言う金貨50枚とブレスレットが発見される。

これによって兵士は六大貴族であるリットン伯爵を襲撃した犯人として朝の内に死刑が執行される。

最後まで自分は犯人ではない、襲撃などしていない、金貨やブレスレットなんて知らない、自分ははめられたと言いつづけた。

リットン伯爵が襲撃された？ たった1人の兵士に？ そんなことあるのか。

でもリットン伯爵の所有していた物が自宅から出てきて物的証拠となった。

と言うかりットン伯爵が賊と戦ったというのはリットン伯爵^本の嘘ね、あんな男が戦えるわけなど無いでしょうに、バカでも分かる嘘をつかなくてもいいものを。

：死ななかつたのは残念だけど、レオン様の所有物を奪い不快にさせた報いとしてはまあ及第点の苦しみでしょう。

レオン様を見下し、不快にさせる者に相応しい苦しみを与えてくれた何処の誰か：褒めてあげます、良くやったと。

21話

幸せの形は1つではない、幸福とは向こうから来るものではない。では幸せとは如何にして手に入れるのか、幸福を手に入れるには何をなせばならないのか。

些細な幸せであれ幸福であれ手に入れるのはその者が行動した結果なのだ。

そう、その者にとってはささいな行いだっただとしても。

目を覚ますと暖かい日差しが窓から私の顔を照らしていた。

「んーいたた、やっぱり椅子で寝てしまうと身体が疲れてしまいます」
 昨晚レオン様が帰ってくるのを待っていたけど寝てしまったのね、普段レオン様は遅くなる時や帰られない時は言ってお下さるのだけど昨日は何も仰っていなかったから帰って来られるものだとばかり思っていました。

「珍しい事も有るんですね、レオン様が連絡無しの外泊なんて」

レオン様はお城に泊まれる時やカルネ村に出かけられて帰りが遅くなる時は出かけられる時や、わざわざ一度屋敷に帰って来られて言ってくくださる。

以前何故そこまで報告してく下さるのか理由を尋ねると『え？だって前もって知ってれば俺の帰りを待って起きとく必要無いだろ？気にせずゆっくり寝れる方が良くに決まっているからな』と仰られてしまいました。

「何度考えてもメイドにする気遣いではないと思うのだけど」

町に買い物をしに行く別の屋敷で働いているメイドと話す機会が有るがいかにも自分が恵まれているのかが分かる。

「さあ、レオン様が帰ってくる前にお掃除しておかないと」

自分がこの屋敷で不自由なく暮せているのはレオン様のおかげなのだ、なので身の回りの事はしっかりと世話させて頂かなくては

けない。

「そういえば最近はカルネ村にも連れて行って貰ってないけど、エンリにネム元気にしてるかな？」

レオン様がカルネ村に行く時、私も連れて行って下さる。妹には伯爵に連れられてから会えてない、レオン様が昔1度だけ村へ連れて行ってくださった事があったけど、その時にはマジックキャスターを名乗る人物が妹を教育すると言って村をつれて出て行った後だった。

自分の妹には会う事ができなくなってしまったけれど、レオン様が連れて行ってくださっているうちにエンリやネム、村の子供達が慕ってくれている。悲しく無いと言えば嘘になるがけして寂しくなどは無い。

「次に行くときはまた新しいお菓子を作って行ってあげよう」

「それはいいな、皆喜んでくれるよ」

「ひやああああ!？」

先程まで誰も居なかった向かいの椅子から突如声が掛かる。リビングにはツアレしか居なかった、しかしそれは居なかったのではなく見当たらなかっただけ。

「レオン様！帰ってらっしゃるなら言ってください！」

「いやーツアレの寝顔があまりにも可愛かったからつい観察してしまっただ」

姿は見えないがツアレが声のする方向へ抗議の声を上げる、そこには先程まで居なかったレオンが姿を現した。

「何度もお願ひしているじゃないですか、不可視化の魔法を使ってまだ驚かさなさいください」

レオンは事あるごとバーフェクト・アンノウアブルに完全不可視化を使いツアレを驚かすのが楽しみになっているのだ。ツアレも顔を紅くし抗議をしているが本当に嫌がっているようには感じられない。

「もう…レオン様何かとても良い事があったんですね？」

「ん？分かるかい？」

「はい、とても嬉しい事があったんだと思いました。」

レオンはツアレの言葉に驚き破顔する、自分の行動は普段と変わら

ないはずだと思っていた。しかしツアレは僅かな雰囲気の違いを感じ取ったのだ。

「そっか、実は友人に出会えたんだ。前に話したことの有る友人と！10年ぶりに！さいっこうに嬉しかったんだ！」

ツアレは10年間これほど、椅子から立ち上がり有頂天になって喜ぶレオンを見たことが無かった。よほど嬉しかったのだろう、その姿を見るだけでツアレの口元も綻ぶ。

「それは素晴らしいですね！では今日はお祝いですね！」

ツアレはレオンが友人たちと再会するために色々と調べカナルネ村に行ったり、帝国にこっそり行っているのを知っている。そんな姿を見ている為友人と再会できたと言うのはツアレにとってもとても喜ばしい事でもあった。

「あーもう！ツアレは可愛いな！本当に可愛いな！」

レオンはツアレを抱きしめ頬ずりをした。

「それじゃあラナーのところに行ってくるよ、実は昨日護衛の仕事ほったらかしたままなんだよ」

笑っているが普通に考えればあり得ない事だ、護衛の任についている者が主の元を離れ朝帰りなど前代未聞だろう。

「そ、それは駄目ですよ！ラナー様に怒られてしまいます！お祝いの準備は私の方で用意いたしますから早く護衛に戻らないと！」

「やっぱりまずいかな？まあツアレがそう言うなら戻るとするか、それじゃあいつてきまーす」

転移の魔法で一瞬にして城門まで移動するのはレオンの日課のよいうなものだ、たまに屋敷から歩いて来る事も有るがそういった時は買い物に行くツアレとの散歩が主な意味合いだろう。

本来ならばラナーの部屋の前まで転移してしまえば早いのだろうが転移先は毎回城門の前としている。理由は簡単だ、ラナーの部屋の前まで転移してしまうとレオンが仕事をしていないように見えてし

まう。人間というのは過程を重要視してしまう傾向が有る、レオンが
いかにラナーの横で護衛の任務を全うしていても貴族、一般の兵士、
メイド達には城門を通ってラナーの部屋に向かうのを見なければ王
城に来ていないと見なされるのだ。

故に經由地を作り城門から歩いて仕事をしに来ているというパ
フォーマンスを強いられるといった現状だ。

「しっかし今日も平和だねえ、カルネ村^{あつち}では戦士長が戦ってたって言
うのに王都^{こっち}じゃ普段と変わらない日常、まあTVもラジオも無い世界
じゃ当たり前なだけだね」

この世界に転移してきて10年も経てばそれが当たり前だと理解
しているのだが、モモンガと出会えたせいかな普段の慣れた日常がどこ
か不思議に感じてしまうのだろう。

「これはレオン殿、今日もラナー殿下の護衛ですかな？」

「ん？これはこれはリートン伯爵じゃないですか、御元氣そうでなに
よりで」

レオンが城内を歩いていると後ろから声を掛け左手を上げ親しそ
うに近寄ってくるのは

六大貴族のリットン伯爵だった。

「ええ、おかげ様で普段の生活がとても充実したものになっておりま
すので：とところで、次に作られる作品はお決まりなのですかな？」

次に作る作品、レオンが貴族相手に商売、もといぼったくっている
ガラス細工のことだろう。昔は今もリットンの左腕で輝いている
魔法アイテム^{ブレスレット}を作って売りつけようとしていたのだが、レオンにとつ
てはゴミアイテムだがこの世界では一級の扱いを受けてしまう。そ
んなアイテムを無造作、無作為に大量に売りつけていたら良からぬ噂
や手に入れた情報も手に入らない可能性を考慮し、現地で手に入る
ガラスをスキルで装飾品として売りつけ小遣いを稼いでいる。

「んーまだ決まっては無いかな？アレを作るときは数日屋敷に籠って
作りたいもんでね」

勿論嘘だ、形を思い浮かべてしまえば一瞬で作れる。それをしない
訳は一つ一つに希少価値をつける為だ。

「そうですか、それは残念です。また素晴らしい作品が出来上がった折にはぜひご連絡を頂きたいと思っています」

「そう言ってもらえると俺としてもがんばろうと思えますよ」

「ところで明日私の領地へ帰ろうと思っっているのですが、宜しければ護衛として来て下さらないでしょうか？ 勿論報酬はお約束します」

リットンとしてはガラス細工よりも護衛として雇い入れたいというのが本音だ。10年前に襲われてから護衛の数は倍に増やし、王都に出向く用があれば毎回レオンに打診している。レオンも休みが合えば報酬目当てに引き受けていた。

リットンはその成果あってか早い段階でレオンからわざと名前を間違えて呼ばれる仲にまでなったと思っっている。

これはリットンにとつて、リ・エステイーズ王国の戦力ナンバー2が貴族派、ひいては自身の駒として動かせる可能性が出てきたのだ。これほど嬉しい事は無い、国王派には王国戦士長が居るがその戦士長と剣を交え拮抗した存在が貴族派（こちゅうへい）に付いているのは強みとなる。

「あー申し訳ないが明日は1日ラナー様の護衛となっっているのでご遠慮しておきますよ」

名前を間違えるのは本当に交友関係が築けたからなのだろうか？

「そうですか、それは残念です。また機会があれば是非ともお願いします、王国ナンバー2の貴方が護衛に付いて頂ける時ほど安心して帰れる時はありませんから」

「ええ、またの機会があればよろしくミトン伯爵」

それはお互いのみ知ることなのだろう。

扉を叩く音が聞こえる、力強く、しかしどこか繊細なノック音だ。

この音を出すのはこの国で1人しか居ない。

「どうぞ」

「失礼しますよ」と

やはりレオン様です、ああ、いつも微笑みかけてくださるお顔と少し違います。これは良い事があつたに違いない。昨日申し上げた事

が的中したのだろうか、ならばきっと…

「おはようございますレオン様」

でもそれを聞くことはしない、そんな事をしては私が言わせているようになってしまう。こういうことはレオン様ご自身の気持ちで言ってもらうことに意味が有るのだ。

「おはようラナー、まずは謝罪をさせてくれ。すまなかつた警護をする立場にありながら任務を放棄してカルネ村に向かったことを」

ああ、レオン様が私に頭を下げられている。こんなこと滅多に体験できません、ああ…こういうのも悪くは無いかも知れないけれど。

「そして有難う、君の言った通りの出来事になったよ。戦士長を目的とした謎の集団にカルネ村が襲われていた…ラナーが教えてくれたおかげで村の被害を最小限に抑えられたと思う。本当に有難う」

きっと何人かの村人は亡くなられたんですね。

「まあ、それは良かったです。レオン様が大切にされている村の方々が亡くなられたのは辛いことです」

「ラナーが今回の貴族派の企みを見抜いてくれたおかげだよ。本当に有難う」

ああ、レオン様が頭を撫でてくださってる、とても優しく、どこか悲しさを感じさせる力。

「まあ、そんな強い方がいらつしやるんですね！その方はきっとレオン様と同じくらい強い方なんでしょうね」

レオンはカルネ村で起こった戦いのあらましを説明していた。始まりは昨日ラナーがレオンに王国戦士長抹殺計画と言うものが貴族派によって進められていると言う事を教えられた事が始まりなのだ。レオンにとってガゼフの抹殺よりもカルネ村周辺の村を使っておびき出すという事の方が重要だった。ラナーの許可を取り転移門ゲートで急いでアルカディアと共にカルネ村に向かうとエンリに剣を向けている場に間に合ったというわけだ。

「ああ、あの旦那のおかげでカルネ村や戦士長は助かったといっても過言は無いと思うよ」

「そんな事ありません！きつとレオン様1人でも悪党を退治できていたに決まっていますよ！」

「はは、もちろんさ、俺は強いからね。俺1人でも問題なかっただろうね」

話が弾みレオンはここで言うしかないと理解する、紛いなりにも自分はラナーによって王国で仕事を得ていると言つて間違いない。ならばこの願いを、我俣を通すのはラナーの許可を得なければならぬ。

「それで昨晚カルネ村からの帰り道に再会できたんだ、10年ぶりに友人に」

「…まあ！それは本当ですか!?おめでとうございます、レオン様がずっとお探しになられていました方ですね!」

ラナーは一瞬驚いた顔をしたがレオンの嬉しそうな笑みを見るとまるで自分の事のように破顔する。

「有難う、これも全てラナーのおかげだよ」

「ちがいます、レオン様がずっと探されていた努力がついに実ったんですよ♪」

「そうかな、そうだといいな…それでラナーにお願いが有るんだ。勝手なお願いだという事は重々承知している…護衛の日数を減らしてはもらえないだろうか」

「…理由を聞かせて頂いても宜しいですか?」

「友人は最近こっちの方へ来たばかりらしくてな、取り合えず暮していくために冒険者を始めようという話になったんだ、その話をしているとまた一緒に冒険がしたくなつてな…勿論ラナーの護衛を疎かにするつもりは無い、俺が居ないときはアルカディアを付ける事を約束する。だから…どうかな?」

「はい、大丈夫ですよ♪」

「ああ、当然ラナーが納得出来ないのも分かる、我俣を言っているのは……えつと。いいの?」

レオンは断られることを覚悟していた、断られなくても大分条件を付けられると覚悟していたのだが。すべて杞憂に終わったようだっ

た。

「本当にいいのか？」

「はい、レオン様がやつと再会できたご友人とのお時間を頂くことはできません、お父様には私からお願いしますからレオン様は何も心配されなくて大丈夫ですよ♪」

「ほ、ほんとうか！ありがとう！ああ！やつぱりラナーは可愛いし優しいな！」

「れ！レオン様!?!」

レオンは嬉しさのあまりラナーを抱き抱え踊り始める。

今日は一日レオン様が嬉しそうに笑われていた日でした。

レオン様をあれ程嬉しそうにさせる人物に嫉妬してしまいます。

でも不思議と怒りは沸いてきませんでした。

友人に再会できたという話をされた時はレオン様が私を置いて王国から出て行かれると思って動揺してしまいました。レオン様はきつとその様な事をされないと分かっています。

なにせレオン様ならアダマンタイト級冒険者に成られるのなんてきつと直ぐのことでしょう、そうなれば。

今以上に名声を手に入れることが出来る、帝国の戦争に出ることが不可能な今ではアダマンタイト級冒険者に成っていただくのが一番の近道。

「なら私はレオン様がこんなに・^鳥エステイーゼ^籠王国から私を連れて行ってくださる最短計画を考えるだけ…ああ、私は他の全てを投げ打ってでもレオン様と供にあります」

「私は…ラナーは貴方様の忠実なペ^モット^ソなのですから」

22話

私達の目の前に居る土堀獣人の数は見えるだけで20体以上はいるはず。それに対して私達は叔父様達が避難したから二人、そもそも私は戦力にならないから実質目の前で土堀獣人と対峙している第三王女専属の男性ただ1人。

「つたく、俺の後ろから出て来たら駄目だからな？」

男性は私の方へ振り向く、苦笑いをしているがどこか懐かしいものを思い出しているかのよう感じた。

「さあ、モグラ共…この俺と戦うなんざ100年以上早いんだよ！消えうせろ。連鎖する龍雷！」

目の前の男性が腰を落とし、槍を横に構え魔法を叫ぶと突き出した左手から洞窟を埋め尽くすかと思うほどの雷が土堀獣人達へと襲い掛かる。

雷は全ての敵殲滅するかのごとく突き進む、その光に飲まれていく土堀獣人達は断末魔を上げ死んでいく。

その凄惨な光景よりも私は男性の横顔から目が離せない、その横顔は道中に冒険譚を話してくれていた溫柔な人ではなく。

先程とは打って変わり、冷笑を浮かべ敵が倒れている様を見ている。

それはまるで別人のようで。

まるで別人格のようで。

私はそれが。

その姿が。

「かっ…いいい…」

王都に有る冒険者組合は朝から静寂に包まれていた、静寂といっても小声で話をしている者が多いため無音と言うわけではない、そんな

組合の扉を開いたのは白銀の鎧を身に纏い背中に6本の浮遊する剣を携えた1人の女性。

「今日は随分と静かなのね、人が居ない訳ではないみたいだけど」

女性が現れたことに気がついた数人の冒険者達は戸惑いと救いを求めへ視線を送る。その視線に気付き直ぐ近くにいたマジックキヤスターの男性の方へと歩いてゆく。

「随分と静かだけど何かあったの?」

「は、はい!あ!す、すみません」

マジックキヤスターの男性はまさか自分に声を掛けられると思っておらず、あまりの緊張から声が裏返ってしまった。

「いえ、私も突然声をかけてごめんなさい、それで何があったの?」

「は、はい。随分と珍しい人が来たのでここに居る全員が何かあったのか、どんな事を話しているのか気になって聞き耳を立てているんです」

事情を話す男性はどこか恥かしそうだ。それもそうだろう、自分達がしている行動は物珍しさに聞き耳を立てている野次馬なのだから。

しかしそれでもその人物の会話は気になってしまうのだ。

「そう。それで、その珍しい人というのは誰の事なのかしら?」

男性がその人物の方へと視線を向ける、そこにはローブを纏った1人の男性が受付嬢となにやら話し込んでいる様子だった。

「あら?もしかして」

女性は話し込んでいる男性の姿に覚えがあった。

「だから姫さんの許可は貰ってるって何回も言ってるじゃん、なんでこんなに時間掛かるんですか?」

「い、いえ、念の為組合長に確認を取ったところ王女様にも確認を取るとの事ですので」

「だから許可は下りてるって何度も…あーもう、友達を待たせて有るんで早くしてください」

聞こえてくる内容からして男性が何を依頼しているのかは分からないが揉めていると言う事は分かる。男性には覚えが有るし先程から話に出てくる姫様と言うのは自分の親友である第三王女のラナー

の事だろう。

「ここに来るなんて珍しいことも有るのね、レオン」

レオンが振り向くとそこには見知った人物が立っていた

「ん？おお、久し振りじゃないか。なきむ「でえええいつ！」どっわ、危ないじゃないかラキユース!？」

ラキユースと呼ばれた女性はレオンが言葉を最後まで言い終わる前に顔面へアッパーを繰り出していた。

ラキユース・アルベイン・デイル・アインドラ。王国のアダマンタイト級冒険者チーム『蒼の薔薇』のリーダー。元々貴族と言うことも有りラナーとは交流もあり親友と呼べる間柄である。そんな事も有りラナー専属の護衛であるレオンとも付き合いは長い。

「ごめんなさい、なにか不穏な事を口走ろうとしていたので手が勝手に動いてしまったわ」

「まったく、初めて会った時はもっと可愛げが有ったのに。一体どういう育ち方をしたらこんなな暴力的に育つんだか」

「それはまるで今の私は可愛げが無いみたいない方ね」

「そらーあの時はもっと小さかったし。俺の話を楽しそうに聞いているじゃないか、あの頃の素直なラキユースは一体何処に言ってしまったんだ…あ、勘違いするなよ…今でも外見は可愛いままだぞ」

レオンの返しにラキユースは頭を抱える。ラキユースはラナーに頼まれ幾度と表立って依頼できないような仕事を引き受けていたのだ、表立って依頼できないといっても王国に利益となることをラナーの願いで実行してきただけなのだ。その話し合いの時にレオンが居た場合は大体からかって来るといっているのでこのやり取りもよくある事だ。

「はあ…それでこんな場所までラナー専属の貴方が何の用なのかしら？」

「そら、そんなの見たら分かるだろ？」

レオンの返しに苛立ちを覚えるがわざとやっているのが分かっているので聞き流す事に。

ラキユースはレオンの外見に注目する。手には何時も護衛のとき
に持っている槍は無い、見たことが無い普段纏っていないローブを
纏っている。ローブも一見すると普通の冒険者が所有している物と
変わらないが、恐らくレオンの私物だろう、なにかマジックアイテム
である可能性が高い。

「冒険者組合に何か依頼があつたのかしら？ラナーなら私に依頼して
くると思うから、貴方の個人的な依頼と言う事かしら？」

「ちがうちがう、はあ…付き合い長いんだからこれぐらい分かつて貰
わないと」

やれやれとため息をつきながら肩を落とす。何処から見てもお
ちよくっているのが分かる。さすがにラキユースも少し苛立ち始め
る。が、空気を察したのかタイミング良く受付嬢がなにやら書類を
持って来た。

「レオン様、大変お待ちいたしました。ラナー王女様にご確認したと
ころ確かに許可が下りておりましたので冒険者としての登録を完了
させて頂きます。此方がカツパーのプレートとなっております」

冒険者としての登録、その一言で2人のやり取りを見ていた冒険者
達が驚きの声を上げる。第三王女の専属護衛が冒険者を始めると言
うのだ。

「…ちよつと待つて貰えるかしら。え、どういふこと？ラナーの護衛
を辞めると言うことかしら？」

ラナーのレオンに対しての恋心を知っているラキユースからする
と途轍もない衝撃だった。

「違う違う、ラナーの護衛は続けるさ。んで休みの日に冒険者をする
ことにしたんだ」

「どんな風の吹き回しなのかしら？前は『冒険者なんて興味がない』と
言っていたと思つただけけれど」

「前と状況が変わつてな、友人と再会してまた一緒に冒険者を始めよ
うって話になつたんだ」

「貴方の友人ねえ…」

ラキユースは考える、恐らくだがレオンの「再会した友人」と言

うのはこのリ・エステイーゼ王国の友人では無くレオンが前に暮らしていた国の友人なのだろう。

「まあそんな訳で俺も本日から初心者冒険者って事だ、よろしくな『ラキユース先輩』」

ラキユースは笑いながら冒険者組合を出て行くこうとするレオンを急いで引き止める。

「まあ、待ちなさい。貴方は駆け出しの冒険者なんですよ？なら色々とは分からない事も有るだろうからこの先輩冒険者の私が一緒について行ってあげるわ、あ、でも貴方の友人に迷惑かしら？」

「ん？着いてくるのか？まあ彼ならオマケが付いてきても何も言わないと思うけど…まあ、いつか。それではラキユース先輩御手をどうぞ」

「あら、エスコートして頂けるのかしら？」

ラキユースにとってレオンの友人と会えるというのは、今までレオンが話してくれた御伽話とは違う話を聞けるチャンスかもしれない。

（様々な視点の話というのは大事なもの！色々聞いてノートに書き込まないと！）

ラキユースの手を掴むとレオンは転移の魔法を唱える。

「さて、彼も待っているだろうからさっさと行きますか、目的地はエ・

ランテルな転テレポーション移」

23話

ほんの一瞬で見えていた景色が変わる、先程まで王都の冒険者組合に居たというのにレオンの手を掴んだと思えば既に周りは見慣れない街並みだ。

「エ・ランテルの冒険者組合に堂々と来れる貴方の度胸がすごいと思うわ」

「ん？そうか？」

彼は私の心配など露知らず、エ・ランテルの住人の視線など気にも留めていない。

「ラキユースはエ・ランテルにはよく来るのか？」

「カツツエ平野での依頼では拠点として利用した事は何度か有るけど、私は基本的に王都周辺での依頼が多いからエ・ランテルに来る事はそこまで無いわね」

至極当然な事だ、王都から距離があるのだからわざわざ蒼アダマントの薔薇タイト級冒険者へ依頼を出すことなど余程のことが無い限りはないだろう。何より私は王都の冒険者組合を拠点に活動しているのだ、そんな自分達がエ・ランテルで依頼を何度も受けてしまえばエ・ランテルの冒険者組合に所属している冒険者たちは良い顔をしないだろう。彼等だつて自分達の仕事を他所者に取られて気分が良いわけがない。

自分達アダマント級冒険者が必要だと判断された時だけ出向けば良いのだから。

「そういう貴方は如何なの？まあラナーあの子と一緒に居るのが殆どだから中々王都から出る機会が無さそうだけど」

「まあこつそり来た事は何度かあるかな？それに来ても基本長居はしないな」

『長居はしない』理由は恐らくだが分かる。10年前の戦争が原因なのだろう。

「ここがエ・ランテルの冒険者組合か、建物は王都の組合とそこまで違いはないんだな」

「それはそうよ、組合の建物なんて何処も同じようなものよ？組合の

雰囲気というのは様々だとは思うけど」

組合の中に入ると視線が自分に集まってくるのが分かる、驚きの声
が聞こえてくる。最近では王都の冒険者組合では少なくなってきた反
応だ。

王国には2組のアダマント級冒険者のチームがあるけど、その
どちらも王都を拠点に活動しているものね。初めて
アダマント級^私冒険者を見たって人が居てもおかしくはないし。

「あんれー？居ない：おかしいな」

「まだ来てないだけじゃないかしら？」

「いや、時間はきっちり守る人だから間違いなく来てるはず。俺の方
が登録で手間取って待たせてる側の人間だ」

「依頼を受けて先に出発してるんじゃないの？」

「あー待たせ過ぎたから可能性は有るな。俺ならすぐ追いついてくる
と思うだろうし、ちよつと受付で聞いてくるわ」

レオンが受付へ行き1人になると周囲の話し声もよく聞こえてく
る。

『アレがアダマント級冒険者：やっぱり雰囲気が違うな』

『蒼の薔薇のリーダー、話には聞いていたけど本当に美人だな』

『どうしてエ・ランテルなんか？』

『そらーお前：なんでだろ？』

『一緒に居た男の護衛じゃないのか？カッパーのプレート着けてたみ
たいだし』

『カッパーの冒険者がアダマント級冒険者に護衛を頼むって：そ
んなのありか？よっぽどの金持ちじゃないと無理だろ』

『あー貴族のボンボンが冒険者になったからそのおもりって事か？』

『けっ、貴族様の遊びって事かよ』

(随分な言われようね、確かに貴族が良いように思われていないのも
事実。だけど勝手な憶測だけで悪評を立てられるのも腹立たしいし、
一言言っただけで来ようかしら)

その声の主に一言文句を言いに行こうとするとラキユースの前に1人の男が現れた。

「これはこれは、アダマンタイト級冒険者チーム『蒼の薔薇』のラキユースさん。今日は如何なさいましたか？」

「あら、アインザックさん」

ラキユースに声をかけてきた男の名は『プルトン・アインザック』エ・ランテルの冒険者組合の組合長。

彼がラキユースに近付くと噂話をしてきた者達が一齐に口を閉じた。アインザックとラキユースがどの様な会話をするのか聞き耳をたてる為ではない、彼らにとって噂話よりも冒険者組合長であるアインザックに目を付けられる方が問題なのだ。

「今日は友人の付き添いで来ただけです、蒼の薔薇としての依頼できただけではありません」

「付き添い？何か困難な依頼内容でも来ていたのかな？アダマンタイト級冒険者を同行させるような依頼は聞いてはいないが…」

「そんな大袈裟なことでは無いです。今日冒険者になった友人のお目付役の様なものです」

（成る程、ラキユースさんは元々貴族の出身。なら友人とは言っているが何処かの貴族かも知れんな、お目付役と言うのも実際のところはその貴族が死なない様に護衛することが目的なのかも知れんな）

「それはそれは、アダマンタイト級冒険者から直々に教えを受けれるなど…羨ましい限りですな」

（王都の組合では無くわざわざエ・ランテルまでやって来たのは貴族としての面子を保つためか。王都周辺で怪我をしたりしたら噂がすぐさま広がる恐れがある。それにラキユースさんに護衛をして貰ったと言うことを隠すためだろう）

アインザックはラキユースの連れて来た人物への危険度を心の中で上げて行く。相手が本当に貴族なら注意が必要だ、下手に怪我を負って組合に難癖を付けられる恐れがある。全ての貴族がそうであるとは言わないが貴族とは曲者揃いだと言う事だ。

「いやー本当に依頼を受けて出発した後だったわ」

2人が話をしていると肩を落とすレオンが近づいてくる、アインザックは目の前の男を観察し始める。貴族の顔を多く知っているわけでは無いが何処かで見たとある気がするのだ。

身に付けているローブはとて無いがカッパの冒険者が身に付けている様なものでは無く、少なくともオリハルコンやミスリルの冒険者が身に付けている程の作りをしている。腰にはローブで隠れどの様な形状の物かは判断できないが4本の剣が確認できる。

「あら、置いてけぼりね。それよりもレオン挨拶を、こちらエ・ランテルの冒険者組合長のプルトン・アインザックさんよ」

「なんと、これは大変失礼しました。本日より冒険者に成ったばかりのひよっ子ですがどうぞお見知り置きを。名をレオン・D・ファンションと申します」

レオンが名乗ると周囲のざわつきが一層大きくなった、このエ・ランテルでその名を知らない者など居ないと言っても過言でも無い。10年前の戦争、あの出来事は未だに語り継がれている。

それは良くも悪くも。

「レオン・D・ファンション…まさか第三王女様の!?こ、これは『エ・ランテルの英雄』殿とお会い出来るなど思ってもおりませんでした」
「エ・ランテルの英雄ねえ…その様な大層な肩書きを頂けるような男では無いですよ。何より今の私はカッパの冒険者です、1人の冒険者として扱って頂けると嬉しいです。色々とご教授頂きたいのですが友人を待たせておりますのでこれで失礼します」

そう言うトラキユースの腕を取り入口へと向かう、レオンの発言や行動に周囲のざわつきが落ち着く様子は無い。カッパの冒険者がアダマンタイト級冒険者を連れて来ただけでなく、カッパの冒険者が第三王女お抱えの護衛であり、その護衛は10年前に起こったバハルス帝国の侵略を止めた英雄なのだ。周囲が驚くのも仕方ない事だろう。

「ちよ、ちよっ!?友人がどこに行ったのか分かっているの?そもそも今から追いかけて間に合うの?」

「なんでも薬師の人から名指しの依頼を受けたらしいんだわ、んで目

的地の場所も聞いたからさくつと追いかけて合流するぞ」

2人が組合を出て行った後に残されたのは様々な憶測の声、『護衛を辞めたのか?』『王女様の命令なのか?』『ラキユースとはどの様な関係なのか?』『英雄と呼ばれているのにカツパーの冒険者なのか?』『友人って一体誰だ?』組合の中が熱気に包まれつつあるがそこはアインザックによって収まるだろう。

「あれが噂に聞く『エ・ランテルの英雄』か…いや…『エ・ランテルのー』」

24話

馬車の前を守る様に歩く4人と馬車の後ろを守る様に歩く2人の姿。

「本当によろしかったのでしようか？」

「何がだ？」

「その：レオンさ……んを待たずに依頼をお決めになられ、ご到着を待たずに出立してしまった事でございます」

後ろを歩く2人、巨大なグレートソードを背負う漆黒の全身鎧フルプレートの人物へ女性は問う。

女性の名はナーベラル・ガンマ、戦闘ブレアデスメイドの1人で有る。今回至高の御方々の護衛役としてアインズ・ウール・ゴウンもとい冒険者モンと冒険者レオンのパートナーとしてナザリックより派遣される事となったのだ。

アインズはレオンがこの世界には、自分達にとって脅威となる物がほとんど無いから護衛は必要無いと言っていた事を守護者達に説明したのだが、守護者達からすれば至高の存在で有るアインズとレオンにもしもの事が起こってはならないと護衛を付ける事を条件にアインズの冒険者としてナザリックの外へ出る事を容認したのだ。

「ああ、レオンさんとは昔から現地集合でクエストをこなしてたから問題無いだろう、特に周回クエストの時なんてお互いが途中から合流なんて良くやっていた話だからな」

「なるほど、しかし尚の事よろしかったのでしようか？」

「ん？」

「今回の依頼は『カルネ村への護衛』となっておりその様に受付嬢ミジンコに言伝を申し付けておりますが、どの様なルートで行くかなどの説明はしておりません」

「…」

アインズはユグドラシルの癖でレオンは後からでも追い付けると仮定して依頼を承諾し、出発をした。しかし、それはユグドラシルな

らば問題がないと言う事だ。何度も同じクエストをこなし、やる事が毎回同じ内容ならば細かい連絡無しでも問題はない。

しかしここはユグドラシルの世界では無い、初めて会った依頼主と依頼内容。せつかくの指名という事もあり、そのままカルネ村に出発という流れになってしまった。

（しまったー！レオンさんはカルネ村によく行くって言ってたから何も問題ないと思って出てきたけど、一度行った場所なら今後は転移の魔法で移動するか!?そうになると、カルネ村に行くルートは2つ有るという話だ、もしもう一本のルートに行ってしまった場合、合流する場所がカルネ村目的地になってしまう可能性がある！）

「し、心配するなナーベ、レオンさんなら能力を使って我々の位置を見つける事など容易いからな。なら我々は少しでも時間を短縮できる様に先に出発しておくのが正しい判断という事だ。ほら、レオンさんこの数日間は色々と予定が詰まっていると言っていたからな」

「成る程、今までの経験を生かし、お互いの事を理解し尊重していたからこそその行動なのですね。流星は至高の御身！感服いたしました」

アイنزズという言葉に至高の41人が積み上げてきた信頼関係を感じたナーベラルは自身の役割を忘れ深々と頭を下げた。

「よさないかナーベ、先程もそうだがここはナザリックでは無いのだ、今の我々は一介の冒険者モモンとナーベなのだから」

先程も共に依頼を受ける事となった『漆黒の剣』のメンバー、ルクルトトにからかわれアルベドの名前を出してしまうという失態を犯したばかりなのだ。

アイنزズもナーベの一度や二度の失敗を咎めるつもりはない、だがこのままの調子で何度も失敗されるのは問題だ。そんな2人を他所に漆黒の剣のリーダー、ペテルが声を掛けてきた。

「どうかしましたか?」

「いえ、何も問題有りません」

「そうですか、この辺りから少々危険地帯になっていますので注意してください」

危険地帯、普通の冒険者ならば気を引き締める必要が出てくるのだ

ろう、実際アインズもレオンからもたらされた情報が無ければ気を引き締めただろう、戦士としての自分が対処出来なければ魔法詠唱者として多少本気を出すつもりだった。しかしレオンのもたらされた情報ではエ・ランテルやカルネ村の周辺で出没するのは小鬼や人食い大鬼、森の中に入れば巨大昆虫や絞首刑蜘蛛などでどのモンスターもアインズにとって何の問題もないのだ。

（レオンさんから情報を仕入れているから安心して進めるな、戦士としての自分でも全く問題無い）

「了解しまし「ロー」？」

何処からか声が聞こえた、何か言葉の様に感じたが何と云っていたのかまでは分からない。周囲を見回すと漆黒の剣の面々も聞こえたのだろう、周囲を警戒している。

「ルクルット！今の聞こえたか！」

「ああ！でも助けを呼んだりする感じじゃなかったぞ、多分『みつけた』って言ったんだと思う！」

『見つけた』それは人が無くしたものや探し物などを発見した時に発せられる言葉だ、この場にはその様な言葉を言うような人物は居ないだろう。

しかしアインズには1人心当たりがあつた。何処から現れるのかは分からないがきつとレオンが自分達に追いついたのだろう。

「きゃー！！早く！早く！！」

「ん？」

「女性の悲鳴だ！一体何処から!？」

レオンの声だと思っていたが、今自分の耳に届いたのは間違いなく女性の悲鳴だった。それも鬼気迫るものを感じる。レオンが追い付いたのではなく近くに誰か人がいてその人が襲撃されているのかもしれない。

アインズも改めて周囲を見渡すが自分達以外の人物は見当たらない、しかし悲鳴は自分達へと近づいてくるではないか。

「飛行」

悲鳴が大きくなったかと思えばアインズは自分の隣から友人の声

が聞こえ、その後自身の周囲にとつてもない風が巻き起こり砂塵が起こった。

舞い上がる砂埃に驚く周囲を他所にアインズとナーベラルはアイテムによつて視界が問題無いなくクリアに見えている、その砂塵の中央には破顔した友人の姿が有った。

「うわ！何が起きたんですか!?!」

「ンファイレアさん!?!ご無事ですか!?!」

「襲撃か!?!」

興奮する馬車馬をなだめつつ、漆黒の剣の面々も砂塵が落ち着くのを待ちその発生源と思われる方向へ顔を向ける。

其処には見事な鎧を着用した女性をお姫様抱つこで抱き抱えた男が立っていた。

男の顔は楽しいことでも有ったのだろうか白い歯が見える程の笑顔で立っている、それに対し抱き抱えられている女性は男にしがみ付き、顔は恐怖に彩られ青を通り越して真っ白になっているでは無いか、どれだけの恐怖を味わえばそれ程の色になるのか。

「はんろー！まいふれんず！」

25話

既に依頼を受けカルネ村へ向かったアインズを追い掛ける為、レオンはラキユースを連れ、遅れた分を取り戻すべく足早にエ・ランテルを出立したのだ。

「ねえレオン、一つ聞いて良いかしら」

「なんだ俺のスリーサイズは教えてやらんぞ？」

「そんなの興味無いわよ、聞きたい事は一つよ。ええ、確かに理には叶っているという事は認めるわ、普通に走って追いかけたらいつ追いつくか分からないものね、聞いた話だとエ・ランテルからカルネ村に向かう道は2つあるらしいから違う道を選んで合流できない可能性も排除できるものね、ええ、理屈は理解できるのよ。でもね、今私の置かれているこの状況を説明して貰えるかしら？」

普通先行している者を急いで追い掛ける場合。自分達が走って追い掛ける、馬などを借りて追い掛ける、目的地に行く馬車に同乗させて貰う、こういった選択肢が一般的だろう。そう『一般的かつ常識的』に考えた場合であれば。

今現在レオンとラキユースが居る場所はエ・ランテルから800メートルほど離れた位置、そして、地上から見て400メートル程の『上空』。

「質問しておいて自分で答えを言ってるじゃ無いか、走って追い掛けるとか疲れるから却下、馬を借りる？お金が無駄だから1番却下、なら残された選択肢は1つしかないだろ？俺の飛行フライならそれなりのスピードが出せるし上空からなら探し他人も簡単に見つかるってものだろ。あ、分かった、ラキユースはアルカディアの背中に乗りたかつたんだな？そら俺の飛行フライよりアルカディアの方が早いもんな。でもアルカディアは姫様の護衛を任せてきたから居ないんだ、ごめんな？」

「そうね、アルカディアの背中に乗って冒険するのは憧れるわ、竜騎士とかイイと思うわ：違う、私が聞きたいのは私をお姫様抱っこしている必要性よ」

レオンはエ・ランテルの城門を出るとラキユースの意見など聞かず有無を言わず抱き抱え上空へと舞い上がり今に至るのだ。

「そら仕方ないだろ、ラキユースが飛行の魔法を使えるなら個別で行くけど、魔法の使えない人間を連れての移動ならコレが現実的だろ？」

「ぐ、確かにそう言われると何も言い返せないけど…」

「まあラキユースみたいな美人を抱っこできるなんて役得だからな」

「はあ…だったらもつと嬉しそうに抱き抱えなさいよ」

何時もの調子にラキユースもやれやれといった様子だが、どこか嬉しそうに微笑むのだった。

「お！みーっけ！」

「ちよつと、いきなり大きな声出さないで。びっくりするじゃない」

「悪い悪い、でも大きい声出すとストレス発散にもなるぞ？」

「ソレとコレは意味が違うで「あ、飛行が切れる」へ？」

飛行が切れる、レオンがそう呟くと身体が宙へ浮く感覚が襲ってきた、視界も下がり、下から風が吹きつけ始めたでは無いか。言う所の落下を始めたのだ。

ソレに気付いた瞬間ラキユースに途轍もない恐怖が襲って来た。上空400メートルの位置から何も身を守る術がない状態になったのだ。

「ちよつと!?早く飛行を唱えなさいよ！」

「いやー魔力少なくなりすぎちゃったから直ぐには無理かな」

「はあ!?早く！ねえ！そんな事言つてないで早く!!」

地面が近づく恐怖、自身の身体に叩きつけてくる風の強さが落下の速度を否が応でも理解させる。恐怖からレオンの首にしがみ付き飛行の発動を要求するも当の本人は魔力がないからと言って笑っているではないか。

「ねえーお願い！早く!!早く!!!」

この様なところで死ぬのか、もつと沢山冒険をしたかった、カッコいい決め台詞を言いたかった。僅かな時間の中で様々な思いが湧き

上がってくる。

最早ラクユースにレオンの顔を見る余裕は無く、自身を抱きかかえている男の笑顔に気付くことができない。

「飛行」

地面に衝突すると思つた瞬間、身体に起こつたのは大地にぶつかった衝撃では無く、身体が宙に浮く感覚だった。それはエ・ランテルを出た時感じた感覚と同じもの、レオンが飛行フライの魔法を発動した証拠だった。

「おまたせーごめんよー組合の手続きに時間かかっちゃってさーめんごめんごー」

そこにいる者全てが予想だにしなかつた登場をした男は驚いている友人を他所に遅刻の理由を話し出した。

「…まさか上から降つて来るとは思いもしませんでしたよ、なかなか派手な登場ですね」

「驚いたでしょ？ やっぱり登場する時は人が思いつかない様な事をするに限るよねー」

アインズは考える、恐らくこの男なら空からの登場だけでは無く水の中からや土の中からでも現れるのではないのかと。というか今後も後から合流する度にこの様な登場をするのだろうか。

「ところでそちらの方は？ 顔色が優れない様ですが」

レオンにしがみついているラクユースの顔はもともと白かつた肌が更に血の気が無くなり青白く変色していた、しがみ付いている腕の力も抜けぐったりしてしまっている。

「んお!? 大丈夫かラクユース!? 一体何があつたんだ!？」

その場にいた者たち全員が思つただらう、絶対に貴方のせいだろう、と。

「仕方ないなー獅子ライオンズ・ハートのぶごとき心ほら、コレで自分の足で立てるだろ?」

レオンの魔法によって顔色が戻り地面に足を下ろした、地面に降り立つ時に足下を確認するそぶりが有つたのは余程の恐怖が有つた為

だろう。

「はあ：ありがとう、もう大丈夫よ」

「沢山大声出せてストレス発散になっただろ？良い気分転換になった
「そんな訳あるかああ！」ひでぶ!」

レオンが良い事をしたと言わんばかりの鷹揚な態度に腹を立てた
のか、それとも言葉に腹を立てたのかは分からないが、そのどちら共
だろと思われるが。ラキュースの渾身のアッパー、もとい昇○拳がレ
オンの顎に炸裂した。

その瞬間ナーベラルが剣に手を掛け抜こうとする、それに気づいた
アインズがすぐさま剣を持つ手を制止し、小さな声でナーベラルをな
だめる。

「よさないかナーベ」

「しかし、御身に手を挙げた行為は死罪に値すると思われます!」

(NPC達にとったらそうなるんだろうな、でもどう考えても絶対
にレオンさんの自業自得だろうし遊んでるだけなんですよナーベさ
ん!)

「よく見てみるが良い、レオンさんも叩かれたのに笑っているだろう
？アレはレオンさんなりのコミニケーションの取り方というやつだ」
「…畏まりました」

ナーベラルにしてみると至高の御身に手を挙げたラキュースを許
す事など到底出来ないが、アインズの言葉と笑顔で戯れているレオン
を見て剣から手を離れた。

「さて、そろそろ自己紹介をして頂いてもよろしいでしょうか?」

2人のやり取りからかなりの高度から落下してきたという事は理
解出来た。その事に怒りを露わにしレオンに食って掛かるのはアイ
ンズにも十分理解出来る。

しかし、このまま2人を放置し続けるのは危険だ。ナーベラルが納
得していないのだろう、ラキュースに対し怒りを露わにしている、こ
れ以上は色々と危険な状況になってしまう。

「ほらラキユース、戯れるのは後にしろって。ご挨拶ご挨拶」

「そもそも貴方が…まあ良いわ、もつと言いたい事が有るけど自己紹介が先ね。お見苦しいところをお見せしました、私の名前はラキユース・アルベイン・デイル・アインドラ。ラキユースとお呼び下さい。アダマンタイト級冒険者チーム蒼の薔薇のリーダーをしています」

「私の名前はモモン、そしてこちらがナーベです。よろしく願います、しかしレオンさん、てつきりお一人で来られると思っていたのですが」

「んー王都の冒険者組合でたまたま会ってさ、そしたらついて来るっていうもんだから、まあ別に良いかなって。あ、勝手について来てるだけだからお金払う心配とかしないで大丈夫だよー」

本来アダマンタイト級冒険者を雇うとなれば金貨数枚を支払う事になるだろう。しかし今回はラキユースが勝手について来たという事になっているのでレオンは支払うつもりはない様子だ。

「お金に関してはよくわかりませんが…お2人はどう言った仲なのでしょうか?」

レオンが女性を連れて来た事に驚きだが、その女性と楽しそうにじゃれあっているところを見ると余程親しい間柄なのだろうと思考する。

(もしかしてレオンさんの良い人とか!? そう言えばレオンさんの報告書には何名か女性の名前っぽいのが書いてあったな。10年もここにで生活してたら結婚してもおかしくは無いよな…クリスマス忙しい人だしな!)

「うちの姫様とラキユースは親友の間柄らしくてね? 仕事柄俺も良く会ってるんだ。10年くらいの付き合いになるのかな?」

「なんでそこが疑問形なのよ、ラナーとは親友と断言して貰って大丈夫よ」

「さて、モモン君依頼内容の説明をしてもらっても良いかな? エ・ランテルでは依頼を受けてカルネ村に向かったとしか聞いてないんだ」

レオンはカルネ村に向かっている細かい内容など知らずに合流し

て来たのだ、誰が依頼主でカルネ村に何の用があつて向かっているのか。

「ああ、細かい内容を聞いて追いかけて来たわけではなかったんですね。今回我々は薬師のンファイレア・バレアレさんの依頼を受けてカルネ村まで薬草採取の護衛を受けているのです。そしてこちらが依頼主のンファイレア・バレアレさんです」

「どうも初めまして、今回依頼をさせて頂きましたンファイレア・バレアレです。カルネ村までの護衛をモモンさんをお願いしました」

「ああ、護衛の依頼でしたか。冒険者としては初めての仕事ですので色々ご迷惑をおかけするかもしれませんが護衛としての腕は確かだと自負しておりますのでご安心して下さい」

「レオンさん、こちらの4人の方と合同でンファイレアさんの護衛を受けカルネ村まで向かっていたんです。こちらがリーダーのペテルさんです」

アインズは漆黒の剣の4人を紹介していく、しかしレオンからすれば何故他の冒険者と護衛の依頼を受けているのか理解が出来なかった。自分達の実力なら他の冒険者の手を借りずとも仕事をこなせるのだから。

（んーもしかして護衛の依頼は最低人数とか決まっているのかな？だとしたら今後も誰かと組まないとダメなのかな？めんどくさいな、ナザリックから人数調整用に誰か呼んできた方がいいのかな？）

「ペテルさん、こちらが私の友人レオン・D・ファンションさんです。そしてレオンさんの友人…でよろしいですかね？ラキユースさんです」

アインズは何も気にせずに紹介していくが、漆黒の剣の面々からは驚きの声が上がった。自分達の目の前にいる女性は冒険者達の憧れアダマンタイト級冒険者なのだ。王国に2つしか存在しないアダマンタイト級冒険者チーム、その1つのチームのリーダーが目の前に立っている。

「は、初めまして！銀級冒険者チームの漆黒の剣のペテルと言います！アダマンタイト級冒険者の方と仕事が出来るなんて…よろしくお

願います！」

「うおーマジか!?アレがアダマンタイト級冒険者の証か!初めて見たぜ!」

「この様な機会を作って頂いたモモン氏には感謝しかないであるな!」

漆黒の剣の3人がかけてエ・ランテルでは見る事が無いアダマンタイト級冒険者に盛り上がる中、1人ニヤだけは別の人物を敵視しているかの如く睨みつけている。

『エ・ランテルの厄災』：第三王女直属の護衛でありながら貴族に媚びを売る人物……」

「はっ、『厄災』か、そっちの方が浸透してるんだろうな。『エ・ランテルの英雄』なんて貴族どもが風聴し始めたもんだし」

ニヤの視線に気づき、厄災と呼ばれた事に冷笑を浮かべる。

レオンは10年前の戦争によって『エ・ランテルの英雄』と呼ばれる様になった、しかしこの呼び名が浸透しているのは主に王都周辺の町や村だけ、その理由は貴族派が自分達の派閥に居るのが王国ナンバー2の男で、英雄と呼ばれる男だと言う事を誇示したい為。

しかし、戦争の有ったエ・ランテルなどでは『英雄』ではなく『エ・ランテルの厄災』と呼ばれている事が多い。

10年前確かにレオンは帝国の脅威からエ・ランテルを守った、しかしその結果に問題があった。レオンはたった1人で帝国兵4万人を結果的に虐殺とも思える状態で倒したのだ。確かにエ・ランテル側の犠牲者は108人と少数だがそれは問題では無い、結果レオンはたった1人で帝国兵を倒してしまったのだ。

これがエ・ランテルの市民達からレオンが『厄災』と呼ばれる原因だ、いくら自分達の平和を守ってくれたとしても、圧倒的過ぎる力は恐怖の対象でしかないのだから。

「すみません、ニヤは貴族に対していい思いがないもので……」

ニヤの態度に気づいたペテルが急いでフォローする、本人の貴族に対する思いは分かっているし尊重もするがこの場でその態度を出すのは問題だ。少なくとも2日間はともに仕事をする仲間なのだか

ら我慢して貰わなくてはならない。

自分の仲間の行動によって依頼主であるンフィーレアに危険が及ぶ事だけはあってはならないのだ。この様なことで依頼主に危険が及んだなどと冒険者組合に知られてしまつては、別のチームと問題を起こす連中と、今後の仕事に支障が出てしまう。

「ああ、気にしなくていいよ。媚びを売っているつもりは無いけど言っていることに間違いは無いんだから。貴族に媚びを売るか…ラキユース、君にも媚び売つといた方がいいかな？」

「なに馬鹿なこと言ってるのよ。まあ、冒険者の先輩としてもつと敬つてくれても良いのよ？」

「はいはい、とらキユースの言葉を流し進行を妨げた本人だということとを棚に上げアインズ達へ出立を促していく。」

「そろそろ出発しましょうぜ、こんな所で何時迄も油売つてたら目的地までいつまで経つても着かないよ？」

26話

「ゴブリンが15、オーガが6か。さって、どうしたのですかね?」
レオンとラキユースが合流し、森の近くを通るルートを選択する。そうすると当然モンスターとの遭遇率が高くなる、本来護衛の任務ならば依頼主の安全を考慮しこの様なルートを選択することはないだろう。

しかし、アインズが漆黒の剣とモンスター討伐の依頼を受けていた為護衛任務と並行してこなす為にこの様なルートを選択したのだ。すると森に近づくとゴブリンとオーガの集団に出くわした。

「モモンさん、半分受け持って頂けるといいう事でしたが、どうしましう」

「そうですね、適当に向かって来たものを適当に殺していくのでは駄目でしょうか?」

「そうなると片方に集中された場合厄介です」

「モモン君、特に決めてない感じなの?」

「ええ、取り敢えず襲って来たモンスターの半分は私とナーベで対処する話は付いていたのですが細かいところまでは」

「ふーん…えーと、漆黒の剣だっけ?申し訳無いけどあの21匹譲って貰えません?あ、勿論アレらの討伐報酬は折半で構わないんで」

「え!?そ、それは4人であるの数を相手にするという事ですか!」

漆黒の剣とソファイアは驚いた。見事な鎧を纏った戦士、第3位を駆使する魔法詠唱者^{マジックキャスター}、王国ナンバー2、アダマンタイト級冒険者の4人でモンスターの集団を相手にすると言っているのだ、一体どれ程の力を持っているのだろうか。

しかしレオンの考えはそうではなかった。

「んー?違う違う、ナーベとラキユースは依頼主様の護衛だよ、クライアントにもしもの事が有ったらそれこそ大問題だ。だからアレは俺とモモン君の2人じめって事さね」

「なっ!」

そう告げると驚く5人を他所にゴブリン達の集団へとレオンは歩

いて行く。

「んじやナーベにラキユース、少年の護衛は任せたよー」

「やれやれ…それではペテルさん達もンフィーレアさんを守っていて下さい」

「え!?あ、ちよ、ちよつとお!?!」

「おいおいおいおい、幾ら何でもあの数を2人つてのは無理があるだろ!?!」

「良いじや無いですか、モモンさんがどれ程の実力者なのかは分かりませんが貴族に諂って肩書きを手に入れられた英雄様のお手前拝見といきまじょうじやないですか」

「凄く嫌われようね…まあ心配しないでも大丈夫でしょ。ゆっくり観戦させてもらいましょう」

「行つてらつしやいませ」

「さて、モモン君勝負といこうじやないか」

「やっぱりそう言う事だったんですね、良いですよ。ルールは何ですか?」

レオンが全てのモンスターを譲ってくれと言った時点でアインズは予想が出来ていた。それはユグドラシルで金貨集めをしている時に2人で気を紛らわせる為にやっていた『勝負』

普段金貨を集めるだけの何の変哲も無い『作業』を紛らわせる為の『勝負』^{気分転換}だ。

「ルールは点数勝負。ゴブリン1点、オーガ2点合計27点の奪い合いでござい…」

「それで構いません、敗者は?」

「あんなクソ雑魚殺す勝負に罰ゲームいる?なにかある?んー負けたらナーベとラキユースを担いで歩いて行くつてのでどう?」

「その罰ゲームに決まったらレオンさん全力で負けに走るでしょ?」

「何故ばれたし!?!さすインズ様!」

「何ですかそれ…まあ罰ゲームは無しで良いですね」

「それは残念だねえ、さてと、良い距離になって来たかな?」

「ええ、それではこつちの世界に来て初めての勝負といきますか」

レオンは腰に下げている一本の剣を抜いた、その剣はペテルが持っているブロードソードと長さこそ変わらないが刀身の細さはブロードソードとは比べ物にならない程薄く青く輝いていた。

「それは、刀ですか？」

アインズはレオンが装備しているところを見た事のない剣だった。

「いや、刀が出来た時代よりもっと古い時代に作られたとされてる青銅で出来ている剣をモデルに作って見たんだよ、と言っても作ったのは何年も、もとい十何年も前に作って眠っていた物なだけだね」

レオンはゴ布林達に向かって来る方向へ剣を投げ付けた、しかしその剣はゴ布林達へとどく事なくレオン達との中間地点に突き刺さった。

ゴ布林達は自分達の元まで届かなかった剣を嘲笑いアインズとレオンの元へ叫び声を上げながら全力で走り出した。

「何故剣を投げたのかすら考えないで突撃して来る…敵を見つけたら突っ込んでくるのはまるでゲームのエネミーみたいですね」

「知能が無いモノなんてこの程度だよテレポーション転移」

ゴ布林達が地面に刺さった剣の元まで来た瞬間、先行していた3匹のゴブリンの首が空へ舞い上がった。ゴ布林達は何が起こったのか直ぐには理解出来ない、剣が刺さっていた場所へ仲間が近付いた瞬間突如男が現れたと思えば仲間が絶命したのだ。

しかし何が起こったのか理解出来なかったのはゴ布林達だけではない、2人を見送ったペテル達も即座に理解出来たわけではなかった。レオンが突如ゴブリンの元へ移動したかと思えば周囲のゴ布林が絶命したのだ。

「今、何が？」

誰がこぼした言葉だろうか、今起こった出来事への疑問を口にするが答え合わせをしてくれる者は居ない。その場にいた者は1人、ナーベラルを除いて理解が追いついていないのだから。

ゴ布林達は突如仲間が死んだ事に恐怖し歩みを止めるが自身の腕力に絶対の自信を持つオーガは棍棒を握る手に力を入れ直しレオ

ンの元へ突撃して来る。

レオンの横をアインズがフルプレート全身鎧とは思えない速さで駆け抜け巨大なグレートソードをオーガに叩き付ける、アインズの一撃でオーガは真つ二つになる、そのまま近くに居るオーガを2振りで2体倒してしまった。

「モモンさん、貴方は一体」

巨大なグレートソードを片手で振り回す事も常人では考えられない程の事だがオーガをたった一撃で屠ってしまった。それは日々鍛錬を怠らない漆黒の剣でも未だ到達出来ない領域。いや、何年経っても自分達が同じ事をこなせるイメージが湧かなかった。

「こんなものか、もう少し手応えがあってもいいんだが」

「無理無理、所詮はゴブリンとオーガなんだからこの程度が限界よ」

アインズがオーガを倒している僅かな間にレオンも周囲にいたゴブリンを3体倒してしまっていた。

「これでお互い6点か、早い者勝ちって感じかな？」

レオンが残ったゴブリン達へ微笑を浮かべる。

仲間が一瞬にして倒され、倒した人間の笑顔に恐怖を増長されたゴブリン達は踵を返し我先へと森へ向かって走り始めた。本能が決して勝てないと理解したのだろう。

「ここら、敵を前にして背を向けるものじゃ無いだろ」

そう言っレオンは抜いていた剣を鞘に戻し別の剣を抜いた。それは剣として使用するには考えさせられる程美しい装飾が施されている。

「消し飛んじやえー火ファイヤーボール球」

レオンが逃げ惑うゴブリン達に向かって剣を向け火ファイヤーボール球を放つ、握り拳程の火球が放たれゴブリン達の元へ届いた瞬間強大な爆発が起こった。銀級冒険者の漆黒の剣は何度か格上の冒険者チームと合同で戦闘を行った事が有りその際別のチームのマジックキャスターが放つ火ファイヤーボール球を見た事が有るが、これ程大きな爆発は起こらなかった。それはレオンのマジックキャスターとしての実力差を表しているようだった。

「はい、全滅だね。俺の勝利って事で」

「アレ卑怯じゃ無いですか？範囲魔法だけでもズルいのに剣に細工してるじゃ無いですか」

レオンが新たに抜いた剣には魔法効果範囲拡大化が付与されていたのだ。

「この程度の付与効果じゃズルにならないよー何より戦闘内容にルールは設定してなかったしね」

確かにレオンは勝敗の内容は決めたが、戦闘に関してのルールには触れなかった。故に結果こそが全てと言いたいのだろう、アインズに一本取った気分なのだろうレオンは大笑した。

27話

日も暮れ始め一行は野営をするべく準備を始めたのだが。

準備をしている漆黒の剣を他所に頭を下げ、この世の終わりだと言わんばかりに絶望しているレオン。

「もう、いい加減気持ち切り替えなさいよ」

冒険者達は倒したモンスターの適正箇所を組合に提出する事により報酬を手に入れる。

今回アインズと漆黒の剣はモンスター討伐も含めてンファイレアの依頼を引き受けたのだが。

「ゴブリン達の耳が必要なんて知らないよーあそこまで雑魚だったなんて想定外だよー」

今回の戦闘でゴブリンは15体、オーガは6体いたのだから耳の数で言えば21個手に入るはずなのだが…

「あーあ…13体分しか残って無いなんて…絶望したあー!」

レオンが斬り殺した6体とアインズが斬り飛ばした3体は頭部が残っていたが、レオンがファイヤーボールによって纏めて爆殺した12体だけは損傷が激しく、採取出来たのは4体だけとなってしまったのだ。

「もーマジ最悪なんですけどー最初から分かっていたら全員三枚おろしにしてやったのにーちよーさいあくー」

「レオンさん、いつかの時代のギャルみたいになってますよ」

アインズとしては漆黒の剣に自分達の実力を見せつけ、エ・ランテルに帰った時に武勇を広めさせる事が出来れば充分だった。しかしレオンとしては武勇よりも目先の報酬が優先されるようだ。

そもそも武勇を広めるといふ事などレオンは考えていないのでは無いか。

(この先知名度を上げれば今回の損失なんて幾らでも補えますよ!

『先ずはどんな依頼もこなしてサクサクと有名人になって、依頼沢山報酬がっぽがっぽ計画でいこうね!』って言ってた人の態度じゃ無いでしょ!?)

「ええと、レオンさーん。この先まだ森が続くようですし、もっと強いモンスターもいると思われれます。ええと、その：つ、次挽回しましょう?」

レオンの様子に狼狽ながらも至高の御身に何か声を掛け励まそうとするが、ナーベラルにとってこういう時どうやって慰めて良いか言葉が思い付かない。そもそも至高の存在で有る御身がこの様な事でショックを受けるなど思いもしなかっただろう。

「あーん！俺を慰めてくれるのはナーベだけだよお！もー可愛いなあ！」

「な!？」

「ちよお!？」

落ち込んでいた人物とは思えない速さでナーベラルに近付き抱きかかえた、咄嗟の出来事にナーベラルも反応する事ができずレオンのなすがままになってしまっている。

「ああああののれれれレオン様!？」

「もーやっぱりナーベは可愛いなあ！傷ついた俺の心を癒してくれるのは君だけだよー、ほーらもつとダディの胸の中で俺を癒してくれていいんだよー!」

ナーベラルはまさか至高の存在で有るレオンに抱き締められるなど予想しておらず、アインズやレオンを慕っている配下としての喜びと驚きで顔が真っ赤になり頭は真っ白になってしまった。

「ほーら、ダディを癒しておくぶうおはあ!？」

先程と打って変わって満面の笑みを浮かべているレオンの脳天にアインズの拳が叩きつけられた。その衝撃は流石にレオンですらこたえたのだろう、ラキユースに殴られた時とは比べ物にならない程苦痛に表情を歪めていた。

「何やってるんですか!？」

「つおおお…お、お前マジで殴んなよ…いつつー、流石にダメージあるぞ」

レオンにとってラキユースに殴られるのはダメージがなくやられたフリをしているだけだが、レベル100のアインズに殴られるのは

冗談にはならないらしい。

「ちよつとナーベさん大丈夫？嫌なら嫌って言った方が良いわよ？」

そんな2人を他所にラキユースが声を掛ける、しかし思考が追い付いていないのか、ナーベラルは直立不動の姿勢で立っていた。

「ところでレオンさんとラキユースさんの食事はどうなっているのでしょうか？我々もエ・ランテルを出立した時の人数分しか用意していませんでした」

ペテルが食事の準備をしながらレオン達を伺う。元々カルネ村へ行くまでに一泊、カルネ村で一泊、帰りはカルネ村を早朝に出立すればエ・ランテルへ夜には戻って来れる計算だった。

冒険者と言うのは道中の事を考え、出来る限り荷は軽くしたい為余分な物は持ち運ばない。ルクルットが作っているシチューならば後から合流したレオンとラキユースにも分ける事は出来るが、主食と成るパンの数が足りない。そもそもシチューを取り分けるお椀が無い。「あーそう言えば何も準備してなかったな。ラキユースは何か持っているか？多分持つてないとは思っただけど」

「勝手に決め付けないで貰えるかしら？…って言いたいところだけど私も何も持つて来てないわ。元々王都の組合に依頼が来ているか聞きに行っただけだったし、エ・ランテルではどこかの誰かさんが有無を言わさずさらわれたから」

ラキユースは王都から流れ作業の様にエ・ランテルまで移動し、アインザックと話しているところを詳しく説明されない状態でレオンに連れてこられた為身に付けている武器以外何も用意出来ていない。寝床に関しては今まで様々な状況下で冒険をして来たラキユースとしては何も無い状態での野宿など1日なら問題はない。

「んーそうか…大丈夫です、我々の分は私が持つて来ることになります」
「作ってくる？ええと…どう言う事でしょうか？」

「ちよつとレオン？今から食べれそうな物を探しに行くつもり？」
「何言ってるんだラキユース、俺は作って来るって言っただぞ？」

他の作業をしていた面々も手を止めレオン達の様子を伺っている、

何も準備をしていないと言っていたにも関わらず、この男は作ると言っているではないか。

皆は考える、今から何も無いところから食材を創り出すとでも言うのだろうか。

「さてと、依頼主には断りを入れなきやな。ンフィーレアさん少し宜しいでしょうか？」

「はい、何でしょうか」

「大切な仕事の最中に申し訳ないのですが、少しの間離れ得る事を許しては頂けないでしょうか？勿論私が離れている間はモモン君が私の代わりに2倍働くので、何か有った際にはラキユースをこき使って頂いて構わないので」

「え？ええ、少しの間でしたら構いませんけど…」

やはり今から食べれる野草か動物でも探してくるのか、皆その考えに行き着く。

しかし。

「それは良かった、有難うございます。それでは少々失礼致します」

レオンは微笑を浮かべンフィーレアへ頭を下げる。

何でも貴族に準備させてるからこういう事になるんじゃないんですかね

「ニニヤー！」

本人は囁いただけのつもりだろう、しかし負の感情を持った言葉とは存外人の耳に届くものだ。その言葉に誰よりも早く反応したのは流石は野伏^{レンジヤ}という事だろうか、ルクルツトがニニヤを咎める。

「も、申し訳ありません！ニニヤはお姉さんを貴族に連れて行かれた過去があつて…本当に申し訳ありません！ほら、ニニヤも謝るんだ！」

ニニヤも流石に自分の言葉に負い目を感じたのか不満気な顔で謝罪をした。

「すみませんでした…」

謝罪を受けたレオンは何処吹く風なのか首を傾げている。

「えーつと…何か仰いましたか？すみません、聞こえなかったもので。」

お気になさらず?」

「え? ああ! そうですね、きつと気のせいだったんでしよう!」

ペテルはレオンが聞こえているがその場の雰囲気を感じて聞こえなかった事にくれたのだと思えば安堵する。

(レオンさん慣れてるなーこういう僻みみたいなのに慣れてるのかな?)

アインズはレオンの返しに感心しているが、この場でただ一人納得出来ない人物がいた事をアインズは忘れていた。

「ブラナリア下等生物が…いい加減舌を引き抜いてあげましょうか」

ニニヤのレオンに対する今までの言動に我慢の限界が来たのかナーベラルが怒りに表情を歪めている。

「よさないか、ナーベ。空気を読まないか」

「しかし!」

仲間を馬鹿にされれば怒るのは至極当然だ、ペテル達漆黒の剣のメンバーとして仲間を馬鹿にされれば怒るだろう。故にナーベラルの反応は仲間思いの者ならば納得のいく行動だ。

「もーナーベったらーそんな怖い顔しないの! 可愛い顔が台無しじゃん!」

一触即発の空気を読んだのか読んでないのかは定かではないがレオンが満面の笑みを浮かべナーベラルへと近づいて行く。

「ナーベの気持ちは嬉しいけど俺何も聞こえなかったんだって、ほらスマイルスマイル! ……」

「!? 成る程、畏まりました」

レオンがナーベラルの頭を撫で耳元で何かを囁いたように見えたが、何と言ったのかは分からなかった。だがその言葉に納得したのかナーベラルは冷笑を浮かべ頭を下げた、まるで先程の怒りなど何処かに置いて来たかのように。

(え、なに!? 何を言ったらナーベラルをあそこまで落ち着かせれるの!?)

今まで自分が何を言っても渋々従っていたナーベラルが素直にレオンの言う事を聞いて落ち着いていないか。

「それではンファイアレアさん一旦失礼します。それじゃあラクユース、俺がいない間ぐらいは働いといてな」

アインズとしてはレオンが何処かに移動する前には是非ともナーベラルの落ち着かせ方を聞いておきたい。レオンを手招きすると皆から離れ静寂サイレンスの魔法を掛ける。

「レオンさんさつきなんて言っただけですか？あんなに怒ってたナーベラルが別人みたいになってるじゃないですか」

「えーそんなに難しい事なんて言っただけだよ？ただ優しくスマイルスマイルって言っただけだよー」

「実際は？」

『弱者の遠吠えにいちいち反応するものじゃないよ。強者とは吠える犬をいつでも好きに出来るんだから。だから君も楽しみにしておくと良い、あの遠吠えが絶望悲鳴に変わるのを』

そう言ったレオン友人の顔はこの世界に来てから見たことがない程の笑顔だった。